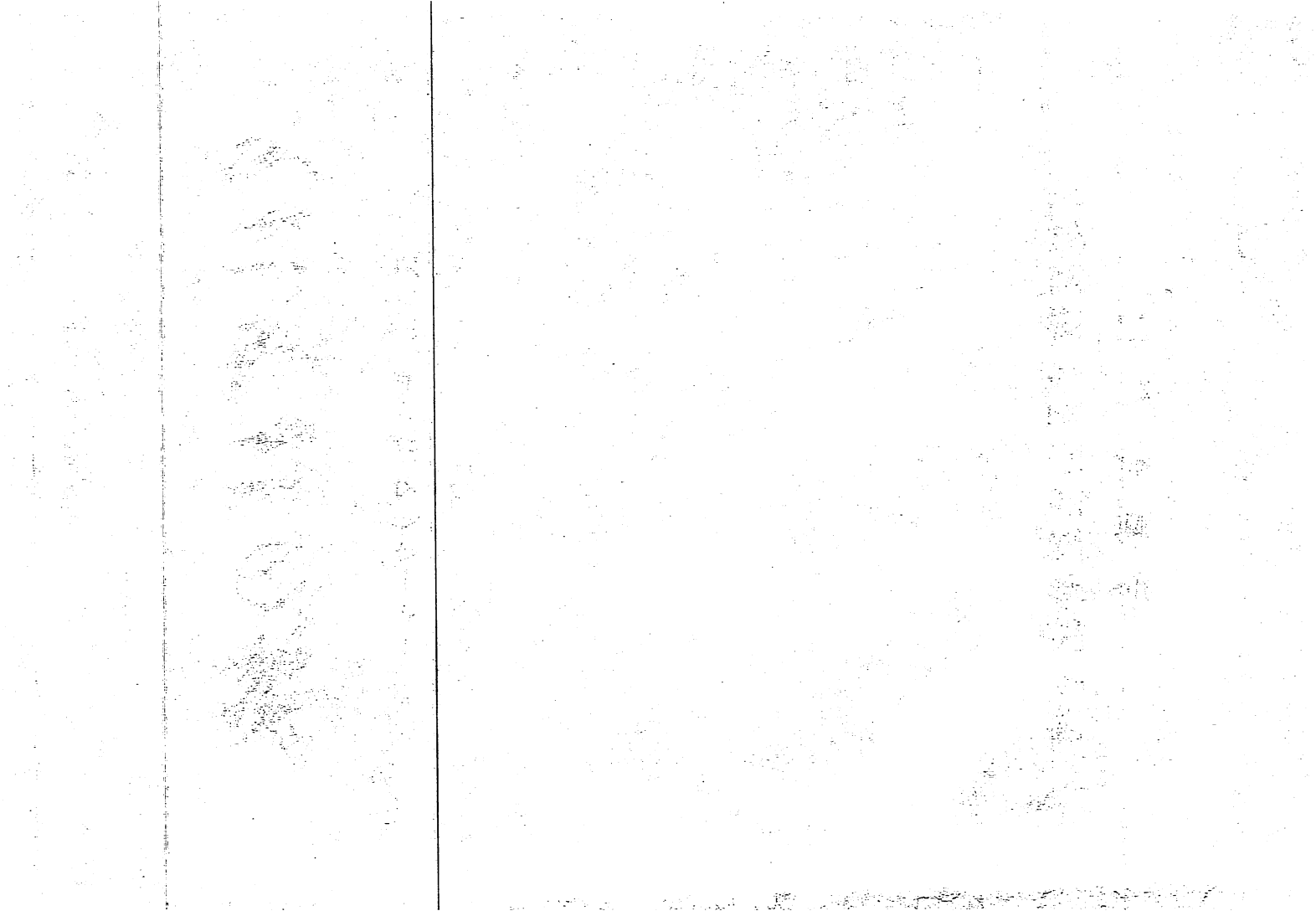


それぞれの旅

徳さん、早べん、マッカーサー

川越高校第五回生還暦記念誌
刊 行 委 員 会



はじめに



川越高校第五回生
還暦記念誌刊行委員会

「吾れ思う 故に吾れ在り」

昭和九年、十年生まれが還暦を迎えた。もの心がついて知らされた「人生五十年」思想からいえば、すでに長く生きすぎた。だがいまや「人生八十年時代」に入り、いまだ我々は若造である。

とは言っても六十年の人生はそれなりに重い。悩み、苦しみ、悲しみ、そして喜んだ長い年月。元号も昭和から平成へと変わり、まもなく20世紀から21世紀に移行する。

世界大戦も経験した。高度経済成長も果たした。政治的には依然として後進国だが、日本の経済と文化を支え、敗戦国から先進国の仲間入りを果たす原動力となったのは、まぎれもなく我々の世代である。世界に冠たる海上ハブ空港「関西空港」は、いまや日本の表玄関として恥じない機能と設備を整え実^{まじ}に堂々たるものである。だが、ここから指呼の間にある神戸は阪神大震災で壊滅した。同時多発の火災に為す術^{すべ}を失った。五四〇〇人以上もの尊い人命も失われた。何故なのか。どこかおかしい。一年前のロスアンゼルス大地震で崩壊したハイウェイを指さして「日本の技術ならこんなことは絶対ない」とせせら笑った日本の学者や関係者たち。「人智の及ばざるところ」ではすまされない。どうにもアンバランスだ。

国民を恐怖のどん底におとした「サリン事件」、次いで「警察庁長官狙撃事件」等々で日本は世界一治安の良い国から、一番危ない国に転落した。ゴリ押ししてきた「世界都市博」が無党派層の支持で当選した一都知事によって直前に中止になった。世紀末的現象、／＼だけでは済まされない。

いまや日本は富める島国なのか、はたまた病める大国なのか……。

驕るニッポン久しからず。信心深く律儀で我慢強い民族だった日本人はどこへ行ってしまったのか。

戦後強くなった「女と靴下」は五十年経って女性益々強くなり、靴下は商売上再び弱くなった。そして男も弱くなった。定年後の亭主は粗大ゴミと化し、濡れ落ち葉となり果てた。

これではならじ。日本男性は本来の姿に戻らねばならない。世界平和を探求し憂国の士であらねばならない。六十歳は人生の道程の一通過点にすぎない。「人生末」まではまだ時間がある。頑張れ六十歳、／＼還暦を迎えたいま、来し方を偲び行末を思い、それぞれがここに己の文を記す。

「六十歳　いま吾れ在り」

ホレ、二十一世紀が手招きしているじゃないか。

一九九五年六月

(文責・加藤博之)

川越高等学校第五回生還暦記念誌

刊行委員会（アイウエオ順）

浅海	守	石井	一	猪鼻	三男
岩澤	達徳	鵜飼	三郎	小高	芳男
鹿島泰次郎	加藤	博之	北田	啓一	
小久保	東	塩野	賀一	筋野	恒吉
染谷	潔	田口	晨一	中根甚一郎	
日高	和美	柳川	正雄	吉崎	秀一

それぞれの旅 目次（順不同）

はじめに

写真／校歌／年表

刊行委員会

恩師特別寄稿

新任教員・ピテカン

.....

小泉 功 1

一、「徳さん」——恩師と私

徳四郎先生と私

.....

青柳 邦彦 4

川高時代の想い出

.....

猪鼻 三男 6

佐藤徳四郎先生と「獺祭」

.....

落合 好雄 8

佐藤先生のこと

.....

小久保 東 11

恩師のこと

.....

高野 達雄（旧姓 新井）

12

「徳さん」の思い出

.....

原澤 良造 14

二、思い出——川高時代

高校時代・雑感	浅田豊彦	17
KRC	岩澤達徳	19
回想・「川高時代」	加藤忠義	21
高校の頃	関口一郎	24
四十年前を思う	斉藤弘	26
川高野球部卒業、回想、近況	篠沢稔夫	27
上海帰りのリル	平不二夫	29
あの頃	高山勇一郎	31
回想「私と駅伝」	東島太一	33
真っ白なバスケットシューズ	戸田敏雄	35
五十の手習い	畑梅三	37
感懐	堀井清史	38
大東亜戦争の思い出	矢部武四	40
思い出すままに	山田恒雄	41
回想「私と運動」	横山和夫	43
還暦を迎えての感慨	吉田茂	45

三、回想——私の歩んだ道

初めてのスキー	吉田利行	47
四十四年前のビデオテープ	米山大恵	49
純粹な国民学校生	渡邊茂	51
忘れ得ぬこと	渡辺久純	53
私の回想 人生は馬拉ソンだ！	浅倉正夫	55
小さな履歴書	鵜飼三郎	57
四十二年が過ぎて	榎本茂	59
土と共に四十年	川野達也	61
退職を目前にして今感じていること	栗原正志	62
張り切っていた頃	佐藤進	64
九州——大牟田のこと	須ヶ間弘	66
わが再成の記	高橋和昌	67
雑感	中谷英夫	69
“ホテル讃歌”	長尾武	71
こしかたと近況	永峰敬一	73

四、近況

回想	西山 富美雄	75
想い出と近況	町田 嵩	77
私の還暦迄の略歴	三沢 義和	79
回想	安井 和夫	81
来し方行く末	山田 英雄	82
近況報告	上田 宏	84
外国の文化を理解しよう	内田 光一	85
六十歳をむかえて	川口 泰	86
近況・雑感	久保田 久	87
アジア三昧の日々	窪田 光純	88
夫婦仲良く旅三昧	島崎 惣一	90
近況報告	須田 敏夫	91
不義理のお詫びと近況報告	中野 良一	92
近況報告	繁田 幸宏	94
近況	比留間 孝夫	95

五、随 想

井の中の蛙		細田忠司	96
安全な食糧生産に携わって		増田晴夫	98
近況報告等		森田昌利	100
還暦を迎えたわが人生		森田守重	101
還暦を迎える今		山本健治	102
料理を楽しむ		横田和助	103
記念誌発行にあたり雑感		秋山寛	106
ひよどりのことに寄せて		石井一	107
故郷（ふるさと）雑感		石丸孝	108
塞翁が馬		伊藤博美	110
ふるさと		大野寛	112
おやじの一言		岡野道夫	113
幻のホールインワン		岡村悦次	114
うたかたの記		小高芳男	115
今、このごろ思う事		柿沼隆	117

平常心是道		傘松祐三	118
同窓生交歓 峠		鹿島泰次郎	121
私の今・・・		川村哲也	123
戌年の正月登山に思う		菅野功一	124
俺はまだ還暦なんかなりたかない		倉片幹人	126
明日に向けて素敵に加齢（エイジング）しよう		栗原誠一	129
日々雑感		栗原孝	132
随想		古寺 愼	133
校長室にて		小林康三郎	135
「くすの木」に想う		小林唯夫	137
六十歳に想う		進藤明	140
楠の下に		鈴木松寿	142
六十年考		関口俊輔	144
日日是新日		田島弘美	145
雑考		西ノ谷菊雄	147
日なかば、道なかば		馬場璋三	148
喫煙について（還暦なんて！）		丸山茂和	150

死ぬということ		吉崎秀一	154
人生これから		横内洋	155

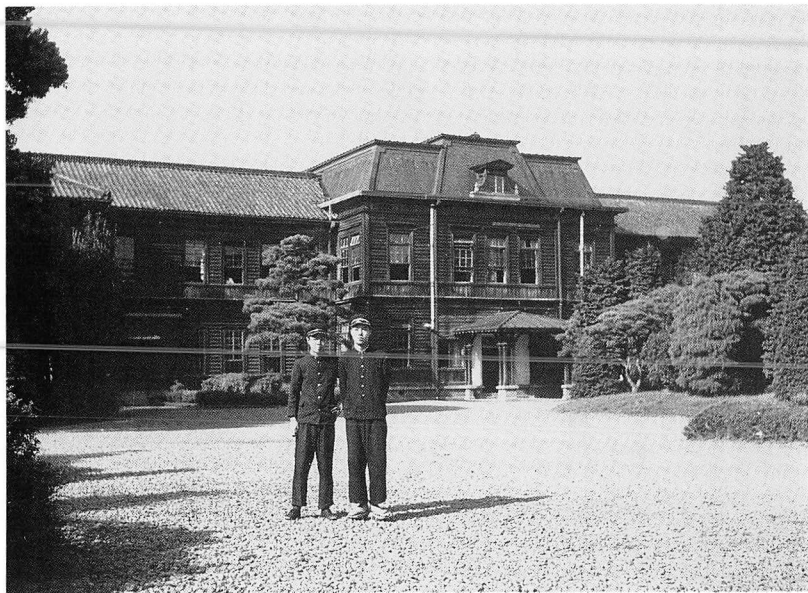
六、還曆

長い浮世に短い命		浅海守	158
還曆		尼崎壮治(旧姓永島)	159
還曆を迎えて“唯々感謝”		新井富美男	161
還曆を迎えて		今林隆朗(旧姓三上)	163
グッド・ランディング		奥富洋吉	165
還曆を迎えて		柿沼地作	166
還曆をむかえるにあたって		加藤公男	167
還曆を迎えた国際人		加藤博之	169
還曆雑感		金子正雄	172
還曆を迎えて		小泉義治	175
大したことなかったなあ		肥沼正之助	177
還曆を迎えての雑感		国府田卓	189
還曆峠の茶話		小林富雄	180

社会に貢献しよう	佐野和義	182
還暦を迎えて想う	塩野賀一	184
還暦の感慨	清水清	186
還暦を迎えて	須長晃(旧姓加藤)	188
還暦を迎えて	染谷潔	189
還暦追想	田口晨一	191
還暦を迎えて	當麻孝義	193
還暦を迎えて	中根甚一郎	194
第二の人生を有意義に	二井恒夫	196
還暦を迎えて思うこと	野本智行	197
還暦を迎えて	橋本充夫	199
還暦を迎える男のひとりうた	日高和美	200
還暦と遺言	深田繁	205
おじいちゃんになった	松木栄二(旧姓細田)	207
編集後記	編集人／加藤博之	208
第五回生卒業生名簿		210

あの頃のアルバムから





懐かしの旧校舎正面

川越高等学校校歌

作詞 古谷喜十郎

作曲 内田象太郎

一、紫匂う武蔵野の

天与も深き川越に

教えの庭の規模広く

礎据えし学舎は

秩父の嶺の揺るぎなく

入間の水の末長し

二、師弟の情思濃かに

切偲の友誼亦厚く



昭和28年竣工の新校舎

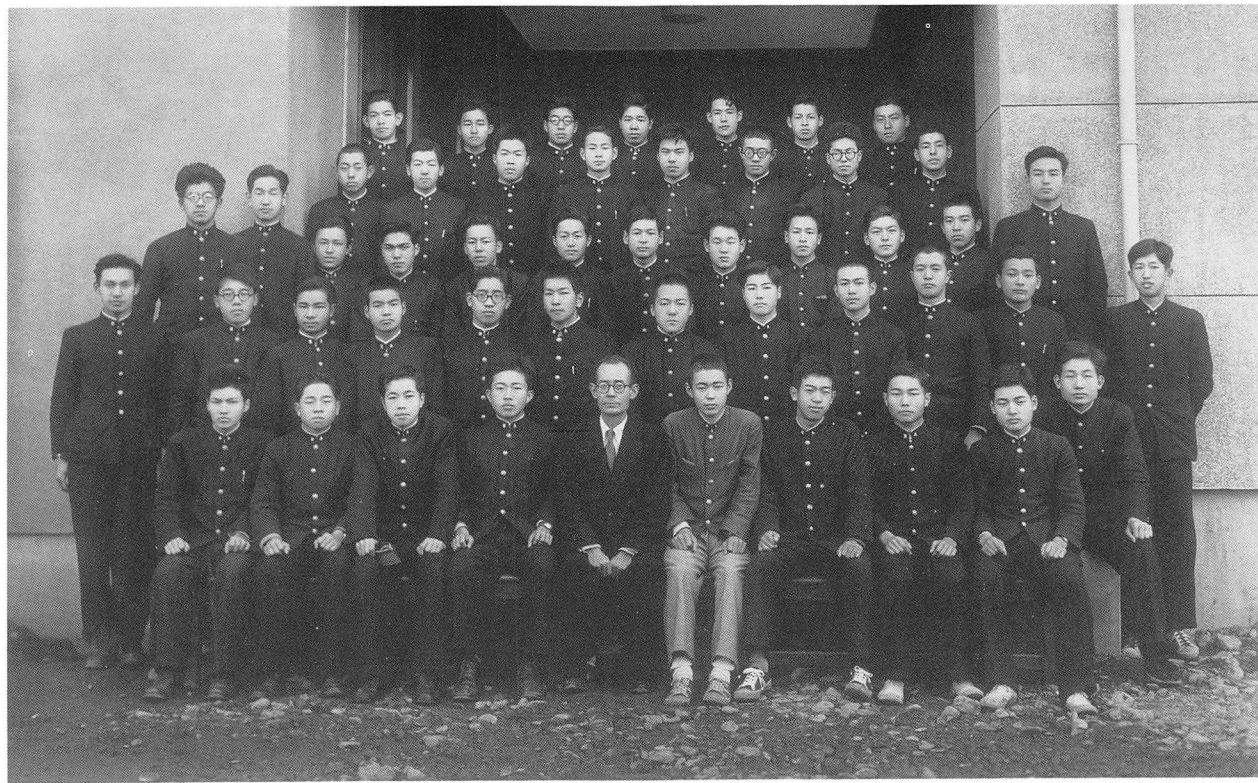
華美にはしらず実に着き
智を耕して徳をしく
我が校風は三芳野の
社頭の梅と薫るなり

三、螢に搜る鳥の跡

雪に尋ぬる文の道
大和心に西の才
雄飛の翼養いて
高き誉を初雁の
城址の月と輝かせ



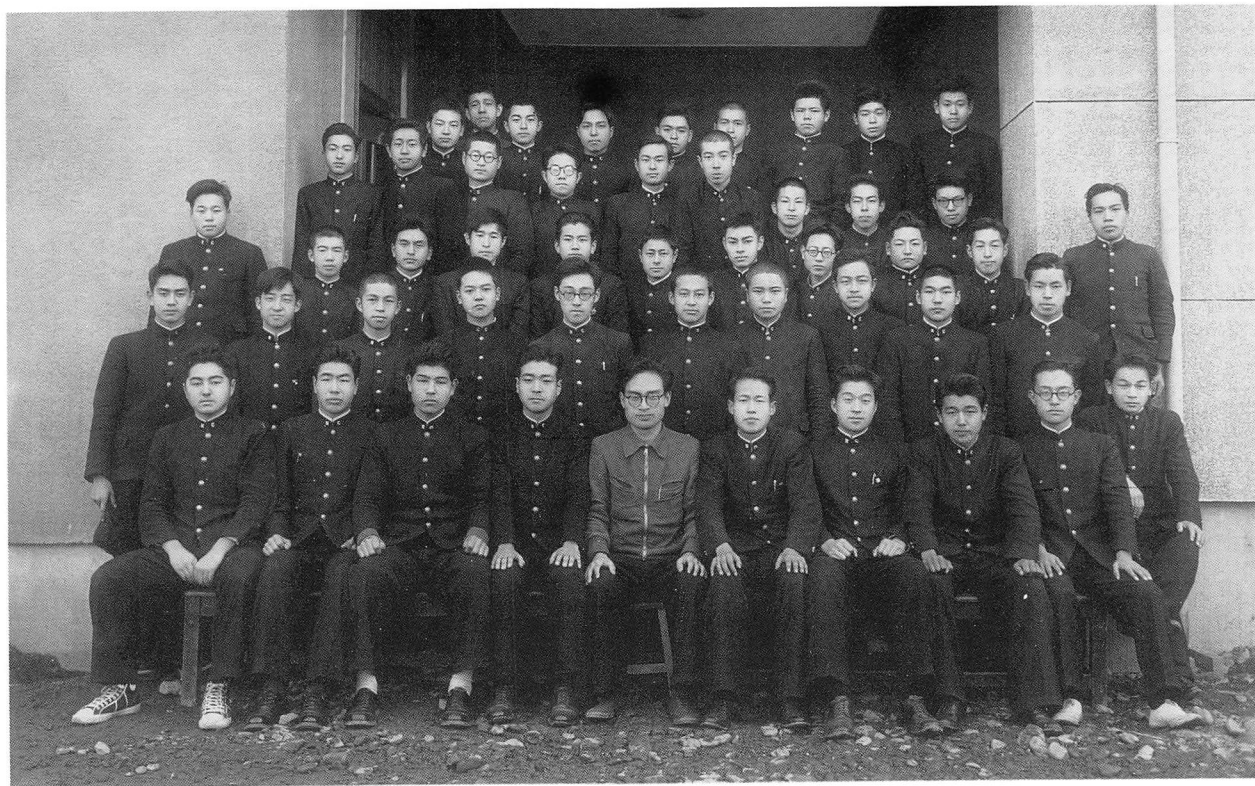
恩師・職員の方々



3 A一同（平 正夫先生）



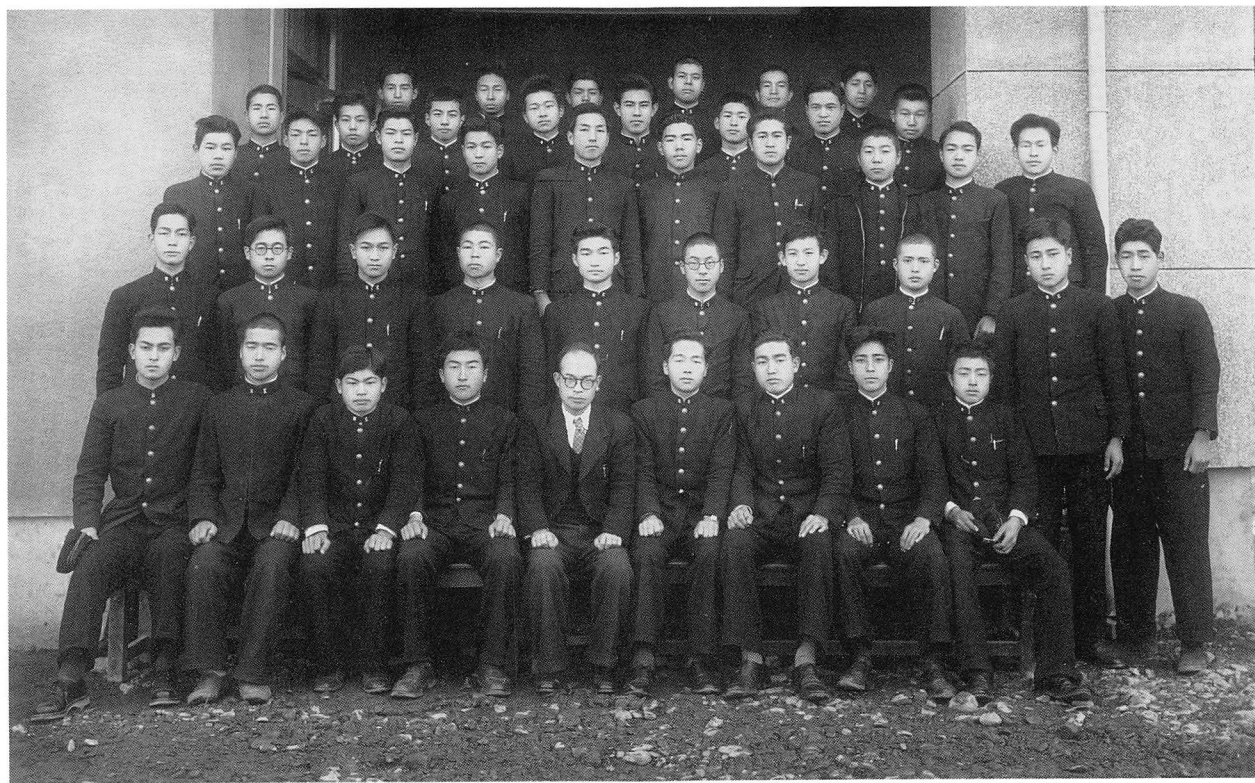
3 B一同（佐藤徳四郎先生）



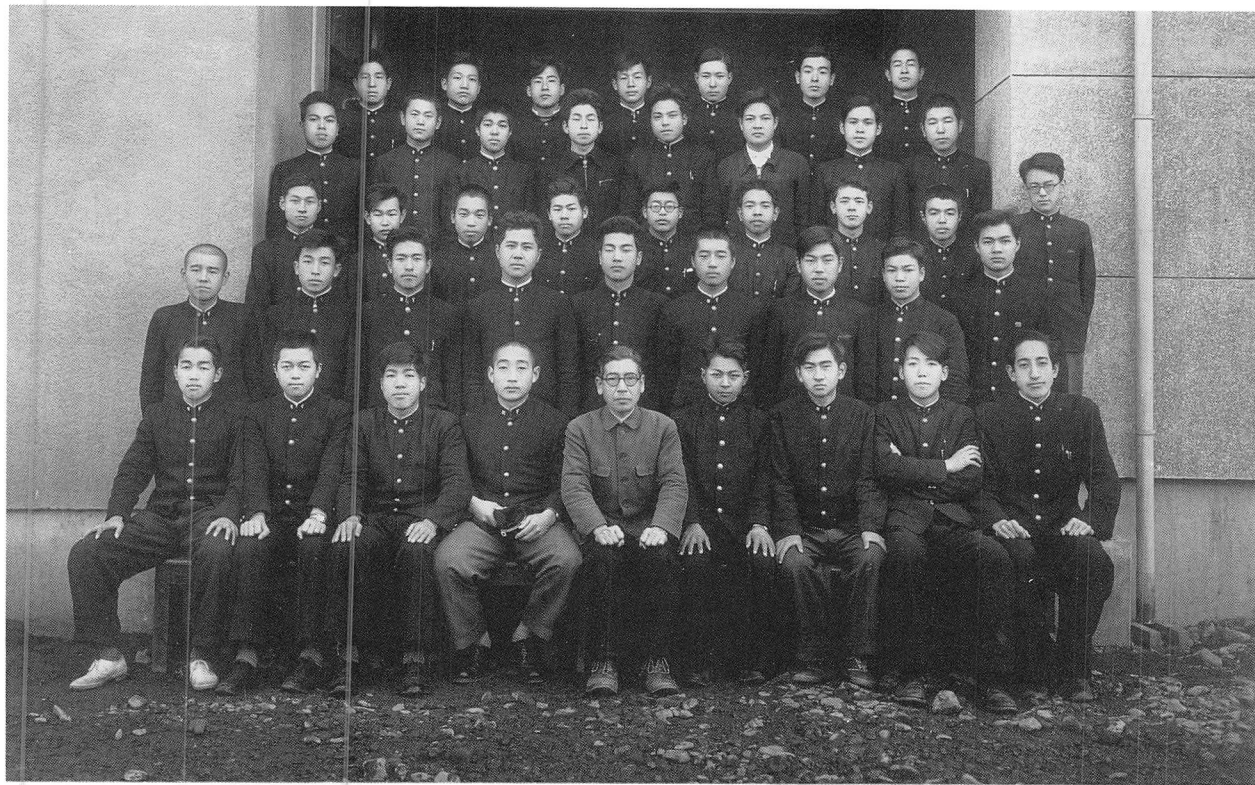
3 C一同（大川明治先生）



3 D一同（佐々木太郎先生）



3 E 一同（野村闊先生）



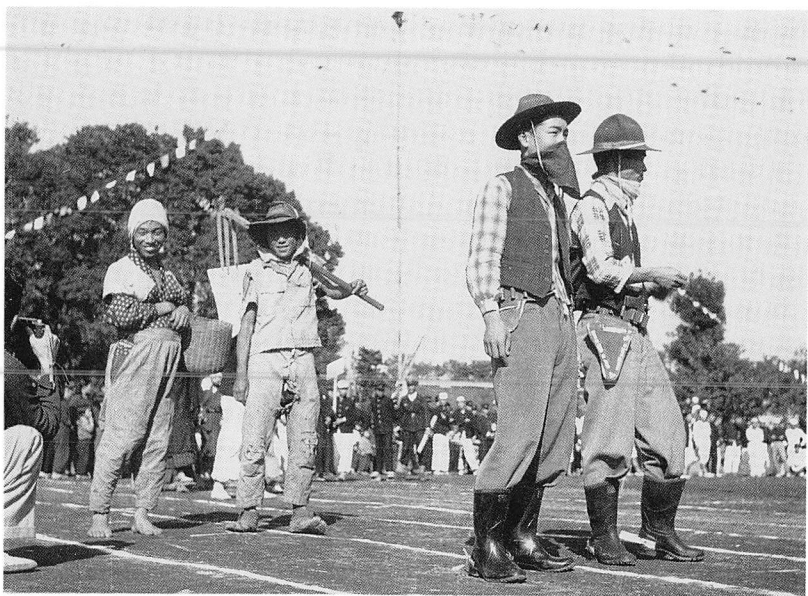
3 F 一同（芳村信太郎先生）



運動会スナップ（3F）



運動会3Fリレーメンバー



運動会での仮装行列



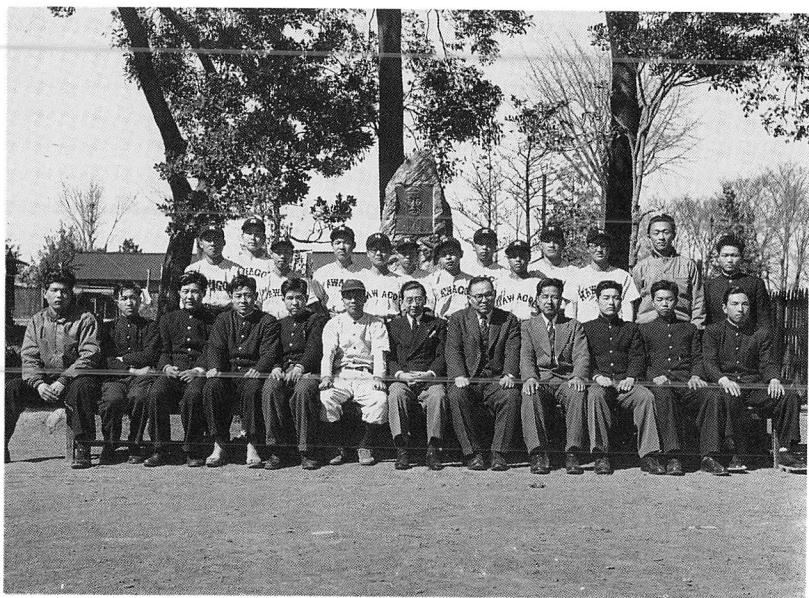
サッカー部の面々



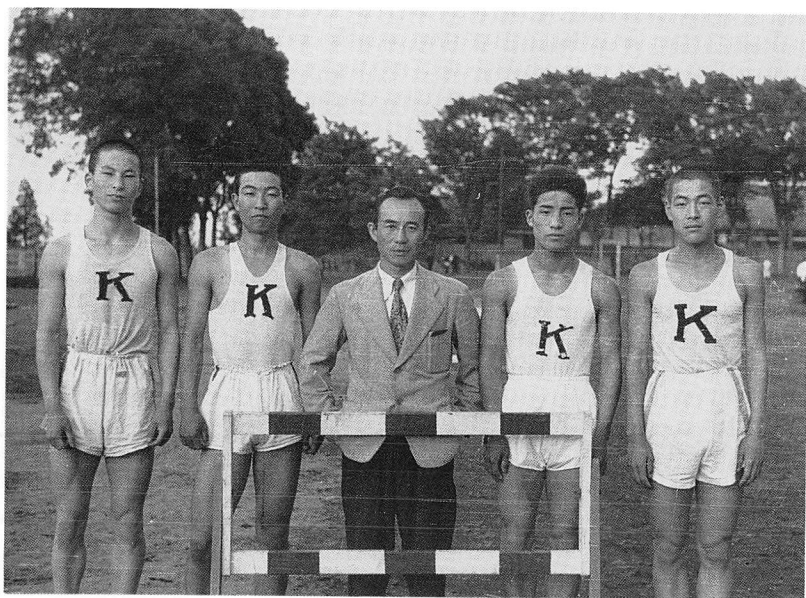
県立川越女子高校体操部との交歓スナップ



卓球部の諸君



川越高校野球部と後援会の皆さん



陸上競技部短距離の選手諸君



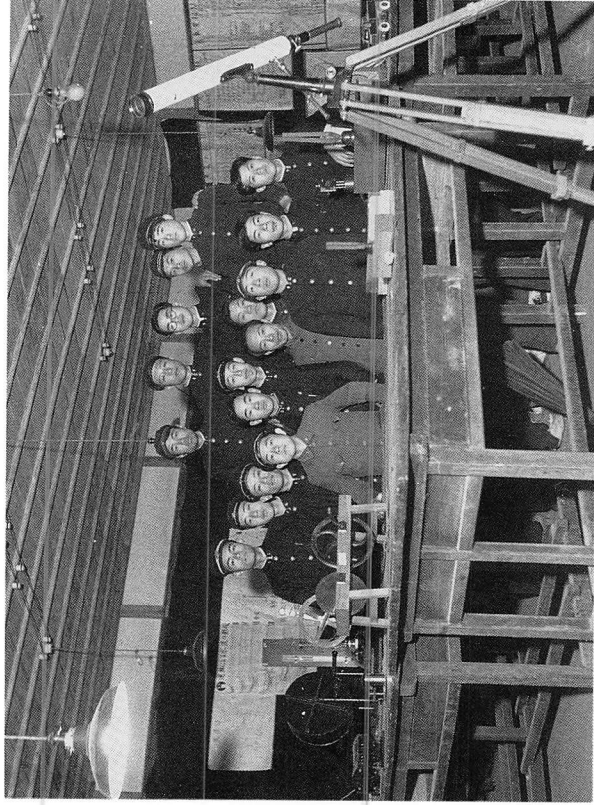
卒業後の陸上競技部交歓会



演劇部の皆さん



物理部の諸君



誕生・在学中の出来事

(年表作成・染谷潔／小高芳男)

1950年 (昭和25)	1935年 (昭和10)	1934年 (昭和9)
8月 警察予備隊設置。 7月 総評結成。 6月 朝鮮戦争。 金閣寺焼失。 3月 中尊寺、藤原三代の遺体調査。	3月 満州への移民始まる。 東京ーベルリン、東京ーロンドンに無線電話開通。 1月 美濃部達吉の天皇機関説問題となる。 12月 ワシントン条約単独廃棄。	3月 満州国帝政溥儀皇帝となる。 7月 首相、斎藤実より岡田啓介となる。 9月 室戸台風。
4月10日(月) 入学式 10月7日(出) 運動会 10月28日(出) 旅行・遠足 11月2日(木) 講演	ドイツ、ヴェルサイユ条約破棄。	ドイツでヒトラーが総統に就任。 ソ連、国際連盟に加入。
桑港のチャイナタウン(渡辺はま子) 東京キッド(美空ひばり) 夜来香(山口淑子) 白い花の咲く頃(岡本敦朗)	旅笠道中(東海林) 二人は若い(ディックミネ) 野崎小唄(東海林) 明治一代女(新橋喜代三)	流行歌 国境の町(東海林太郎) 並木の雨(ミスコロンビア) 赤城の子守唄(東海林)

1953年 (昭和28)	1952年 (昭和27)	1951年 (昭和26)
2月 NHK、テレビ放送開始。	4月 対日平和条約発効。 5月 メーデー事件。 7月 ヘルシンキ・オリンピック に日本参加。 10月 警察予備隊、保安隊と改称。	4月 マッカーサー元帥解任、後 任はリッジウェー大將。 8月 民間放送開始。 9月 サンフランシスコ講和会議。 全権吉田茂。 日米安保条約、対日平和条 約。 10月 民間航空復活。
3月6日(金) 卒業式	2月7日(土) 卒業生予餞会 2月11日(水) 校舎新築落成式 11月16日(日) 文化祭 11月15日(土) 運動会 11月8日(土) 新本館へ移転 6月17日(火) 京都・奈良・大阪 5月31日(土) 修学旅行 5月27日(火) マラソン大会 5月2日(金) 終業式 4月8日(火) 始業式 3月25日(火) 本館上棟式 1月17日(木)	3月24日(土) 終業式 4月9日(月) 始業式・入学式 4月28日(土) マラソン大会 5月21日(水) サンフランシスコ金 門学園長鈴木孝志先生講演会 7月5日(木) 応援歌入選者発表 10月7日(日) 運動会 10月18日(木) 北校舎へ移転 1月17日(木)
雪の降るまちを(高英男)	君の名は(織井茂子) 花の三度笠(小畑実) 街のサンドウィッチマン(鶴田浩二)	越後獅子の歌(美空) 上海帰りのリル(津村謙) 江の島エレジー(菅原都々子) 連絡船の歌(菅原) トンゴ節(久保幸江)

新任教員・ピテカン

小泉 功

第五回の卒業生が川越高校に入学したのは、一九五〇年の四月で、私が同校に新任教員として赴任したのも同じ年月であった。以来三十六年間に、社会科の教員として勤め、一九八六年に退職することとなった。私より先輩の先生達は、川越中学から川越高校へと変わったが、ずっと同校に勤務し、退職された方も多かった。しかし、このようなコースを辿った最後の教員が私であった。これ以後、同一校新任以来退職するまでいることはできなくなり、転勤されるのが常となってきている。

赴任した当時は、毎日毎日が授業をどうやるかで予習に追われ、ノートづくりで精一ぱいであった。それでも忙中閑有りで、結構面白いこともあった。新任のための担任もなく、職員室の隅にいと、色々のことが聞こえてくるもので、今でも思い出す事例の一つに次の様なことがあった。

徳さんこと佐藤先生が大きな声で、生徒を叱りつけていた。どうやらその内容は、昼休みに生徒の通学自転車の後輪の空気を約百二十台分もぬいたことによるもので、その理由を問い正すと、「シューと言う音が何とも言えなかったの」とのこと。さすがに佐藤先生も苦笑され怒りと笑いが一緒になり、複雑な表情をしていた。ことはこれだけ

では終わらなかった。学校の周囲の家から「空気入れ」を借りてきて、放課後一時間半もかかってやっと一件落着いたのである。

新任の頃の思い出について、もう一つだけ特に弁明させてもらいたい。

私は大学で考古学を専攻したので、新天地川越とその周辺で発掘調査をし、研究することを考えていた。したがって、授業は日本史・世界史を担当したが、人類の発生と原始社会についてはなんとか無難にやりとげる自信をもっていった。一九五〇年代の歴史の教科書には、「人類の発生について」のところで、世界で最も古い人類はジャワ原人「ピテカントロプス」エレクトウスと記述されていた。こともあろうに私は得意になって、「一八九一年〜九四にかけて、オランダ人のデュボアがお金を貯めて、人類発生の地をジャワ島に求め、ベンガワン河畔で六〇万年前の直立猿人の化石を発見・一部の頭蓋骨から復元するとその脳容量は九〇〇〜九五〇ccで、現代人の約三分の二程度である。直立歩行することが確認されたのでこの学名がつけられたのである」と、一席弁じていた。

このため、誰が名付けたかは知らないが、私に「ピテカン」のニックネームがおくられ、生徒の間ではもっぱら「ピテカン」の名がまかり通っていた。

今でも用事があって、卒業生に電話をする時「川高にいた教員小泉ですが」と言っても一向に判らず怪訝な様子が伝わってくる。そこで仕方なく、勇を出して「ピテカンだけ」とニックネームをあげると、「あ、判りました」という返事がかえてくる始末である。何度もこの様なことがあったから、この頃は最初から「ピテカンだけ」と名乗ることにしている。しかし、若い卒業生の間では、ピテカンことジャワ原人も話題にならず全く無視される状態になっている。

なぜなら、もっと古い一五〇万年前と言われるジンジャントロプスやオウストラロピテクスが南アフリカのタンザニア・南アフリカ共和国で発見されている。このため教科書にピテカントロプスの名は消え、これらの猿人に王座をあげ渡している。

しかし、私ことピテカンはまだ健在であり、川越の大地を発掘調査し、さらには川越の歴史を追いかけて悪戦苦闘の毎日を過ごしています。見かけたら例の名をもって呼びかけてください。

一、「徳さん」——恩師と私

徳四郎先生と私

青 柳 邦 彦

川高といえは私には徳さんがパツと浮かぶ。入学前のクラス分け試験の日、私は事務室へと廊下を小走りに急いだ。途中、堂々と真中を歩いている人が目についた。一瞬、通りにくいと思ったが脇をすり抜けようとした時に接触して飛ばされた。「すみません」と頭を下げたが、それはつもりであつたようだ。「オイ待て」凄まじい大声が飛んで来た。「カッ」人を突き飛ばしやがって……お前は俺を小使いと間違えたのだろ。カッ」顔を真っ赤にして正にユデ蛸に見えた。こっちは真っ青でコチコチになつてしまつた。「カッ」お前は新人生だろ……名前は。アオヤギ……あの青柳の弟か。カッ」馬鹿者。この時程兄貴が居た事を恨めしく思つた事はない。これが佐藤徳四郎先生との出会いであつた。

入学の喜びも色あせ、入学式も終わり、いよいよ最初の国語の時間がやつて来た。教室に入つて来る先生を見た時は地獄で閻魔を見る思いであつた。「皆の顔を覚えたいので名前を呼ばれたら立つて返事をするように」。ヤバイ／と思つても順番が来た。「ハイ」と立つて一瞬の空白があつた。「あっお前だ、俺を突き飛ばした奴は」顔を上げてみる。あ・あ・その顔だ。思い出した思い出した」と忘れていない。「こいつは俺を小使いと間違えて突き飛ば

しやがった”。私は先生と小使いを使い分け出来る程器用ではないし、差別は大嫌いだ／ 第一飛んだのは私だけだ／ しかし、とても反論する勇氣はなかった。そんな事で国語の時間が楽しい筈もなく、好きでもない句会や見学会にゴマを挿りに出かけた。高校でゴマ挿りをやろうなんて思いもつかぬ事であった。その成果か期末になると一点ずつ上っていた。地獄のような国語も最終授業となり、終了時の開放感は今でも忘れていない。その勢いで浪人時代も悪友と遊びまわり、私の学生時代は遊びと趣味の収穫の方が多く、今なら落ちこぼれ組であつたろう。尤も今でも落ちこぼれに甘んじているが、私を人間的に大きく成長させたのは何といつても画商時代であつた。

絵を見るには頭（左脳）を使つてはならない事は私にピッタリであつた。良き師匠にも巡り会え、私の感受性（右脳）はめきめきと力がついてきた。今迄見えなかったものが、はっきりと見えはじめ本物を知る力がついて来た。本物を使う人を育て、贋物を使う人を裏切り痛めつける。誰にでも見え説明出来るものは仮りの姿であり贋物である。本物はその中に存在し右脳を使い自分で知るしか道はない。右脳無視で左脳一方通行の日本の近代化は本物を消し中味の無い贋物、つまりバブル化してしまう。これでは日本は駄目になる。画廊に来るお客に徳さんの如く、カッ／

カッ／とお説教をしていた。徳さんと同じ心になっている自分に氣付き、忘れていた徳さんを懐かしく想い出した。 “日本人は敗戦を忘れている” といつて何処に行くにも軍服、下駄、こうもり傘で、飾る事はしない。身をもつて外見だけの発展を戒めていたのだ。中味を知る右脳を育てる文学や俳句を身につける事は、社会が個人の “好み” の多数決でつくられる事をみれば、必要不可欠であつたのだ。そんな私の画商時代から二十余年が過ぎた今、予想通りバブル化は深刻化して来た。政治経済のみならず全てであるが、右脳を育てる芸術や自然まで左脳に侵されてしまったのでは救いもない。 “ほれ見ろ／ カッ／ 馬鹿者／” 天国で徳さんも怒っているようだ。

「左脳は止むを得ず使うもの、決して憶れるものではない。一見、人間に役立つかに見える左脳はやがて一方通行の主役となり人間破滅への天敵になる事を忘れてはならない。」

還暦を迎え、現役人間の卒論として天国の佐藤先生に提出したい。

御冥福をお祈り申し上げます。

川高時代の想い出

猪 鼻 三 男

還暦を迎える歳になって、過去を振り返るとき、強く印象に残っているのは、何ととっても、川越高校の時代である。

いろいろなタイプの先生、よき友人に巡り会えたことをまず感謝したい。

なかでも、ここに三人の先生と、一人の友人について語ってみたいと思います。

まず第一に佐藤徳四郎先生である。

私達の仲間では通称「徳さん」と呼んでいた。国語の先生で、教科書の他に、源氏物語、奥の細道、去来抄、成語集、俳句の宿題等、その授業について行くのに、大変苦労した。

当時、予習準備のため、神田の古本屋をよく尋ね歩いたものである。

そのお陰で、自分で調べ上げるといふ習慣が、身につくようになり、社会に出てから大変役に立ったと思います。また本に親しむ基礎をつくってくれたことを、佐藤先生に感謝しています。

一方、英語の木島先生は、独得の雰囲気と自信を以って、英文学を主体にした授業で、先生自らコンラッドの「青春」を翻訳出版され、私も興味深く読ませて頂いた。授業の合間に、よくラグビーの話をされ、英語教育にも大変情熱を以って講義をしてくれたので、授業を受けるのが楽しみであったのを覚えています。

数学の石川先生は、理論重視の講義で、高校の先生と言うよりは、大学の授業を受けている感じがした。

さて、高校生活を通じて、多くの友人・知人をつくれたことは、私にとっても大きな財産である。なかでも、福島行雄君と、その御両親との出会いであった。即ち、昭和二十八年正月も過ぎ、卒業を間近に控えた一月十九日に突然母が亡くなった。

母は農業の傍ら父の事業の手伝い、私達兄弟六人を育てながら、戦中戦後の混乱時代を生きってきたが、過労がたたリ、四十五歳の若さでこの世を去ってしまった。

驚きと言いつてもない気持ちで過ごしていたある日、二年生のとき同じクラスだった福島君と偶然逢い、一度家に遊びに来ないかと誘われ、初めて彼の家を訪問、御両親とも逢い、心暖まる歓待に感謝で一杯でした。以来、何度も泊めて頂き、夜を徹して青春を語り合った。……当時の感激は、今でも走馬灯のように脳裡を駆け巡る想いである。彼は大学卒業後、ずっと大阪暮らしで、お互いに会う機会は少なくなったが、会えばいつでも心は通じ合える仲であると感じている。

川高卒業後、既に四十年以上の歳月が過ぎ、還暦という一つの節目を機会に、第一線を退き、好きなゴルフと山歩

きをしてみたいと願っていたが、諸般の事情が許さず、まだまだ現役で頑張らなければならないと思っています。

サムエル・ウルマンの詩に、青春とは人生のある期間ではなく心の持ち方を言う。歳を重ねただけで人は老いない。理想を失うとき初めて老いると述べています。実にすばらしい言葉と思います。

若いときは、人皆同じように若いがりひとり違った歳のとり方をする。

今ここに、川高で共に学んだ仲間と再びお会いできる喜びを神に感謝しながら、これからもよき想い出をつくれるよう頑張っていきたい。

佐藤徳四郎先生と「瀬祭」だっさい

落合好雄

私の手元に俳誌「瀬祭」が四冊ある。昭和二十五年発行が二冊、昭和二十六年発行が二冊である。私達が一年、二年時代のもので、今から四十余年前の俳誌である。

「瀬祭」と言うと思師佐藤徳四郎先生を思い出す。特に私は、担任時に父を亡くし、その折わざわざ遠隔の東吾野まで級友の代表の方々と来ていただいた。改めて、恩師の慈悲、級友の愛に心から感謝を申しあげる。

この四冊から、佐藤先生が「瀬祭」にたいへんに熱意を持って生活されていたことが想像される。自分の投句はもちろん、後輩の育成、地域の文化活動に精力的に活動されている。

四冊の中から佐藤先生の御句を紹介してみたい。

鎌倉にて 三句

鐘樓をつる石古りし落花かな 鶯笛吹いていでけり妙法寺

虎杖や名残にこゆる小坂道

先生は古都鎌倉が好きであったようだ。あの小町通りを、瑞泉寺への道を、北鎌倉を、そして生徒達を引率して鎌倉をどんな思いで歩かれたのであろうか。一度も同行しなかったことが、今になって悔まれてならない。

蕎麦の花白く流るる夜霧かな

閑さや蛇にこぼるる花ハッ手

末花も一つに扱きし実紫蘇かな

一日の花伏す布袋葵かな

ひつじ田にふれて流るるさ霧かな

この句は、通巻第二八二号に投句されたものである。なお、同号に次の七句を投句されている。

布袋草

脳溢血を患って感あり

死なば秋花とりどりの乱れ咲き

生くる日の限り書よまん雁渡し

身拙く生きて悔なし花茗荷

天命を知って味あり茗荷の子

組にあきたふ鯉や秋ともし

行き行きて憩はん赤のまんまかな

一日の花うらやまし布袋草

一句一句を味読していると、佐藤先生が彷彿とし、また断腸の思いである。一編の小説より深しの一句一句である。次にこの四冊すべてに獺祭俳句（川越高校生徒作品）が約八頁にわたって掲載されている。これも佐藤先生の努力に寄るものである。読んでみると、私が職業とした教師の先輩の作品、スポーツで華々しく活躍した方々の作品。また同級生の作品も多数ある。昭和二十六年新春号で吉崎秀一氏が、川高生徒作品の巻頭を飾っている。

浴衣着て涼みがてらの墓参り
吉崎秀一

鉢植えの葉を数へつゝ夕端居

日の影に頭移せる晝寝かな

向日葵を横目に見つゝ晝寝かな

笹の葉のみづみづしさや螢狩

生涯学習時代と言われ、生きがいを持つことの大切さが叫ばれている。佐藤先生は、四十余年前からその実践者、先覚者である。学校だけでなく社会的にも広く活躍された。まさに「一隅を照らす」生き方をされたわけである。尊敬する我が師である。

不肖の生徒をきっと草葉の陰で、あのおみくじの筒を鳴らして笑っていることであろう。

先生のご冥福をお祈りします。

安達太良に雪降る井戸を汲みをれば 好雄

佐藤先生のこと

小久保 東

私こと、小久保 東。一九五三年三月、川越高校卒、同年四月埼玉大学入学、一九五七年三月埼玉大学卒、同年四月川越商業高校教諭として奉職。以来三十八年間に数校の県立高校を転任し、現在（飯能南高校長）に至っている。しかしそれもあと数ヶ月で定年を迎える。

川越高校を卒業し、私は他の多くの学友と異なり、実社会というものを経験せずに、高校生の延長のような生活をしてきたことになる。しかし、被教育者と、曲りなりにも教育者（教職に身を置くという程の意味）のちがいはある。今、目前に還暦を迎えようとしている時、川越高校の同窓会文集に思い出を書くとするば、やはり佐藤徳四郎先生（徳さん）のことになる。私にとっては単なる思い出に止まらない。佐藤先生との出会いは、私のその後の人生を大きく変えたと言っても過言ではない。それは佐藤先生のおかげで読書の楽しみ（読書の習慣）を知り得たことなのだが。

私達は、六三三制と言われた現在の学制の最初の中学生で、「六三制野球ばかりが強くなり」と皮肉られた世代で

ある。私は中学時代は草野球に明け暮れ、文学作品を教科書以外で読んだことはなかった。川高に入学し、佐藤先生の強烈な個性に圧倒されたが、その先生から、「読書感想文」なる宿題を課された。中学時代には経験しなかったものだけに少々困惑しながら、家にあった漱石全集から「三四郎」を読んで文にまとめて提出した。何を読んでもよいということだったが、先生は作品の選択も評価のうちに入れられたらしく、名作・古典を選んだ者は概して、良い成績がついたようだ。

その佐藤先生に三年間、国語を教えていただいたが、先生ご自身が大変な読書家・蔵書家であり、読書に関しても一言言ってもおられた。例えば「筋の面白さだけで読んではいけない。講談・大衆小説などに落語するな。読書は著者の人格との接点でなくてはいけない。」等々。

最初は宿題として強要された読書ではあったが、多感な(?)その頃に読書習慣が身についたのは幸せだった。私は趣味の一つに「読書」と答えられる程に読む楽しさを知ることができたのは佐藤先生との出会いであった。また三年間に日本の古典を数多く読まれたのも、後に大変役立った。佐藤先生に非常に感謝している。

恩師のこと

高野達雄

小・中・高・大学と、恩師にかかわる種々な出来事と恩師に与えられた多くの影響は、数え切れないほど滲み付い

た油のごとく脳裏に浮遊するが、その中で、私的なものをいくつか取り挙げてみたい。在学中あるいは卒業間際に申し上げたのでは、失礼に当たる面があるかも知れないが、もう時効としてお許しただけのものと思う。

一年の初めの頃だったか秋も深まった頃だったか、稲種だったか麦種だったか、猫さんこと芳村先生（社会―川高の私たちの世界に未知な方のために―）がさがしていた。先生は平方の方から自転車通勤されていたが、私の申し出により我が家に立ち寄ることになった。私も自転車通学で、横に並んで何をしゃべったか一切覚えていないが、袋に入れた種を両親が渡すと、間もなくお帰りのになった。少量だったのでお金を頂かなかった以外、特に御馳走した記憶はないが、お陰で先生には、学校で種々便宜を図って頂いた思いがある。

二年の頃、私は体調を崩し、体育を見学することが多くなってきた。平素、体育だけは好い点を貰っていたが、元々長距離を走ることには苦手だった。見学とまではいかなかったも、当時長距離を走ることには免除されていた。そんな或る日、体育の時間にグラウンドを何周かするはめになった。当然ながら私は免除である。やんちこと山口先生（保健体育、後に国語）は、皆を走らせておいてどこかに消え、走り終わるころ戻るのだが、その間、何周したか数える役が私だった。先生には公私ともに目をかけて頂いたが、卒業後、島田桂吉氏（現、神戸大学教授）とお宅にお邪魔し、御馳走になった。良い思い出である。平先生（英語）が転任して来られ、子息不二夫氏（現、筑波大学教授）とは遊び仲間であったが、父上の先生の趣味に釣りがあったことを知ったのは、三年の時の夏だったか卒業した年の夏だったか。偶然、伊佐沼で釣り糸を垂らしているのをお見かけした。丁度我が家を出たところで、多少の木陰はあったが、かんかん照りだった。母にお茶を入れてもらって飲んでいただいたが、先生はことのほか、萱葺屋根の涼しさを堪能されたようだ。その後数回お目にかかったが、いつも変わらぬお姿だった。「鮎に始まり、鮎に終わる。」という言葉

葉を初めてお聞きしたのは、多分、平先生からだと思う。

私が国語の教員という、皆さんは直ぐ徳さんの影響と思われるらしいが、徳さんと私の国語の教員とはまったく無関係である。徳さんこと佐藤先生（国語）の影響は、私の場合むしろ使命感の強さと頑固さであるかも知れない。ご自身は病身でありながら、目上の木島先生（英語、元、東京商船学校教授。後に、角川文庫からコンラツズの翻訳本を出版された。）への氣遣い、教場での威厳、それらは大学時代の名のある教授たちの影響と重なる面がある。私が国語の教員にならざるを得なくなったのは、行くところが無くなって、知り合いの大学教授に拾って頂いて、理系から文系に転身しただけのことである。ただ、教員になってしまうと、やはり国語という意味で、彼方此方、先生の顔が出てくるのは否定できない。先生には卒業後、自家製の草餅を差し上げて喜ばれたことがある。

教員になって、多くの先生の影響を肌で感じる機会が多くなったが、小泉先生（社会）その他、字数の関係でここに挙げるのでできなかった多くの先生方、そして多くの遊び仲間諸氏、この会運営に当たってくださる幹事諸兄に、改めて感謝申し上げる次第である。

「徳さん」の思い出

原 澤 良 造

在学三年間、国語の先生は「徳さん」すなわち、佐藤徳四郎先生であった。佐藤先生は怖い先生だった、という印

象がまず浮かんでくる。そして、いつも国防色の服を着ていて、風貌といい言動といい、ほかの先生とはちょっと違っていた。しかしながら、なぜか私には少なからず先生に心惹かれるものがあった。

国語の授業では、教科書は早々に切り上げて、ほとんど古典文学に重点をおいてやっていた。今でも私の書棚には、当時教科書代わりに使われた本が大事にしまっている。萬葉集に始まって、竹取物語、堤中納言物語、平家物語、徒然草、奥の細道、雨月物語、他に多数約二十冊に及んだ。

日本文学を専攻したわけでもないのに、高校時代にこれだけ古典ものを一字一句丹念に勉強できたのだから、その機会を与えてくれた佐藤先生に今さらながら感謝している。それから、毎週一回放課後に、「源氏物語研究会」と称して、いわゆるゼミ風の勉強会を大分長い期間継続してくれた。集まってきた仲間はせいぜい十人足らずであったが、私は熱心な聴講生の一人だったと自負している。

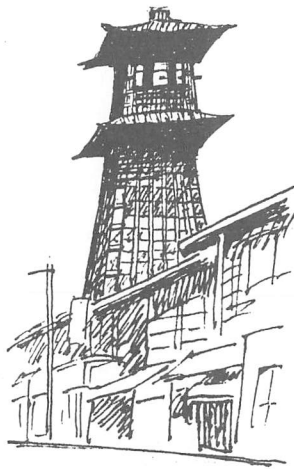
このやり方は、予め分担を決められて、事前に勉強してきたことを順番で発表する、というごく普通の勉強会だ。随分丁寧に調べてきたつもりでも、先生に難しい質問を投げかけられるとたまったものではない。誰もすぐお手あげだ。でも先生は詳しく解説してくれた。

今、手許の書棚から埃をかぶった源氏物語の本を引き出して開いてみると、どのページも鉛筆でまっ黒になるほど、解釈や説明事項などがぎっしりと書きこまれている。その筆跡を見ると、よくこれまで勉強したものだと思わず感心してしまうほどである。

佐藤先生はよくこんなことを口癖にしていた。「源氏物語をしっかり勉強しておけば、大学入試の国語は絶対大丈夫だ」と。けれども、このことだけは誰も本気で聞こうとしていた者はいなかったようだ。所で、私は定年退職後

に役立てようと、資格取得のため、今、ある国家試験の受験勉強中である。奇しくも、その試験の中に、古典ものや日本文学史が出題される科目がある。何と四十年前の記憶が、今ありありと甦ってくる。一発合格を目指して頑張っているが、もしも合格できたら佐藤先生のお陰だと思うであろう。

私の最近の読書といえば、どうしても実務的な本ばかりに偏ってしまっている。そのうちに時間ができたら、私の目の前の書棚で静かに眠っている古典ものを、もう一度、じっくりと読みなおしてみたいと思っている。「徳さん」の顔を思い浮かべながら。



二、思い出——川高時代

高校時代・雑感

浅田 豊彦

なにしろ四十年以上も前のことである。本来ならばテーマを一つにしぼって書くべきかもしれないが、記憶も薄れてしまっているし、正確に記すことは到底不可能なので、思い出すままに、いくつかのことを羅列するだけ、ということでお許しを願いたい。

× × ×

我々は中学が義務教育となった六三制での新制中学の第一回卒業生であった。その頃、「六三制野球ばかりがうまくなり」という川柳があったほどで、我々の年代で野球をやらなかったものはまずいない。今と違い、空地はいたるところにあり、他に遊びなどなかった頃だから、閑さえあれば野球をやっていた。ただ、野球部の連中のような高度な野球はできないので、主にテニスボールを使って守備は素手でやった。テニスボールの庭球とレベルの低い低級とをもじって低級野球と称し、昼休み開始のベルを待ちかねるように競って校庭に飛んでいった。弁当は三時間目終了後の休み時間に食っていたと思う。

低級野球は高校卒業後もだいぶやった。十年近く続いたと思う。卒業後も低級野球でおつきあいいただいた同窓生

に、まんじゅう（安部邦夫）、パジ（石井一）、フォックス（松本英男）、ガスコ（小泉義治）などがおり、ガスコの兄で二年か三年先輩のエイちゃん（小泉栄市）もいた。もっとも、卒業後、低級野球以上にながく続いた遊びがある。それは麻雀で十数年続いた。仲間は低級野球でもお世話になったまんじゅう、エイちゃんのほか、ポンちゃん（森田幸太郎）、ミッチャン（岡野道夫）、ドンキュー（吉田豊司）。川高の同窓ではないが、昭和三十四年に川高が後にも先にもたった一回、夏の甲子園に出場した時のエース吉田の実兄）などであり、若さにまかせて随分徹夜もした。

× × ×

このように野球はかなりやったが、それ以外のスポーツは全くだめで、狂のつくほど見るのが好きな相撲の他は興味もなかった。そんな俺が、新人生の頃、上級生からラグビー部に誘われたことがある。細い身体で、見ただけで非力とわかる俺を勧誘するなんて、よほど部員不足で困っていたとみえる。「ラグビーなんてルールも知りません」とことわったところ、「バカヤロー。ルールとかボールの形を知らないことが、ことわる理由になんかなるか。ラグビーとは食べものではない、ということだけ知っていればいいんだ」と一喝された。どうにか入部することは切り抜けたが、上級生がこわかったので、何かのクラブに入っていないとんでもないことになると思い、深く考えもせずにあわてて化学部に入った。あまり真面目な部員ではなかったから部活動といってもろくに実験もせず、仲間と無駄話をしていた時間が多かったように思う。

同じ部員に、江原徳三、三沢義和、和田宏士（漢字のシリトリができる）らがいた。

× × ×

一年生の時の冬だったと思う。園芸の時間に草むしりのノルマを終え、時間をもてあました。五、六人仲間がいたと思うが、退屈しのぎに誰からともなく自転車置場に置いてあった十数台の自転車の空気を片っ端から抜いていた、空気が抜ける音は、自転車によってそれぞれ異なり、あるものは高く、あるものは低く、寒空にメロディーを奏で、その時は痛快だった。こないたずらがばれない筈はなく、後で先生にばれ、大目玉をくった。たしか、全ての自転車の空気を元通りに入れ直したことで、一時間位立たされただけだと思いますが、今考えると随分幼稚ではあるが悪質ないたずらだった。

一緒にやった連中が誰であったか、今は思い出せないが、肥沼正之助はいたような気がする。

× × ×

以上ですが、親愛なる同窓生諸君をあだ名で書いてしまつて申し訳ありませんでした。他人のあだなをばらし、自分のことは隠しているなんてあまりに卑怯です。私のあだ名はサルマタでした。

K R C

岩 澤 達 徳

K R Cとは、川高ラジオ部（K a w a k o R a d i o C l u b）の略称であり、また、昼休みの校内放送の際のコール・サインであった。ラジオに興味をもっていた私は、川高に入学したとき、ラジオ部に入部させてもらった。

一年生のときのKRCの大仕事は、全校々内放送システムを作ることであった。夏休みに、学校から幾許かの製作費を頂いて、二年生、三年生の先輩方が東京の秋葉原に行かれて、アンプ・ケース、トランス、真空管、その他の部品を買って来られて、校内放送用アンプとして「807プッシュプル・アンプ」の製作が始まった。

勿論、このアンプの組立ては、主として二年生、三年生の先輩方が担当され、私も一年生は、福岡無線(当時は、札の辻のそばにあった)に、テスターの修理を頼みに行ったり、足りない部品を買いに行く走り使いであった。しかし、このような大出力のアンプは、個人的には到底作ることが出来ない代物であったから、窓の無い穴蔵のような部屋の中で先輩方の汗だくの組立て作業を一心に見守った。

私も一年生の主な仕事は、各教室にスピーカーを取り付け、そこからKRC放送スタジオつまりラジオ部の部屋まで配線を引き込むことであった。脚立の上に乗って校内の廊下の天井の棧に線材をステープルで固定する電工作業を何日もやってKRC全校放送システムが完成した。

昼休みのKRC放送は、一年生の部員と二年生の部員とが隔週で担当したように記憶する。当時KRCには、レコードといえば、陸軍戸山音楽隊演奏の「君が代」と「川中校歌」ぐらいしか無かった。そこで私は、家からファリヤ作曲の「水兵さんの踊り」という軽音楽のレコードを持ち込んで一年生部員担当の放送のとき、BGM (Background Music)として流した。このBGMは、一年生諸君には好評であったが、クラシック音楽好きのある先輩から「あんなスクエア・ダンスのような軽薄な曲は止めろ」とお叱りを受け、以後BGMは無しになった。BGMをフェイド・アウト、フェイド・インしながらアナウンスをする洒落た放送をしていたつもりでいたから、止めろといわれ、一年生部員一同大いに憤慨したものである。

その後、別の先輩が個人で2A3プッシュプル・アンプ、スピーカー、レコード・プレーヤーをお作りになり、KRCに持って来られた。2A3プッシュプル・アンプといえば、真空管アンプを信奉するハイ・ファイ・オーディオ・マニアにとっては、現在でも垂涎的である。生憎KRCには良いレコードが無かったから、私の家にあった、ノレナのソプラノ独唱「歌劇トラヴィアータ第一幕、あゝそは彼の人か」、シャリアピンのバス独唱「蚕の歌」、ハイフェッツのヴァイオリン独奏「狂想曲短調」などのレコード（無論LPではなく、戦前の七十八回転の音盤で、落とせば割れるヤツである）を持ち込んで、このアンプで再生してもらった。素晴らしい音がたちまちKRCに満ち溢れた。この音を聞き付けられて若い男の先生方がKRCに飛んで来られ、名曲にしばし聞き惚れていかれた。さすがに音楽担当の先生は、お見えにならなかった。まだFM放送もLPレコードも無く、若者が音楽に飢えていた時代であった。窓も無い穴蔵のようなKRCであったが、裸電球一つの下に集まって来た少年達は、エレクトロニクスの将来の発展を夢見て、やがてその発展を担うべく胸躍らせていたのである。

回想・「川高時代」

加藤 忠 義

早いもので、六十歳の還暦を迎えた。生まれた年の干支にかえる、という意味だそうで、過ぎ去りし日々の回想を綴るといいうのも年齢相応のことのようである。

さて、高校に入学したのは昭和二十五年の春。敗戦から五年、まだ戦後の混乱期の最中だった。それまでの三年間、川越城址、武徳殿を仮の校舎に、「無い無いづくし」のわびしい中学生生活を送った私にとって、校舎も校庭も整った川越高校は、やはりあこがれの学園に違いなかった。しかし、「旧制中学校の生き残り」で固められた高校のこと、「民主主義と男女共学」育ちの新生を、容易に受け入れようとはしなかった。



おだやかな春の日ざしが降りそそぐ、新学期の教室の風景は、こわれていた。

破れた帽子に、高足下駄。腰に手拭。手には竹刀？ なども所持していた、と思う。数人の学生がどやどやと乱入して来ると、「生意気だ」「態度が悪い」「上級生を見たら、おじぎしろ」etc……。お説教の洗礼である。しかも、B29の東京空襲の如く、連日の波状攻撃だ。罵声がびびき渡る教室の中、私がその時、はっきり見たものは、軍国主義の『亡霊』の姿だった。

軍国主義、私が生涯を通じて最も忌み嫌ってきた言葉である。思い起こせば、昭和二十年の夏、小学校五年で終戦。教科書に墨を塗って決別した筈の軍国主義教育。『亡霊』は、「洞喝」と「びんた」教育を彷彿させ、忘れかけていた戦争の悪夢を呼び起こす以外の何物でもなかった。『亡霊』との出会いは、三年間の高校生活で、最も忘れられぬ出来事の一つとなった。



『亡霊』との出会いが忘れられぬ理由は、もう一つあった。それは、中学時代から、「将来、新聞社とか放送局で働きたい」という漠然と抱いていたマスコミ志向に、拍車をかける結果となったからである。「ペンは剣よりも強し」

とは、正に名言。私が生涯を通じて座右の銘としてきた言葉であるが、お説教のひびき渡る教室で、ぼんやりと考えていた事は、「力による支配」に抵抗し、「権力」に堂々と立ち向かって批判し得るペンの力の偉大さであった。と同時に、戦争中、大本営発表という「ウソの固まり」の報道を信じて疑わなかった少年時代を思い出しながら、ペンの力の影響力の大きさに、不思議な魅力を感じていた。今から思えば、私の進路がはっきりと輪郭を表したのは、川高時代であった。



昭和二十八年、川高を卒業。入学時にあれほど忘れられぬ出来事があったのに、卒業の頃の事はほとんど印象に残っていない。恐らく、大学受験に失敗したショックの方が大きかったからだろうか。

しかし、心に決めた進路は全く変わらず、ついに六十歳の定年で退職するまで、志を貫き通すことになった。四十五年前、「生意気な」高校生の心をふるい立たせた『亡霊』との出会いは、今、なぜか、なつかしく私の脳裏にのみがえって来るのである。

『亡霊さん』、あなた達は今、どこで何をしているのでしょうか？

高校の頃

関 口 一 郎

中学の時はよく勉強し、成績もまずまずで、数学でも語学でも学校で教えてくれることより先に先に進んでいたような気がします。このため高校入試も軽くクリアーして、その結果もよかったようです。ところが、高校に入った途端、頭の優れた連中がぞろぞろといて、本当に話題もスマートで、とにかく、明るさと、自信に満ち満ちていたのです。とても勝てる相手ではないと、競争心の強い少年は、一気に挫折感を味わうことになりました。

そのようなことから高校時代の印象は、灰色で屈折したものでありました。学業はそれほどでなくとも、みんな名門高校に入った自信と明るさがあり、何よりも屈託のない貫禄に満ちていて、とてもかなわないように思えたのです。一年生の五月の連休が終わると、学校に行くのが嫌になりました、登校するのに言いようのない恐怖感におそわれたほどです。ですけれど、良くも悪くも人間形成に一番影響したのが国語の授業です。来る日も来る日も古典を読まされ、必ずしも楽しくはなかったけれども、後になって日本文化の底流にあるものと日本人の心のひだがわかったような気がします。

本居宣長は、文芸の本質を「物のあわれの表現である」と看破いたしましたが、卓見だと思えます。

源氏物語以来の数々の名作が登場いたしますが、ほぼ一貫しているものは、無常感の美しさであると思えます。四季折々の美しさ、厳しさ、そして必ずやって来るその終焉が、日本の心を形成して来たものと思えます。四

「源氏物語」の中で一番美しくもはかなく思われるのは、何と言ってもあの「紫の上」の少女の時です。「お景」と呼んでいた学校の生徒の中に、声をかけるのとはばかりような香ぐわしく匂うがごとき少女が居まして、ある時、ひばりが舞う野道を見え隠れしながら、後をつけて行ったことがあります。その時の余韻は今も残っています。

我々は、今年還暦です。人生が一回転して、すべての恩讐を超えて新しい出発が始まるとも言えます。これからは死を意識しながらの人生ですから、底に無常感を秘めながらも孤高の精神を堅持することができるとも言えます。これからは漂泊の詩人芭蕉が、前途三千里の思ひ胸にふさがりて幻の巷に離別の涙をそそぎながら、奥の細道に出立したのが四十代後半、五十一歳の生涯を閉じる直前に「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」と吟じたそのすさまじい気迫に、読む度にふるえるような感動を覚えます。

老いるのは年齢ではないと、移りゆく自然を見て、あるいは社会の不正義・不合理を感じて、時に落涙し、時に激怒し、それが若さだと思えます。自分が感動しないで、どうして人を動かすことができますでしょうか？

死を見据えながら生きることができれば、今までとは違った人生が開かれるかも知れないと思っております。それが還暦の意味だと思っています。

生きている中に生きる、その中に長く長く休むことができます。



四十年前を思う

齊 藤 弘

大きな希望に燃え胸ときめかせ、期待と不安の入り混じった複雑な思いであの大楠のもとに集い初めて出会いし多くの同期の皆さん、早いものでこれから四十有余年の歳月が流れたのですね。そしてあの古い歴史を持つ旧制の学生氣質をそのまま踏襲して来た二年、三年の上級生達、との多くの今でも思い出す多くの懐かしい出来事等、でも彼等は何か無意識の中に、我々下級生に違和感を感じていたのではないのでしょうか？ 新制第一回の我々と違い、長い間の抑圧された環境の中での学生生活を送って来ている訳です。当然ですね。

さて、本題に戻しましょう。あの一年生、初めてのクラスの友との出会い、自我介绍、中学時代の互いの話題、等々、私の記憶に間違いがなければ、担任はトクさんではなかったかと思えます。失礼ながら、あの粗末な服を着て、黒板に大きな字を書く、後々カンカラ缶の竹ぐしの御みくじまで出現、いやはや驚きました。そして二年生は、担任は石川さん。あの和製カント、デカルトの様な風貌のめがねの奥の優しい眼差し、以外と顔に似合わず心優しい思い遣りのある一面もありました。数学が苦手な科目で、大変苦労した事は今でも忘れません。そして最後に、最終学年は、担任は大川さんです。あまりにも良い事と悪い事が沢山あり過ぎて……、でも既に時効なので発表しましょうか？

京都修学旅行での体験談、学内生活での奇行、K君・Y君・O君・I君、次から次と話題にこと欠く事はありません。今でも一人静かな時間の中で懐かしく思い出しております。私は、もっとと行動力を発揮する事が出来なかった事

が、今になって残念でなりません。今一度、あの時代に戻れたらなあと、思っております。

記念誌の寄稿文として期待に充分応えるに足るものでない事は、小生の様な浅学の輩として、御容赦下さい。最後に編集委員の皆様の益々の発展と御健勝を併せて御祈り致します。

付記

ありし日の近藤先生の講義を思い出しつつ、次の漢詩をお送り致します。何か、私のこれ迄の姿を表現している様なので……。初唐の詩人、張九齡の作。

宿昔青雲志

蹉跎白髮年

誰知明鏡裏

形影自相憐

川高野球部卒業、回想、近況

篠沢稔夫

一年生——まだ寒い入学前の三月、平方の学校での合宿練習へ参加、連日球ひろい。広いグラウンドを何周も……。食事時にはお茶のつき方、ヤカンの置き方までなど、非常に厳しくしぼられた。同輩のSとK、合宿より脱走をトイ

レで相談計画。ウン悪く先輩にすっかり聞かれてしまい（大の方で、偶然にも二人の間に先輩が入っていたのだ）、夜明け前、実行にうつそうと部屋窓へ足をかけた途端御用になり、また叱られたり、大笑いされたり……。

二年生——南関東大会へ出場。当時は、埼玉県・千葉県より、それぞれの予選上位四チームずつで甲子園を争った。二年生ながらレフトで出場、鉾子商業と対戦、五回無死満塁で打順が来た。必死に打ったがセカンド凡フライ。情けないやら口惜しいやら。その時、球場は真白だった。あがっていたのだろう、守っては痛烈なショートゴロ、今は亡き益子、片足をあげてトンネル。レフトの自分の所まで打球速衰えず。益子いわく「あんな速エー打球、危なくて取れやシネエーヤ!!」。大差で敗退したが、この大会に出場出来たことで来年こそはと心に誓った。

三年生——いよいよ最後の夏の大会。猛練習を重ね、主将として出場。準々決勝で浦和商業に敗れ、甲子園の夢は露と消えた。涙が出たが、やるだけやったのだと爽やかな、またホッ!!とした気持ちで湧きあがって来たのをまざまざと思い出す。ボール一個、バット一本の時もあった。貧しい時代だった。

一般の高校生活としての思い出も数々あり。放課後、部の練習があった為か、三年間皆勤賞（二、三回代返あり）だった事。同級の八木が国語の徳さんを手洗場で小使いさんと間違え、直後の授業の時、その腹いせか万年筆を折られた事。化学は一年間でH₂OとSO₄しか覚えられなかった事。全校週番で下級生をお説教し、格好つけた事。入学時と卒業時の成績の落差の大きかった事（野球漬け故としておこう）。等々、寄稿するにあたり、沢山の思い出が走馬灯の如く、また昨日の出来事の様に浮かび、少年老い易く……。“光陰矢の如し、などしみじみ実感している”
昨今です。

さて近況だが、二十三歳の時より現在地坂戸市にて、ささやかなガソリンスタンドを経営、現在にいたっており、

幸か不幸か定年が無いので、生涯現役のつもりで頑張っている。老いは足からとか。小生、犬二頭（ビーグルとピレネー犬）を友とし、朝夕運動（散歩）を心がけており、その為か三年位前から少々「アル中」気味（ご同輩心配無用、歩く中毒）で、歩け歩け協会にも加入。余暇と仲間を作り、年齢と体力に合わせて歩いている。同協会公認の歩け大会（日本中に十大会ある）全部の完歩を夢みて楽しんでいる。

ところで、知人で六十歳よりゴルフを始め、八十八歳の今日まで元気にプレーを楽しんでいる人が居る。自己管理の全く下手な小生なれど、このご仁のように心身共に若々しく、またお洒落に、残る人生を過ごしたいものだと思望している次第（無理？）。

以上、拙文だけれど同輩全員の還暦後の益々の活躍と健康で長寿を全うされる事を祈念しつつ……。

達者でナ!!

野球部では、森田武昭、益子公平、泉名保夫が故人になった。部卒業全員で冥福を祈っている。

上海帰りのリル

平 不二夫

四十年という歳月の流れは、記憶の浄化作用というものを伴うらしい。当時の不都合な部分は適当に忘れてしまっている。

昭和二十年代後半という時代は、食糧事情も好転し、やっと日々の暮らしに落ち着きと気持ちのゆとりというものが見られ始めた時期でもあった。

新学制改革がスタートしたばかりの我々の時代の高校は、生徒も先生も現在のような入学時から全面的に受験競争に振り回されるということとは無く、また校則というようなものはすこぶる単純で、生徒の自主性というものが、よりはるかに自由に認められていたように思う。また少々な悪さをして、学校をサボっても、今の常識では愛嬌で通るようなこともあった。

先生方も、大半が旧制中学からの先生であり、実にのんびりとゆったりとした人が多く、また趣味の豊かな人も多かった。川越という土地柄も反映して、学校中が牧歌的な雰囲気であった。

私の場合、三年F組と美術部というものの抜きでは高校時代のことは語れないように思える。F組は芸能科の授業で美術もしくは園芸を選択した者だけを集め編成されていたクラスであった。このクラスは他のクラスとは性格が異なり、勉強は適当で、自分が好きなこと以外はやらないうという勝手気ままな連中が大半を占めていた。模擬試験の平均点が他のクラスより十点上低くとも、別に気にも止めないというような悠長な気分がクラスを支配していた。

美術部に所属をしていた私は、石膏デッサンと建築設計以外のことにはあまり関心もなく、学科はまったくお義理のおつき合い、ただ美術部のためだけに学校に通うというような毎日であった。デッサンの技量の向上は思うに任せず、将来何になるのやら見通しも無く、ただ闇くもに力み返り、猪突猛進を続けていたという印象が強い。

私にとって、美術の大澤寛先生との出会いも、重要な意味を持っていた。先生より当時の高校レベルでは考えられぬような様々なことを教えて頂き、今の私は在ると感謝をしている。その当時、校舎の新築工事のため、グラウンドの

向こうの武徳殿に仮住まいをさせられていた美術部の薄暗い寒い部室で、デッサン用のパンの耳をかじりながら、友達と黙々と石膏像と相対する日々が続いていた。そのような時期、部室の窓越しに見えるテニスコートの向こうを通る、どこかの宣伝カーがよく流していた歌が、美声の津村謙が歌っていた『上海帰りのリル』という意味不明の歌であった。「どこに居るのかリル、誰かリルを知らないか」。

歌は世につれ、世は歌につれとよくいわれているが、この歌がナツメロ特集などで流れてくると、私の脳裏には忽然と高校時代の美術部の雰囲気、友人達の顔が鮮明に甦ってくるのである。

「どこに居るのかリル、誰かリルを知らないか」のリルさんとやらは、具体的には今もってさっぱり意味も分らないが、どうも私はこの年齢になっても、リルのような見果てぬ夢を追いかけているようである。

ついでに、私達が武徳殿の部室で石膏デッサンをしていると、近所の小学生達がよく窓際によじ登ってきて、描いているデッサンを覗き込んでいたが、その中に将来の私の家内になる娘が居ようとは、当時はまったく知らなかった。これも昔の話である。

あの頃

高山 勇二郎

なんだ、お前が川高へ行くのかと、豊実（現豊高）出の中学の担任外のN先生に言われながら入学した私、学力不

足で、その後、同窓の皆さんについていくのが大変であった。

その1

化学の教科書の巻末に出ている設問をやるように言われ、放課後、実験室で予習をしたが、どうしても目的にあった結果が出ず、試験管内に入っていた薬品を勝手に混ぜ合わせたら爆発し、危うく大怪我をするところであったが、一緒にいたA君、N君以外に誰にも知られる事がなかった。それ以後、化学は好きになれなかった。(サリンでなくてよかったが)

その2

進学校なので、皆よく勉強していたようであるが、私は、勉強が嫌いで選択科目は、宿題や予習復習をしなくてよい音楽を取ったが、今のようにカラオケブームになるのが見通せたら、もう少し真面目にやっておけばよかったと思っている。

その3

通学が同じ方向の武藤、荒木(故人)、小林と約三十分歩いて入間川駅(現狭山市駅)へ、それから西武線で本川越駅に出て学校まで約二十分、片道五十分の道程をよく歩いて通ったものだ。その上、履物は朴歯で、ある日、南大塚駅でドアが自動で閉まった時(当時ドアは、手動と自動が半々位)イタズラでドアに朴歯をはさませ、駅員がとんで来たので、中へ引き抜こうと思って力を入れたら鼻緒が切れ、本川越駅から裸足で学校まで行った事があった。そんなイタズラをしながら西武に勤めたのは、何の因果なのだろう。

その4

新人生歓迎マラソン大会と銘うって行なわれた全校七百五十人のマラソン大会では、当時県内の中長距離界では、非常に強かった川高の陸上競技部員を含めて三十三位に入り、山口先生から陸上競技部にも入っていないのに、こんなに早いわけがない、途中から折り返したのだらうと言われたが、事実である事がわかり陸上競技部に入るよう勧誘されたが何となく入部しなかった。確かその時の賞品は、コッペパンだったと思う。

回想 私と駅伝

東 島 太 一

高校入学と同時に即陸上競技部に入部した。中学時代、基本的な練習などした事が無かったので、初めは大変きつく感じた。当時の本川越の駅の階段（10段位）を上るのがつらかった。入部三ヶ月後に米山君と練習を抜け出し（脱走）、高校野球を見に出かけたが先輩（二杉さん）に見つかり連れ戻された。怒られたかどうかは覚えていないが、多分怒られたであろう。

こんな事があつたせい、練習にも打ち込んで、中学時代三回対戦して一度も前を走る事が出来なかった同僚の野口君にも五分に走れる様になった。

そして十一月二十二日、全国高校駅伝埼玉県予選が浦和の県庁前の周回コースで行なわれた。幸いにも一年では私一人がレギュラーに選ばれた。一番負担の軽い二区を受け持つよう命ぜられた。一区で二杉先輩が二位で中継所に飛

び込んで来た。一位がどの学校か覚えがないが、走って間もなく一位を抜き去り、後は二位との差を広げ三〇〇mの差で三区へと継いだ。だが以後は四位、七位、九位、十一位と最終的には十一位に終わった。優勝したのは浦和高校。でも全国大会では二十一位だった。

明けて一月二十一日、埼玉県下駅伝が寄居↓浦和間で行なわれ、私の他にも野口、三上の両君もメンバーに加わり、見事三位入賞を果たし、関東大会出場権を獲得した。

関東大会では出場四十六校中十七位と余り良い結果ではなかった。以後、米山君もメンバーに加わり、三月二十一日の多摩湖一周駅伝では見事優勝した。以後は、皆さんも承知の通り、川高駅伝の全盛期を迎えたのである。

私にとって駅伝は、種々な事との出会いでもあった。生まれて初めて海を見たのも関東大会に出場した鎌倉での事である。また、十和田八幡平駅伝では上野から約三十時間汽車の旅、全国大会出場時は、当時の特急ツバメ号（東京↓大阪間六時間）での遠征。また、当時着る物もなく、親父の古いオーバーを着ていった等、思い出はつきない。

こういうすばらしい体験を出来たのも、松本先生を初め、良き先輩、同僚、後輩の皆さんに恵まれたからである。改めて誌面にて感謝します。

真つ白なバスケットシューズ

戸田敏雄

還暦記念の文集に、川高三年間の思い出をといて頭に浮かんでくることは、バスケットボールに明け暮れた青春の日々ばかりだった。それもどちらかというと、ほろ苦い思い出が多かった。

「お県」の川女体育館（とは名ばかりのおんぼろ体育館^{けい}謝々）で、練習できることの幸せを味わった日々。決して向こうのクラブの可愛い女子部員の顔を見られるせいだけではなかったのだ（強がりではなく……）。自慢じゃないが、埼玉県下の大会では常に優勝、準優勝のわが川高バスケット部は、当時専用の体育館なし。日本シリーズ三連覇の西武ライオンズが、仮りにホームグラウンドを持っていないとしたら……。みたいな話であった（ちよっとたとえが甚だ僭越で恐縮だが……）。ふだんは炎天下の屋外コートで猛練習、室内競技のバスケット部員としては、つくづく体育館で練習したいと思ったものである。県大会が近づくと慣れるためにも室内コートの練習がやりたいということとで、おんぼろ体育館が国立競技場くらいに光って見えたのだ。誰もが物資不足の時代だから、道具がない、お金がない、コートがない等々は、あまり苦にはならなかったが、毎日履くバシュー（バスケットシューズ）の新品が買えないのはつらかった。先輩のお古のバシューを新人のわれわれが順番にお下がりをもらって嬉しかったのも懐しい思い出である。そんな状況だったから、新品のバシューとトレニングウェアが時に夢の中に出て来たものだ。

忘れもしない三年秋の大会、順調に勝ち上がって決勝戦で浦高と対戦した時のこと。三ヶ月位前に国体予選の決勝

戦で、一点差で負けたライバルだ。それも前半の大量リードを油断して最後に逆転負けし、広島行きの国体出場をさ
らわれた相手チームだ。その浦高チームと三ヶ月ぶりにコートで再会したときのショックを忘れることができない。
国体帰りの栄光のチームは、当時、どのチームも揃えていなかった真っ白な揃いのトレーニングウェア、足元はこれ
また真っ白なバスケットシューズが光っていた。今も昔も人気薄のスポーツで、応援・観客の少ないバスケットボー
ルでも、県大会の決勝戦ともなればそこに応援もあった。はき古したシューズのわが足元。ピカピカの最新鋭B
29に立ち向かうおんぼろ戦闘機のごとく、涙が出るほどの悲壮感であった。ゲームを決めるのは技術と根性で、ユニ
ホームや靴は関係ないと胸の内では繰り返してやっていたのだが……。試合の結果は？ 約一時間半、相手の足元
ばかり見ていたような気がしてスコアの方は？

四十数年後、父が夢にまで見た新品のバッシュを息子たちは、かかとを踏んで普段履きに使っている。青春のほろ
苦い夢を足で踏みつけられた思いの父は、思わず息子にこう怒鳴るのであった。「物を大切にしろ。戦争が始まった
ら、90%を輸入に頼っている日本は、たちまち耐乏生活になるんだぞ」と。しかし『消費こそ美德』の時代に生ま
れ育った息子は「タイボー生活ってなに？」。ああ、やがて「昭和」も遠くなるのだろうか……。

追記

われわれバスケット部のキャプテンとして、チームメイトに信頼された大沢俊三君が、若くして逝ったのは、還暦
を迎えるこの歳になってつくづく残念に思う。告別式の日、追悼の言葉を述べてくれと言われ、華麗なプレーと明る
い笑顔で男子にも女子学生にも人気があった彼のことを思い浮かべながら涙で弔辞を述べたことが、今でも鮮明に記
憶に残っている。慎んでご冥福をお祈りします。

五十の手習

畑 梅 三

学校出てから四拾余年、過ぎた日々は全く早い。

歳を重ねる毎に母校は懐しく、いろんな想い出が蘇って来る。当時の私は井の中の蛙にも足りない越生の田舎者、川越は大都会だった。見るも聞くもすべてが実になった年代。そんな学生生活の一コマに、ある日仲間の一人が遅刻した。教師は強い口調で「何故遅刻したのか。お前の家の商売は何か!」。小さな声で「ハイ、医薬商です」。「何! 百姓か」。その時、他の仲間の一人がスクツと立ち上がり「先生、今の言葉を取り消して下さい」。教室は一時騒然となった。しばらくして教師は素直にあやまった。遅刻したその事より、教師に向かって堂々と意見の言えるスゴイ奴。また教師も生徒に向かって素直にあやまる度量。親・教師・先輩はすべてと思い込んでいた私には、ある種のショックだった。旧制と新制の変わり目、世の中すべてが変わろうとしていた時代、特に教育の現場は一番難しい時代だった。今でもこの事は私の脳裏から離れない。いい意味で心の糧としている。人と人との絆ってこんな事からも生れて来るものか。そんな教師、そんな仲間を今でも誇りと思っている。その頃、美術室にほんの二、三回覗き込み、デッサンの勉強をした（入部はしていない）。還暦を迎える今、何か自分の足跡をと思い、三、四年前から趣味として水彩画を描いている。キャンバスに向かうと、不思議に当時の事が想い出される。

五十の手習いのスタートはあの頃だった。

感 懐

堀 井 清 史

還暦を迎えて、これからは六十歳プラスワンの気持ちでの新しいスタートを切った所です。

これまでには私にとって大きな出来事、また小さな出来事が山ほどありましたが、川高時代のことのいくつかをラ
ンダムに綴ってみました。

◇母校・川越高校

昭和二十五年四月入学、担任は佐藤先生。

入学してまず感じたことは、中学校のときの雰囲気と比べ、厳しさに格段の差があり、身のひきしまるものがあつた。三年が経ち、卒業して、大学生、社会人となったが、川高で受けた教育が私のバックボーンとなり、今日まで来られたのだなあとつくづく感じている。

◇同窓生

新制中学校第一回生であった私は、同じ中学校から、あこがれの川高へ十一名が合格し、仲間と共に入学した。この仲間とは高校時代になっても草野球チームでプレーした懐かしい思い出がある。しかし残念なことにその同窓生のなかで既に他界したものがおり、人生はいろいろなあと感慨ひとしおである。

◇部活動

図書部に入った。多分に佐藤先生の影響を受けた。源氏物語や井原西鶴の作品について夢中になった。この傾向は大学に入っても尾を引いてつながっていたように感じている。高校時代により教師にめぐり会えたということである。

◇川越線

たまに、埼京線に乗って、大宮、浦和へ出かけることがある。現在は電化されて大変スピードアップされ便利になった。昭和二十五年当時は、蒸気機関車が五両程の客車を連結して、単線のレールをきしませて走ったものである。草野球の虫であった私は、母校の野球部の試合の応援に足しげく大宮まで出掛けたものである。そのときの一コマであるが、今では考えられないような面白い思い出がある。丁度、指扇から日進駅へ向かっていた機関車が、駅手前にある急勾配の坂を登り切れず、数回の往き来を繰り返した末にやっとのことという感じでたどりついたことである。そのときは機関車にご苦労さんという気持ちになった。蛇足ではあるが、そのときの試合は勝利に終わったと覚えている。

◇ホウ鹵下駄

自分の家から学校までは、三キロメートル程の距離ではあったが、新調のホウ鹵下駄をカラコロと音をひびかせて、にぎやかに通学したものである。学生帽・制服をきちんと身につけて、春夏秋冬それぞれおし通したことが、大変なつかしいものである。

◇座右の銘

『一苦一楽 一疑一信』 菜根譚の一句である。何事でも物事の判断は、相対的にすることが大事なことである。知識や学問の進歩は、このことが出発点となると考える。私もその考えにたって、家庭、大きくは日本、世界の幸福

のために、十分の心くばりを出来るようこれからも頑張つてゆきたい。

大東亜戦争の思い出

矢部 武 四

私にとりまして大東亜戦争が一生で一番の思い出であり、また川越高校に入学出来た事にも関係があります。私は、東京市小石川区（現在の文京区）に生まれ、地元の金富小学校に入学致しました。大東亜戦争（昭和十六年十二月八日）の勃発により戦局がやや不利になり初め、昭和十九年頃より首都東京への空襲が多くなりました。私達小学生は第二の国民として東京より田舎へ疎開をする事になり、私は田舎があるにも拘わらず（現在の比企郡川島町平沼）、父親が「可愛い子には旅させよ」の話に従い、宮城県玉造郡鳴子町（鳴子温泉）へ集団疎開致しました（田舎のある人は縁故疎開といった）。小石川区の小学校は全部鳴子温泉へ疎開しましたが、その他の区の小学校はお寺等に疎開して大変苦労した話を聞きましたが、私は温泉でしたので恵まれて居りました。終戦（昭和二十年八月十五日）後の十月末に約一年二ヶ月の集団疎開を終わり、金富小学校に戻って来た訳ですが、全生徒の家は焼失して居り、私はそのまま父親の実家である比企郡川島町平沼に再疎開し、三保谷小学校へ編入しました。その関係で私は金富小学校は卒業せず、三保谷小学校を卒業した訳です。今でも金富小学校（特に鳴子温泉へ集団疎開した人が中心）と三保谷小学校の友達と旧交を温めて居ります。

その後三保谷中学校を卒業したお陰で川越高校へ入学出来たし、現在の住居も川越高校時代の親友である猪鼻三男君のお陰で新築出来、これも縁だと思って居ります。

尚、大東亜戦争のために実兄（北支で戦死）と義兄（姉の夫でフィリピンで戦死）の二人が戦死し、家も焼け出され、集団疎開に行つて苦労した等々、悪い思い出が多かったと思います。

しかし、敗戦直後の荒廃した国土、混乱の時期に国民の心に灯りをともして勇気つけた人が居り、今でも心に残つて居ります。

昭和二十年十月、終戦の二ヶ月後に（丁度私が鳴子温泉の集団疎開から東京へ帰つて来た時）、「赤いりんごに唇よせて……」の出だしで「りんごの唄」を歌われた歌手の並木路子さん。そして泳ぐたびに世界新記録を出し、ロサンゼルスで全米水上選手権大会に出場し、一五〇〇米自由型で当時としては前人未踏の大記録である十八分十九秒で優勝された、フジヤマのトビウオ古橋広之進さん。このお二人の良い思い出がありました。

思い出すままに

山 田 恒 雄

入学して大変だと思った。皆優秀な人たちばかりである。市内の中学から来た生徒が多く、圧倒されていた。無論、自分だけがそう思っていたのであろうが、彼らは元気がよく、自己主張がきちんとでき、表現力が豊かであった。田

舎から出かけた私には気おくれがして、一緒にやっていけるのかどうか不安であった。とにかく各中学校の学校間の格差が非常に大きかったように思う。私の中学時代は、勉強らしいことはしたことがなく、毎日が野球と魚つりの連続で、そのまま高校へ行ったのだから学力があるはずがない。何しろ源氏物語は、源平合戦の物語ぐらいいにしにしか思っていないかったころ、日本の古典といわれる名著を原文で読まされるのだから、たまったものではない。内容は皆無であった。数学なども、微分や積分になると何が何だかさっぱりわからなかった。まして物理ときたら、授業そのものがわからなかった。当時の先生方も新制中学から入学した生徒には、頭をかかえていたに相違ない。口ぐせのように、新制はだめだ、だめだと、よくしかられた。言われている方も何がだめなのかわからないのだから始末が悪い。とにかく、今思うと、私の数学の学力はやっと分数がわかる程度だったと思う。よく登校拒否にならず通ったものだと思う。

しかし、体力だけは人並みにあったように思う。食料事情も少しはよくなり、昭和二十六年にはパンが売られるようになった。丸其のアンパンのうまさは、形も味もはっきり覚えていいる。私は何の考えもなしに野球部に所属した。中学時代は少しはうまいとうぬばれて入部したのだが、皆優秀な人たちであった。何としても実績がなければだめであった。毎日暗くなるまで練習である。芽の出ないものは下積だから、バッティングキャッチャーをすること、グラウンド整理をすること、ボール拾いをする、こと、等である。私是要領がわるいものだから、先輩たちに言われたままのことを着実にやろうと思ったから大変であった。とにかくつらかったのは、先輩たちの打ったボールを堀や草むらに入って探すのである。一個たりと無駄にはできないのである。当時は、部費は少なくボールは買えない。古くなったボールは、弘武堂で繕って使うのである。しかし、打球の球筋さえはさなければほとんどのボールは見つけること

ができた。また、バッティングキャッチャーも大変である。初めての練習の日にそれをやれと言われ、生まれて初めてキャッチャーをやった。ミットといっても薄い豚皮二枚のものである。ボールを受けると、痛さが心臓まで伝わってくる。終わってみたら手の厚味が最初の二倍になるまで腫れあがっていた。また、夏は午後八時ぐらゐまで練習をやる。薄明りの中で、ただ感だけを頼りに黒いボールを受けとる。それが確実にとれるのだから不思議である。高校野球のドラマが生じるのもうなづけるのである。人は研ぎ澄まされた神経からはかり知れない力を発揮するものであると思った。華やかな舞台へは一度も出たことはなかったが、よい体験であった。

私は、自分の特性を自分で見い出せないまま、教職の道を選んだ。三十七年間には、夜を徹しての仕事が何日も続くことがあった。自分の能力の限界を感じるものだが、それでも、もっとよい授業の仕方があるはずと、創造する。生徒とは毎日が一期一会だからである。そんなとき、よく野球部の下積生活のことが思い浮かんで、頑張れると確信した。私には教員があつていたのであると思う。

回想「私と運動」

横山 和夫

生育歴を振り返ってみると、生活の大部分が運動とかかわっていたようだ。

北海道の寒村で過ごした幼少時代は、自然が相手の遊びで夏は木登りや魚とり、冬はソリ、スキーにと興じていた。

満州での小学校時代は、友だちとの遊びが主で、帰宅するとカバンを放り出し、戦争ごっこ、メンコ、コマ廻しで一日が暮れた。基礎体力が遊びの中で築かれていたのかも知れない。

本格的に運動するようになったのは中学生時代で、家の仕事の合間をぬって部活動に励んだ。朝四時に起きて畑を耕し、部活動が終わり、星明かりの中で農作業を手伝うという日課であった。技術的なことは部活動で、体力づくりは家庭の仕事を通して培われたと言えよう。

野球部ではキャッチャーで五番を打っていたが、練習量の少ない割には好成績を残し、県下でも名の知れた選手の一人となった。

高校では陸上部に所属し、中長距離を専門に練習した。松本先生のスパルタによく耐えたと我ながら感心している。チームが関東駅伝大会に優勝、全国駅伝大会で第三位という輝かしい記録を打ちたたてたときの補欠だった。自分の限界に挑戦する気力と厳しさに打ち勝つ忍耐力を培うことができたと思う。

教員になってからは、部活動の指導と合わせて趣味のスポーツに挑戦した。三十代はスキー、四十代からはゴルフにとうつつを抜きし現在に至っている。鍛えることから楽しむ運動に変わってきた。

長年運動やスポーツに親しんだことで自慢できることは、先ず、頑健な身体がつくられたことだと思う。六十年來怪我以外の病気になかったことがないというのが自慢のひとつである。

二つめは、少々の苦勞や逆境に追いやられても挫けない気力や忍耐力が人一倍あるなあと自画自賛できることである。

三つめは、多くの良き友人に恵まれたことで、何かことある毎に駆けつけてきては励まし支えてくれるのは、共に

汗を流した仲間たちである。

戦中、戦後の厳しい時代に生き、決して恵まれた環境ではなかったが、その年代年代で結構楽しみながら身体を鍛えてきたように思う。

これからは人生八十年の時代、今までの財産を大切に人の助けを必要としない健康な日々を過ごしていきたいと念じている。

還暦を迎えての感慨

吉田 茂

◇ 三十六年間、会社という制約されたものの中にいたものが、全く自由になってしまった。

「周囲を無視し、地域活動・奉仕活動もご無礼」してきた。これらの恩返しをしていきたい。

◇ 三十六年間勤めた会社にピリオドをきき、今では自由な日々を過ごしている。

行動計画をたてるころまではしていないが、行動スケジュールを自分なりに決めて動くようにはしている。これだけでも時間を大事にしているという満足感は得られるものである。

今では、「農業」に転身中である。

◇ 川高を出てから四十二年。実に早いという印象である。まだ身体も気持ちも若いと自分では思っている。なのに髪だけは白い。

高校当時、「陸上競技部」に所属。スポーツと名のつくものは全て好き。特にマラソン、駅伝は大会があると行く。また、ゴルフのプロトーナメント試合はよく見に行く。自分でプレーもする。でも、仲々満足するようなスコアはでない。

少しでもうまくなろうと結構、練習場には行く。若い者と隣り合わせになることがある。と、どうだろう。負けん気がムラムラと出てくるではないか。飛ばしの競争をいつの間にかしている。でも、距離は負けている。これは年の差ではない。打ち方が悪いのだろう。

◇ 誕生してより六〇年。早足でできてしまった。ほんとうにあつと言う間。髪だけが変わっている。

楽しかったこと、苦しかったこと、いろいろあるが、失敗や苦しかったことがよく覚えている。川高陸上競技部所属当時でよく想い出すのは、真夏のグラウンドでの練習中、暑さで途中倒れたことである。その時は全く意識がなくなっていた。同僚にかつがれ、涼しい所まで連れていってもらい介抱された。これは今でも覚えている。

その同僚も、今では髪が真っ白。この話をしても記憶にはないという。同僚とは有難いものだ。

初めてのスキー

吉 田 利 行

昭和二十七年二月一日二十時四十分に私達、川高二年生六十人は谷川温泉に向けて川越駅を出発した。大宮へ着いたのは二十一時二十分であった。水上行二十二時四十分の汽車に乗る為、まだ時間があるので駅から外へ出て、小高・内田・桜井・浅見・猪鼻君達とパチンコをやった。しかし最後には全部負けてしまった。倉橋君に教わって、私と内田君で靴へ金具を打ちに行った。金具を打つとスキーがぴったりとはける為である。時間が無いので急いで打って駅へ戻った。

まもなく汽車が来たので乗った。車内は非常に暑いので驚いた。とてもオーバーコート等は着ていられなかった。汽車は満員でとても座れなかった。

熊谷で私の側に座っていた人が下車したので、内田君と交代で腰を掛けた。私は夜行列車は初めてで、実に楽しかった。車内は皆、寝静まっていた。大宮から約三時間半乗って、午前二時二十一分に水上駅へ着いた。駅より深夜の雪の中を私達は一列になって歩いた。谷の上にかかっている吊り橋を渡る時に、橋がかなり揺れたので気持ちが悪かった。谷川の水がものすごい音をたてて流れていた。懐中電灯を照らしながら山道を歩いた。暑くて汗をかいた。私は雪国へ来たのは初めてなので珍らしいものばかりであった。駅から四十分歩いて、午前三時五分にやっと金盛旅館へたどり着いた。私はすぐ数人で温泉へ入った。それから寝たのは午前五時頃であつたらう。

二時間位過ぎてから、川の流れの音で目が覚めたので、また温泉へ入った。女湯の方がすいていたのでそちらへ入った。朝食をすませてから八時には全員が旅館でスキーを借りて、スキー場へ行った。誰もが初めてなので転んではかりいた。最初は立っていることも出来ないで、歩く練習をした。午前中は天気がよかったが、午後になると少し雪が降ってきて、そのうちに吹雪になったので、三時頃には宿へ帰って来た。靴下がぬれたので乾燥室へ持って行った。旅館は四階だてで、すぐ下に谷川が流れていた。夕食がすんでから、私と、中野、小高、田中、猪鼻君と十時頃まで卓球をやった。それから温泉へ入ってから寝た。

翌朝、目を覚ますとまだ皆寝ていた。今日の天気はなんとか大丈夫のようである。昨日は第一スキー場で練習したので、今日は第二スキー場へ行った。スキー場としてはかなり良いけれども、あまりにも傾斜が急なので、私には滑ることが出来なかった。第二スキー場のさらに奥へ、須ヶ間君と行ってみた。そこでは、横田、岡田、田中先生達が練習していた。私もそこで少しやった。西に真っ白になってそびえているのは、遭難者が多いので有名な谷川岳であった。午後からは、第一スキー場へ行った浅見君に写真を撮ってもらった。私はとにかく滑れるようになった。しかしまだ回転は出来なかった。

午後四時、私達は温泉へ入って二日間の疲れをとってから帰途に着いた。またいつか来ようと思った。帰りの汽車は濱野君の隣へ腰を掛けられた。小泉君にアイスクリームをおごってもらった。

二月三日二十一時四十分川越駅に帰着した。とても楽しい旅行だった。

四十四年前のビデオテープ

米山大恵

高校に入学したのは、まだ戦後の変動混乱が尾をひいている、渾沌とした時代だった。

上級生は旧制中学に入って、この校舎で長年学んできたので、ずいぶんと大人に見えた。その上級生が、昼休みに「本校は質実剛健を以って建つのだ。君達、必ず運動部へ入部し給え」と演説をした。

授業では徳サンの国語、岡田先生の園芸、近藤先生の漢文（ほとんど漫談）が強烈だった。雨の平林寺への吟行、毎月の句作、古典を読まされたり。だがこれは、後々の私の仕事に大いに役立ってくれたので、今でも感謝している。上級生の演説にのせられて陸上競技部に入り、松本利雄先生から「本校陸上部の偉大なる先輩鈴木聞多」の話を聞き胸踊らせたのが、昨日のように思い出される。運動場では野球、サッカー、陸上等の各部が一緒に狭かった為か、陸上競技部は、時々県立女子高校のグラウンドへ出かけて練習を一緒にした。普段は覗くことさえ大事件であったその女子高へ大っぴらに出入りできたのだが、放課後のことだから、運動部以外の女子高生に会えなかったのは、何とも残念であった。

二年生の夏休みに、十和田・八幡平駅伝競走に出場することになった。埼玉からは本校と浦和商业高校だったと思う。上野駅から夜行列車に乗り、床に寝ころんでの、初めての大旅行だった。十和田湖畔の和井内ホテルに泊り、翌日は山道を走ったが、実に長い区間でひどい目にあった。その晩は湯瀬温泉に泊ったが、川の流れが実に美しかった。

同学年に、中学時代から県下第一であった野口、東島、三上等が居たので、二年生の冬、駅伝競走で全国大会へ出場できたが、予選の後、十二月一日に私の家（寺）が火事で全焼してしまった。この時荒井校長に校長室へ呼ばれて、「大変だろうから全国大会（十二月二十六日）へは無理に行かなくてもよい」と言われたが、どうしても大阪へ行きたかったので、「大丈夫です、是非行かせて下さい」と頼んだ。校長は、家の事情や火事による動揺からの不調を心配されていたのであったのだろうが、そのときはそこまで気が回らなかった。大阪での宿は日本橋近くの京屋で、試合までの間、よくバチンコ屋へ行ったが、玉の出はあまりよくなかった。

いよいよ大会当日、大雨となり、シューズに穴があいていて、自転車伴走の松本先生がそのシューズで大丈夫かと心配されたが、足に馴染んだものであり、無事に走り終えることができた。記録も上出来で本校は第六位に入賞し、翌年も全国大会に出ることができて、この時は第三位であった。翌二十七日は好天気となり、松本先生の大奮発で奈良・京都の名所めぐりをしてきた。

一年生の終わるか二年生の始め頃、東島君と二人で東京大塚のハリマヤスポーツへマラソン足袋を買いに行ったが、生まれて初めての都電で料金がわからず、降りるときに「多分、十円だろう」と十円渡して歩き出したら、大声で「お釣りますよ」と呼ばれて、東島君には今でもそのことで笑われる。

講談社の「高校駅伝三〇年」や、柳川君に写してもらったグラウンドでの写真を見ると、四十三年前のチームメイトが、沿道の人垣が、一緒に走った他校の選手達が、鮮明に見えてくる。ビデオテープを見ているように。

純粹な国民学校生

渡 邊 茂

東北地方の冷害大凶作の昭和九年に生まれ、バブル崩壊・冷夏の米不足の平成不況のどん底の年に定年退職を迎える我々は、幼稚園で紀元二千六百年の旗行列に参加し、国民学校第一回生として入学、その年の十二月に大東亜戦争勃発、五年生の八月に敗戦、六年生終了で国民学校は廃止、正に我々のみが、小学校の体験の無い唯一の世代なのです。

私の通学していた国民学校は、日本軍に接収されていたために、解放後足元からシラミがはい上がり、進駐軍からのDDTを頭から振り掛けられつつ、電灯もつかない教室で暗くなるまで旧制中学校に進学するための勉強をさせられていた。卒業間際になり、「全員中学校に入れる事になった。学校から通知があるまで家で待機していなさい」とのことで一ヶ月以上家庭で空腹を抱えながらも、のんびりと遊んでいた。やがて小学校の校舎を借りて、新制中学校第一回の入学式がおこなわれた。六・三・三制のスタートである。いま思うと、生徒が先にいて先生が後から決まり、校舎・校庭も無いという奇妙な開校式だった。中学時代は、二年生・三年生を武徳殿（現在の川越城本丸御殿）で過ごした。

さて、高等学校に進学する時期になった。入学試験も現在行なわれているものとはだいぶ違っていた。入試科目は全教科試験で、試験会場は、中学校ごとに指定された学校で受験した。私の中学校は幸い、隣接の川高で男女共入試

を受けることになった。受験教室は、私達が一年生のときに使用したあの旧寄宿舎のボロ教室だった。監督は、体育の松本利雄先生だったと思う。黒板に時計の絵を書き、何回も針のところを書き換えて、時間の経過を知らせて下さったことを記憶している。受験後、志望校を選び、入学願書を提出することになっていた。私は、川高の隣のテニスコートでいつも川高生と一緒にテニスを練習していた事などで、何と無く川高に願書を出願した。

合格発表日の前日、近所の遊び仲間が、「川高の入試結果が発表になっているよ」と知らせてくれたので、学校へ飛んで行くと、渡り廊下に受験番号の記された小さい紙が掲示されていた。自分の番号を見付けたときの嬉しさは、今でも忘れない。昨今の合格発表と比べるとかなり粗末なものだった。

いよいよ川越高等学校に入学。入学してまず、校庭に裸足で整列させられ、出席簿番号が身長の高い順に決められたのにはとまどった。クラス替えは、一年生で二回、二・三年生で一回ずつ、計四回、四人の担任の先生にお世話になった。そのお陰で多くの同窓生と同じクラスになれて幸せだった。また、今日教育界で問題視されている週休二日制も、我々川高生時代には実施されており、土曜日はクラブ活動に一日汗を流していた。

私は、三十七年間、高校の教師をしているが、川高はかなりユニークな学校だったと思う。新人生のころ、先輩のまねをして憧れの白線二本入りのあご紐をはずした学帽をかぶり高下駄を履いて登校し先生に叱られたり、防災避難訓練のとき校庭に面した教室でクラス全員が弁当を食べていて訓練に参加せず担任の大川明治先生を困らせたこと、国語の佐藤徳四郎先生に授業で搾られたこと、明治時代の旧木造校舎の改築等、様々なことが思いうかんでくる。

終わりに、人生六十年の二十分の一の短い時期であったが、色々な経験と思い出と共に、高校時代に出会った同窓の皆さんに公私にわたりお世話になり、心より感謝をしております。

忘れ得ぬこと

渡 辺 久 純

誰にでも、何年経ても忘れられないことがある。私にとっても四十五年前、川高1Fの時に起こったこと―私が引き起こした事件―は、生涯の思い出として残ることだろう。

ある数Iの授業の折り、担当の石川正明先生がシート・テストを実施された。終了後、例によって隣席の生徒同志で採点することになった。私はAさんの答案をチェックした。彼の答案の一ヶ所さえ訂正すれば確かフル・マークであったと思う。そこで親切ごかしで、その箇所をそっと直してしまったのです。たまたまそのテストは難しく、いつも点数のよいMさんを越えてAさんが最高だったことが先生より公表された。私は、Aさんにしてあげたことが友達甲斐のあることと誇らしく何人かのクラス・メイトにあかしてしまった。そのなかにはMさんもいた。当時、彼は板橋区から通学していて、東上線車中仲間のひとりで親しくしていた。

その翌日であったと思うが、私は職員室に呼び出された。石川先生から問いただされて、こんこんと説諭された。「きみのしたことは公文書偽造に値いすることだ。」と宣告を受けた。この言葉は私の心に葛藤をおこさせた。『自分が悪いことをしたのではない。相手のためにやったことだ』『誰が先生に告げ口したのだ』。その生徒に対する恨みであった。誰であるかは明らかであった。クラス・メイトともあろう者がと責任転嫁して、その友人との親交を絶ってしまった。ほんのちょっぴりした反省で、職員室からは帰されたものの、悔い改めるまでには至っていなかった。本当に友

達を思っているのではなく、いつも自分を正当化し、他人を犠牲にしても自己確立を謀ろうとする自分の姿に気付かなかった。

そのことから四年を経た学生時代の四月に信仰の友M兄に出会った。彼の友情は感情移入でもなく、真の愛からのものであった。彼から学んだことは、自分を中心に生きている我、そのような者を愛して救われる命への道でした。今年度、日本基督教団国分寺南教会の伝道師として招へいされたのも川高時代とかかわっている。和解の福音の中に共に生きることが生きがいとなっています。



三、回 想——私の歩んだ道

私の回想 人生はマラソンだ！

浅 倉 正 夫

六人兄弟の下から二番目、陸上競技に専念したおかげで、私だけが教師という道を選び、好きな体育で生活できることは幸福だ。教職生活三十八年間、ほとんど休まずに勤務し、無事に定年を迎えられたことを思うと感無量で胸が一杯である。

昭和三十二年大学卒業し、川越市教育委員会に勤め五年間、次に母校の川越市立富士見中学校から福原中学校を経て初雁中学校まで、体育教師として二十年を過ごした。昭和五十八年から十三年間は管理職として学校運営に携わった。その間、忘れられない思い出は、昭和三十九年の第十八回東京オリンピック大会、昭和四十二年の第四十二回埼玉国体の二大競技会の役員として、大会運営に貢献出来たことは、一生涯忘れることはない。しかし私が現在あるのは、川越高校時代の陸上競技部での生活である。その当時の陸上競技にかける夢と意欲・熱意は、今では考えられない程深いものがあつた。特に昭和二十七年九月二十一日、二十二日の両日、県営大宮陸上競技場で開催された県民体育大会兼第七回国民体育大会県予選会において、高校男子百米で十一秒五（本年度県最高記録）で優勝、二日目の二百米では二十三秒九、最終レースの八百米リレー（第一走者）で優勝し、三冠王に輝くことができた。

陸上競技の道に入ったきっかけは、川越市立富士見中学校時代の恩師、飯野五郎先生のすすめであり、専門的に始めたのは川越高校陸上部に入部し、恩師松本利雄先生の指導を受けてからである。この黄金時代の活躍は一生涯私の脳裏から去ることはない。まさに「光陰矢のごとし」。陸上の道に入ってから四十数年、平成四年九月には、待って、待って、待ち望んだ、川越市運動公園陸上競技場が完成し、現在川越市陸上競技協会会長として、後進の指導にあたっている。

詩 陸上競技

うれしいときやる、陸上競技

悲しいときやる、陸上競技

うれしいときも、悲しいときも、

陸上競技をやると、心が落ちついてくる。

なぜかわからない。私はわからないものを

心のささえとしているのだろう。

わからなくとも、

心のささえとなるものがあることは、

私にとって、一番幸福だと思う……

私は、陸上競技を生きがいとし、数多くの貴重な体験から、感動と感激を得ることができた。感動こそが人生を変え、人生を支え、若さと勇気をもたらした。感動とは挑戦である。

「人は、誰でもその生涯の中で一度位、自分で自分を幸福に思ふ時期を持つようである」。これは明治の小説家、加納作次郎のことばです。平成七年三月三十一日をもって、歩み続けてきた学校教育の仕事に、一応の区切りをつけることになるが、この間、健康で好きな教師の仕事を全うできたことは、多くの出会いの恩師・先輩各位・仲間の皆さんの、ご指導・ご支援の賜と思い、深く感謝とお礼のことばを申し上げます。

私の人生訓

人生は馬拉ソンだ!!

小さな履歴書

鵜飼 三郎

人生五十年の時代から八十年の時代になった現在、国民は皆、中流意識を持つようになり、平和で自由で物質的にも豊かになり、安泰な生活に満足している。しかし、本当に豊かなのだろうかと考えると、どうも違うように思われる。外国へ行って見るとそれはハッキリする。日本の住宅がうさぎ小屋といわれる所以もすぐわかる。道路も狭い、緑も少ない、公園の数、更にその大きさには驚かされる。そして土地の人の陽気さ明るさは、金と物だけでなく、精神的な面も充分満足しているというふうに見える。要するに真の豊かさという面から考えると、我々はまだまだと思う。しかし、私達は奇しくもこの時代に還暦を迎えたわけである。そこで、これからの人生の真の豊かさを求め、納

得のいくものにしていく為に、ここで見直し、再検討する事は、非常に意義のある事と考える。

私は東京千住に生まれ、国民学校四年の時に埼玉へ疎開した。その疎開先、鶴瀬村（現富士見市）は、当時東上線鶴瀬駅を降りると麦藁屋根が三つ四つしか見えない、非常に淋しい農村であった。地元新制中学を終え、川越高校へ。この頃、県立高校は川越にしかなかったように思う。終戦からこの頃は、食糧事情が悪く、特に中学時代は満腹に食べてみたいという気持ちを常に持っていた様に思う。私も更に大学へという気持ちでいたが、卒業の年の一月に父が「ガン」と診断され、余命三ヶ月という宣告を受けた。私は妹二人の三人兄妹だったので進学を諦め、卒業と同時に埼玉銀行（現あさひ銀行）へ就職した。爾来、平成三年三月に定年退職迄、志木支店を振り出しに十店舗を転勤勤務した。その中で強く印象に残っているのは、いわゆる東京下町の浅草に近い鳥越支店である。秋葉原の電気街をはじめ、横山町の衣料、蔵前の玩具等、問屋街を擁し、当時好景気もあって、相当の売り上げがあり、当店在勤六年の殆んどを得意先係であった私も、ボーナス期等は日曜出勤もいとわず、よく働いたものである。時間外には仲間と安い居酒屋専門によく飲んだ。麻雀もやった。とにかく毎日が充実していた。その頃は定年五十七歳迄、毎年給料は上がっていく。定年迄に子供を学校を出し就職させればよいという人生設計を気軽に考えていた。しかし景気の浮沈と共に時代も移り変わり、様子がだいぶ変わって来た。

企業は高成長期に大量採用した人間をかかえ、このまま毎年ベアをしていくと人件費で企業がまいてしまう。そこで十年位前から各企業は、関連企業や一般企業に社員を出向させるようになった。銀行も同じで、四十歳を超えるところそ出向というような事になってきた。今迄考えていた人生設計では駄目になってきた訳である。しかも、バブルがはじけ更に厳しい状況となっている。実は私も五十二歳の時に、上尾市にある上尾興業（総合建設業）へ出

向を命ぜられ、以来八年目に入ったが、銀行を退職した後も引き続き社員として勤務している。全く違った仕事で興行きも深く、新しい気持ちで頑張っている。

私達、人生の中の還暦は、今後老年に向けての移行期と思う。私はむずかしく考えるのではなく、過去とこれからを見つめて人生をリフレッシュする努力をしたいと考えている。また、マンネリでなく、毎日が新しい気持ちで健康に生活していく為には、仕事を持っていなければならないと思う。その上で家族を大事にし、地域、特に近所づき合いは積極的にする。そして趣味を出来るだけ持ち、友達も多く持つ。これらが自分の生きがいとなり、納得出来るものになると思う。勿論いろいろな生き方がある。いろいろある中の選択は、それぞれの人が自分の納得する生きがいを見つければ良い。これが大切な事と思う。以上、うまくまとまらないが、これからは何事も楽しくを基本に、一日一日を人生の終点へ向けて歩んでいきたいと思っている。

四十二年が過ぎて

榎 本 茂

川越高校第五回生の皆さん、長い間ご無沙汰しております。

小生は、自己の実力・経済上の理由等により、進学の道を諦め、就職する方向を選択いたしました。当時は、就職状況が非常に厳しい時期でありましたが、好きなオートバイに乗れる、自宅から通勤出来る、ということでもかなりの

紆余曲折はありましたが、念願の本田技研工業㈱へ入社することが出来ました。当時のホンダは、大学生からの就職
人気が無く大卒者は極く少数で、殆んどが高卒者であったと記憶しております。小生の配属先は、工場でオートバイ
を造る部署で、専門的知識も当然のことながら経験も無い小生としては、かなりのとまどいがありました。似た様
な境遇の仲間達とがむしゃらに頑張り、どうにか自称一人前のオートバイ造りの技術屋になれたのではないかと思っ
ております。また、小生が入社後、川越高校第五回生が一人また一人と入社して参りまして、最終的には十名になり
ました（飯能市出身の青木さんは、若くして故人となりました）。皆さん、それぞれの分野で健闘されております。
入社間もない頃は、年に一度位の頻度で懇親会を催しておりましたが、その後、それぞれの勤務地等の関係で途絶え
ております。小生も約十年前からホンダの関係会社（資本提携会社）の㈱エフテック（埼玉県菖蒲町）に勤務のため
埼玉県に戻って参りました。

以上、簡単に経過を述べましたが、その間好きなオートバイを心行くまで楽しみ、青春のひと時を横溢いたしました。
特に入社後三年目で、十六万二千円のドリム号のオーナーになった時の気持ちは、今でも忘れることはありません。
せん。

主な勤務地としては、埼玉県の他に、三重県に二十五年程在住しておりましたが、海・山を含めた豊かな自然環境、
人情味溢れる地域住民とのふれあい等、小生の第二の故郷であります。約八年前、再び埼玉県に赴任して参りました
が、都会住まいのわびしさを強烈に感じました。また、特に自然環境に渗透出来たこととしては、一時期、磯釣りに
熱中したことあります。丸びを帯びた真っ青な水平線、磯の香りは弁当のおにぎりの味を一段と引き立ててくれた
ことを記憶しております。海老ならぬさざえの餌で釣った幻の魚『石鯛』の魚拓は、小生自慢の宝物であります。

さて、今度の原稿募集の標題にもあります様に、今年は還暦。サラリーマンにとっては宿命の定年も間近にせまつて来ましたが、これからは更に深く自然とのふれあいをもつための小旅行を中心に、人生の余暇を充分に、そして有意義に過ごして行きたいと思っております。

最後に、皆々様方の益々のご健勝、ご繁栄を祈念いたします。

土と共に四十年

川 野 達 也

今年の五月は好天に恵まれ、早や田植えが終わり、ビール麦の刈り取りを始めた。

畔道に腰をおろし、妻の入れたお茶をすすりながら、四十年を顧みてみると、山雉の雄が、今刈り終えた麦畑を悠然と歩いている。この辺は、川越市の北に位置し、すぐ北側は坂戸市、西側は鶴ヶ島市になる。毎年この田んぼに来る鴨のつがいが、今年も悠々と水面を泳いでいる姿は、のどかなものである。我家は、父が教員だったので、卒業と同時に家業の農業に就いた。当時の農業は、すべて人手によるもので、大変労力を必要とした。時代と共に機械も徐々に普及し、労力面では大変楽になった。

二十代では酪農を取り入れ、三十・四十代には養蚕を主体とした。畑が多いためである。しかし、農業だけで生計をたてることは不可能なので、幸い市街化地域にある土地を駐車場とし、今は、米・麦に変えて機械作業で二町歩余

りを耕作している。

家の前には家庭菜園を作り、四季の野菜が食卓を潤す。周囲には果樹を植えて、収穫時には子や孫や親戚や友人も集う。これがまた、嬉しいひと時でもある。現在、環境破壊が問題になっているけれど、我が家の後方にも圏央道が予定されている。年々、農業従事者の高齢化が進み、後継者もいなくなることを考えると、土地は荒れるであろうことを憂う。

四十年農業を通して何が良かったか自問自答する時、やっぱり土があり、有機栽培で低農薬の新鮮な食物を採り、自然にとけ合って生きて来られたことであろうか。幸い健康にも恵まれ、多忙な日々の中にも、作物の成長と収穫を楽しむに過ごせたことは幸せなことである。

友から鮮魚が届いた。今年もうまい米が届けられると良いと思いながら、今日もコンバインをうならせ、麦を刈る。これからも健康に感謝しつつ、生涯現役で頑張る所存である。

退職を目前にして今感じていること

栗 原 正 志

昭和二十八年三月、卒業を目前に警視庁巡査の採用試験に応募、合格することができた。大部分の同級生とは異な

って就職の道を選んだ。朝鮮動乱後の不景気風の吹く中、証券会社等、数社受験したが、全部落とされてしまいやむなく警視庁に落ち着いた次第であった。合格はしたもののなかなか呼び出しがからず、やっと暮れになって、一月警察学校入校の知らせが届いた。二十九年一月十三日巡査拜命、警察学校に入校した。半年の新任教養を終わって第一線に出て警察官人生を歩み始めた。以来四十一年間、間もなく退職の日を迎えようとしている今日此頃、振り返ってみると長いようでもあり、また、短いようでもあったというのが実感である。この間、多くの人と出会い、さまざまな事件事故に遭遇し、貴重な体験をし、多くのことを学ばせていただいた。勤務した所属も十数箇所と東京都内全域に及び、上野警察署での三年六ヶ月（課長代理）、築地警察署での二年六ヶ月（課長）等々、銀座、上野という東京のど真ん中での勤務も体験し、田舎生まれで田舎育ちの私にとっては、一世一代の暗舞台を経験したのではないかと自己満足している次第です。この間、二回、公務上での大怪我で入院生活を余儀なくさせられたが、その他にはほとんど事故らしい事故にもあわずここまで来られたのも、上司、先輩、同僚、その他多くの人々のお陰と感謝している次第です。勿論高校三年まで私を育てくれた郷里での土台があったればこそと思っております。国語の担任の佐藤先生にこっぴどく怒られたことなど、高校の時のことなど今でも時折懐かしく思い出されます。一戸建ての居を構えることができたのも地道に毎日の仕事に取り組んで来たお陰であると思っております。

高校同窓生の皆様とは、上京以来一回の同窓会を除いてほとんど交流が無いわけですが、有志の方が種々協議して幹事を決められ、記念誌の発刊を進められておられることについて、心から敬意と感謝を表する次第です。

末筆ではありますが、同窓、幹事の皆様、どうか今後とも私達川越高校同窓生相互の親睦と交流等にご尽力をお願い申し上げますとともに、皆様のご健勝を心から祈念いたしております。

張り切っていた頃

佐藤 進

私は、榎本茂さん（私の同窓生）の紹介で、昭和二十八年に本田技研工業へ入社しました。社長は本田宗一郎といひ、私が生まれた年には、既に自動車用エンジンのピストンリングを研究開発しており、戦時中には航空機用のプロペラ切削機を完成させたりで、数多くの特許をもった優秀な技術屋でした。趣味も大きく、若い頃は全日本自動車スピードラリー大会に出場し優勝する等、大変レース好きだったようです。社風は「企業は人なり」といって、従業員を公平に大事にしながらも「能ある鷹は爪を出せ」とばかりに一人ひとりの才能に期待していることを明確に打ち出しておりました。

私が最初に担当したのは、オートバイ用エンジン製造のライン作業でした。体は疲れるが、内容理解には全く問題なく、むしろ工程が進む都度、完成エンジンになっていく姿を見ていくのは楽しいものでした。しかし、一步深く技術を理解しようとするとか、基礎知識の無さを惨めに思うことも多くありました。

入社二年目の頃、オートバイ耐久レースに出場を目指した「ホンダスピードクラブ」が設立され、ライダーの社内募集がありました。私は若さと度胸で応募しました。……結果は一発で合格しました。実は私は毎日オートバイに乗って完成車を検査する担当に変わっていたので、他の人よりオートバイには慣れていたからです。以来、私はスピードクラブのメンバーとして、毎日定時後、プロのレーサーからライディングテクニックを教わり、とにかく悪路であろ

うがカーブであろうが、一秒でも速く走ることを練習しました。そして夏の間は、レース場が建設される予定地の浅間高原で合宿しました。そんな生活を始めてから数年後の昭和三十二年に、「第二回全日本浅間火山レース」が開催され、私は体が大きかったので監督の指示により、重量ロスの少ない三五〇ccクラスに出場しました。成績は五位に入賞することが出来ました。私の人生で忘れたいこととなりました。

会社は、国際レースに本格的にのり出しました。私は、ライダーからメカニックに転向しました。それまでのクラブ活動を通して、レース用オートバイの開発、すなわち設計・試作・試験に生で参加でき、会社の最先端技術にも直接触れた体験は、後にオートバイ・自動車の品質管理を担当するうえで貴重な知識となりました。やがて世界的にヒットしたスーパーカー号が誕生しました。開発の構想は従来のバイクイメージを一新したと言われるだけあって、完成車は美しいスタイルに斬新なアイディアが各部に盛り込まれておりました。私も試作車に手を出すことが出来ました。当時の感想は流線美あふれたボディに五〇ccでOHVエンジン、その性能は抜群でビックリしたものでした。一方、量産準備のため、三重県鈴鹿市に工場用地が購入されており、昭和三十五年四月には鈴鹿製作所が設立されました。私はそれまで埼玉製作所におりましたが、鈴鹿転勤の第一陣となりました。新幹線は未だ無い時代、私的には苦勞しましたが、夢いっぱい、ドリーム号の後席に家内を乗せて、東海道五十三次ヤジキタよろしく、走って行ったことが思い出されます。

九州―大牟田のこと

須ヶ間 弘

川越にまた住むようになって、もう10年になる。その前の13年は東京世田谷の社宅住まい、更にその前の14年を九州の大牟田で過ごした。学校を出て入社した会社の主力工場が大牟田にあり同期入社の技術系列新入社員は全員そこに配属になり、独身寮での青春時代を皆で楽しんだ思い出の地である。

殆どの皆さんには「大牟田」は馴染の無い地名と思われるが「月が出た／＼」で始まる炭坑節に出てくる三池炭坑のある町である。私が勤務している会社はここから出て来る石炭を使って色々な化学製品、例えば染料や農薬、肥料等を作っていたが、入社当時は石炭を掘っていた鉱山会社が羽振りが良く町も石炭によってもっている感じであった。この大牟田（三池）の石炭は歴史が古く遠く足利義政の頃に発見され、江戸の中期には柳川藩によって開坑経営されたと言われている。古くは地表に露頭しているものを採掘していたが明治に及んで地下深く掘り進み、現在では有明海の海底迄も採掘が進んでいる。

明治20年代にこの炭坑は政府から三井に払い下げられ、三井鉱山として経営され今日に至っている。

城下町川越に生まれ育った者にとっては、当時石炭産業華やかなこの町はガサツではあったが、とても活気に溢れた異質の町であった。所謂企業城下町で新入社員であっても飲み屋、タクシー等自由にツケが効いた。九州各地には観光地名所等も多く、北に電車で一時間も乗れば結構都会の博多（福岡）があり南に向かえば熊本阿蘇、更に南に下

れば鹿児島桜島、西には雲仙長崎と言った具合である。

昭和47年に東京本社に転勤になってからも仕事で年に数回出張している。昔は夜行列車での往復であったが今は飛行機である。場合によっては日帰りも出来る。便利になったが味気無い気もする。

石炭にオンブして発展して来た日本の産業も昭和30年代からは石油がエネルギーの中心となり、石炭産業はすっかり没落してしまった。国内では最も優良な炭坑であった三池炭坑もやがて他の炭坑と同様に閉山の運命を辿るのであるうか。淋しい限りである。因みに私の妻はこの地の出身であり、既に我家を巣立って行った二人の子供もそこで生まれた。思い出の地である。

わが再成の記

高橋和昌

私は堀兼（狭山市）で生まれ、堀兼で育ちました。堀兼は万葉の昔から鎌倉街道筋にあり、武蔵野の面影を今に残す人情味豊かな土地である。小学校時代は空襲警報のサイレン、防空頭巾が思い出されます。小学校五年で終戦を迎え、中学校は受験なしの全員入学でした。中学二年生の一学期に川越市立第一中学校へ転校致しました。良き師と良き友に恵まれた私の少年時代のなつかしい思い出の一コマです。特に赤間川、九十川の水遊びは今でも忘れることが出来ません。当時、川越一中は現在の川越一小の所にあり、仲の良い友達と一緒に目と鼻の先の川越高校に入学出来

た事は最高の喜びでした。川越高校の思い出は、先生に「おまえ達は六三型電車で、誠に出来が悪い」と叱られた事を思い出します。旧制の中学校の先輩の方々と、余りにも力の差があったのではないかと思います。

高校三年の一学期、突然病魔に襲われ、一学期は欠席がちになり、夏休みに東大病院にて弱年性高血圧をとまなう慢性腎硬化症と診断され、長期安静加療を余儀なくされました。

以来、十年間闘病生活がはじまりました。幸い親戚関係にありました比留間病院（日高市）の御指導をいただき一進一退で入院退院を繰り返す私にとっては筆舌につくしがたい暗黒の時代でした。しかし日高の緑と清流の自然の美しさは私にとってなによりの慰めとなりました。二十歳代後半になり徐々に快方に向かい、三十歳前後になりリハビリの一環として家業の狭山茶の製造の手伝いをして体を社会復帰のための試運転を始めました。どうやら生きられるという自信もつき、昭和四十三年十一月川越狭山工業団地、西武新宿線新狭山駅前通りに、ささやかなお店を開店致しました。駅前通りとはいえ、工業団地のため人口も少なく最初は大変悪戦苦闘致しました。お客様のニーズに応え、タバコ、雑貨、化粧品、履物等を販売しました。資金量も少なく、売上金を一週間貯めては現金をもって女房と交代で、横山町、馬喰町界隈に仕入れに出かけました。大変苦労しました。しかし今はなつかしい思い出となりました。商売もその後順調となり、平成三年四月には、六階建ての本社社屋を竣工致しました。そして一階では女房が従業員と一緒に化粧品、たばこの専門店を営業しております。ここで家族構成にふれますが、長男長女に恵まれ、一家四人です。長男は家業をきらい、本人の希望通り報道関係に進み記者生活四年目を迎え、目下修業中です。長女は来春（平成七年三月）、社会人になる予定です。何年か社会修行を積んで家業に入ってくれる事を期待しております。

私は、あまり過去に良い思い出がないので、振り返るのは苦手ですが、人生はドラマである。一部は苦難の時代で

ある。二部は再成の時代、三部は環曆を迎え末広がりの時代である。一部が三十年で誠に句切りが良い。私は、人生の脚本家であり演出家である。私には定年も終わりもない。生涯現役であり青春である。

現在、商売の傍ら地域の青少年健全育成運動、公民館活動等にも積極的に取り組んでおります。また、家業の商売関係の県連、関東ブロック、全国連の活動にも参加しております。これからの三十年間、終わり良ければすべて良し、積善の家に余計ありを家訓として完全燃焼したい。

終わりにりましたが、御指導、ご声援下さいました恩師、先輩、同級生の皆様に心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

雑 感

中 谷 英 夫

平成六年九月三十日定年退職まで残すところ二十日余りになってきた。昭和二十八年四月二十日に現在の職場・理化学研究所に職を得てから今日まで実に四十一年六ヶ月、よくも一箇所にへばり付いて来たものだと思う。

入所（研究所なので）後、三年ほど経ってから放射線測定器のためのエレクトロニクス回路の設計、製作という業務に従事することになり、やがて放射線測定器のみならず、理研の多分野にわたる研究開発のために必要となる実験用の特殊な機器、装置のコントロール回路や電源などの開発を手掛けることになった。そして三十年近くこの仕事を

続けたわけだが、この間、最初は真空管時代に始まり、やがてトランジスタ、IC、マイクロコンピュータと目まぐるしく進歩してきた電子デバイスに振り回され、それでも何とか一応は使いこなしてきた。ところが昭和六十一年四月に、それまでの技術の現場からマネージメントのセクションに回され、電気、機械技術者集団のお世話とか予算の管理などを担当することになった。ここでも折から普及してきたパソコンを使って、業務のOA化をかなり夢中になってやってきたものである。そして、ご他聞に漏れず、満六十歳を過ぎた本年九月三十日を以てめでたく（？）定年退職ということになる。

就職後、四年間遊んで、同期の友人がみんな大学を卒業したのと入れ代わりに、早稲田大学第二理工学部に運よく入り、ろくに勉強もしなかったのに、四年で卒業免状をもらった。そして、三十歳にして結婚し、男子二人に恵まれた。また、昭和五十年には、宇宙線連続観測の技術者として、南米ボリビアの標高五二〇〇米の高地で一年半生活するという得難い経験をしたことは幸運であった。

先日、機会あって富士登山の一行に加わることができた。一行の登山の名目は他にあったが、自分としてはひそかに還暦記念と位置付けて一生懸命つらい思いをして来た。辛かったが無事登頂を果たして来て、「まだまだ何でもできる。やらなければ」という感慨を新たにした。世間的に言えば、還暦を迎えて「功なり、名遂げた」と言うことになるかもしれない。しかし、自分としては、功も成っておらず、名も遂げてはいない。幸い、これからは管理職という枷も外れ、かなり自由に動くことができると思うし、まだまだ頑張らなければ、人生第一次の卒業免状はもらえない、などと感じている昨今である。

“ホテル讃歌”

長尾 武

ホテルの部屋へ最初に入る瞬間、
なぜか胸のときめきを覚える。
これは私だけののだろうか。
この感じがたまらなく好きだ。
コーディネーターという仕事柄、
ホテルに泊ることが多い。
仕事先が地方にあるお蔭で、
ホテルライフも仕事の中に融和され、
ビジネスを楽しくしている。
還暦を迎えた最近、
三つのホテルに泊り、
年がいもなく、ときめいている。
ベイエリアの新しいホテル。

久慈の山間にたたずむ古いホテル。

北国のシティホテル。

部屋に入ると、まず窓を見る。

四角に切りとられた空間の景色は、
実にさまざまだ。

ベイエリアのホテルは海の蒼。

久慈のホテルは山の緑と川のせせらぎ。

北国のホテルはアカシヤの樹々と光る湖。
その窓を開けると、

風の匂いがそれぞれ違う。

ベイエリアは潮の匂い。

久慈は人にやさしい森林浴の匂い。

北国は爽涼感あふれるライムの匂い。

からだ一杯に吸い込んで、リフレッシュ。

家にいる時よりくつろいでいる。

それは仕事の句読点、

生命の安らぎでもある。

窓辺のどんな景色も匂いも、

何にもまさる清涼剤でもある。

利用者本位でサービスが受けられ、

行動に便利で、調整されたホテルの部屋。

その贅沢さがたまらない。

今日は海へ、明日は山へ。

リッチな気分もちょっぴり味わい、

私にとってホテルは、

最も安上がりな別荘だから。

こしかたと近況

永 峰 敬 一

教員志望でしたので、高校卒業と同時に横浜国立大学法学部に入學しました。ところが、この時に相部屋で下宿生活を送ったのが、同大学経済学部で、これがまた格別の勤勉家で読書好きときていましたから、大きな影響を受けざるを得ませんでした。

彼に貸し与えられた、アダム・スミスの「国富論」を読むに至って、ディスマル・サイエンスと言われていた経済学に強烈な興味を抱き始めました。当初の教員志望は、あっさりと霧散してしまった次第です。結局、一年を棒に振って、横浜市立大学商学部に改めて入学、金融論を専攻して同大学を卒業、埼玉銀行（現あさひ銀行）に人行致しました。

同行には、五十五歳で定年前退職するまでの三十二年間勤務しましたが、この間、調査部（企業調査部門）、融資部、経営相談所（サイギン総合研究所の設立にも参画）等、本部勤務が殆んどを占めました。もともと、フォー・ザ・バンクの精神に欠け、どちらかと言うと、自己満足でもいいから生涯思い出に残る仕事をしたいたいと考えていたので、金融財政事情研究会から「新銀行実務総合講座」の「企業調査」編が上梓（共著）できたときは、これでいつ銀行を退職してもいいと思いました。

退職して間もなく、埼玉銀行は協和銀行と合併、現在はあさひ銀行と名実共に変貌を遂げましたが、私自身の生活パターンも一変致しました。

家族は、私達夫婦、二女（長女は嫁ぎ、長男は社宅暮らし）と年老いた両親の五人で、両親の介護をするかたわら、趣味の園芸に動しんでおります。

還暦を迎えるにあたって、痛切に感じていることは、趣味を大切にして、心身のリフレッシュに心掛け、かつ大様に構えられる生活態度を持ち続けることが何よりも肝要ではないかということです。

老化は、避けて通れないことですが、平常の心掛け、努力次第で相当程度は先送り化が出来るかと確信している今日此頃です。

回 想

西 山 富美雄

懐かしい川高の学窓を巣立ってから、毎日馬車馬のように走り続けて今日に至っているが、振り返ってみると、あれから四十数年過ぎ去っているのかと思うと、今更ながら歲月の流れの早さに驚嘆している昨今である。

夢多き高校生時代、自分の将来に莫然と想いを馳せていたものであったが、今その夢が叶えられたであろうかと考えると、いささか疑問符を打たざるを得ないが（これは謂ゆる社会的立身出世において）、自分なりにこの半世紀を精一杯突き進んで来たことに感謝し、満足できるのではないかと総括している。そもそも大学への進路に工学部を選定したのだから、謂ゆる立身出世とは縁遠いものになったのではなからうか？ まあ、それはさておき、私の歩んで来た道を諸兄に紹介する意味で、川高卒業から今日迄の辿った道を回想し記してみたい。

社会人の第一歩は、日立製作所日立工場火力製造部に配属され、ここで三年間我国重電部門の代表製品である水車タービン、発電用ボイラー等の製造工場の中で、私はボイラーの生産技術者としてスタートした。当時漸く原子力発電が東海村に実験用として産ぶ声を上げた時代であり、その原子炉及び発電用ボイラー等の製造部門での三年間は種々貴重な体験をさせてもらった。

昭和三十五年三月、日立が広島県呉市の旧海軍工廠跡にボイラー、原子炉の専門工場（現パブコック日立呉工場）を建設したため、日立工場のボイラー部門がこちらに移り、私も転動した。

我国における三大軍港であった「呉」は、公私両面において、私の青春時代の大半を過ごした場所である。ここで、国産一号の動力用原子炉（J P D R）―東海村の原子力研究所内の電気を発電した―を皮切りに、中国電力敦賀原子力発電所、島根原子力発電所等々、今日迄日立の原子炉は、全て呉工場で製造されている。呉への転勤は大学卒業後三年目の若輩であったが、この記録品であるJ P D Rの機械加工の責任者として製作担当させてもらい、苦闘の末漸くこれを完成させることができた。

話は後になるが、このJ P D Rは、後年平成三年中国電力柳井火力発電所建設時、一般市民に発電所見学会が催された時、発電設備の歴史パネルの一枚に掲載されており、たまたま家内と二人、見学会に訪れた時、家内に得々と製作当時の思い出話をしたものであったが、約三十年振りに息子に再会した時のような懐かしさであった。その他ではポリエチレンの製造設備である。国産初の昭和電工大分工場納入の高圧ポリエチレン装置等、新製品、記録品等の製作を担当させてもらった。呉での生活は、四十歳迄続き、希望に満ちた楽しい青年時代を謳歌でき、充実した歳月を過ごした。

昭和五十年オイルショックの年、呉工場の協力会社である柳井市近郷の㈱アロイに転勤となり、今日迄約二十年間奉職中である。この会社は総合ステンレス工場であり、特に本年、ステンレスが建築用の構造用鋼として建設省より認可され、全国で当社を含め三社が第一期目の施工認定工場として認可される運びであり、その責任者の一人として喜んでゐる。漸く本年十二月停年を迎え、停年後は横浜の兄の会社で第二の人生のスタートを切ることになるが、これからも五十歳代前半の若さをもって頑張ってゆきたいものと願っている。

想い出と近況

町田 嵩

私に対する父親の期待は大きいものがあつた。多分、自分に学歴がなく苦勞をしたので、子供だけは上級学校へやろうと思つていたのであろう。「お前は、神田の電気学校へ行き、将来は電気屋になるのだ」と言つて、私が小学五年生になると、たびたび神田錦町にあつた科学教材社に連れて行き、いろいろな科学教材のキットを買い与えた。モーター、電鈴、鉱石ラジオなどは完成させたが、真空管式ラジオはピーという雑音が出るだけで、放送を受信出来なかつた。

私が中学生になると、薬品の販売もしていた父は、私が電気屋になるのが無理だと思つたのか、今度は「薬剤師がいい」と言い出した。そして、参考書や辞典などを次々に買つてきた。その中に、全国高等学校入試問題集があり、マル・バツ方式で面白かったので、私は夢中になつて解いた。その頃、私の中学校でも高校入試の模試があつたが、例の問題集をやつたお陰で、成績は上位だった。しかし、私が中三の夏に、父は、母、私、小五の弟、小一の妹を残し、急性肝炎で急逝した。

翌春、私は志望していた川高に合格した。川高では、事務長で私の近所の関根正司先生のお陰で、日本育英会から奨学金を借りることができた。また、中学時代の親友U君から、「町田君、俺が働いて金を出してやるから大学へいけよ」と言われ、嬉しかったが、親友や家族のことを顧みず自分だけ大学へ進学するわけにはいかないと思ひ辞退し

た。しかし、弟と妹を一人前にしたら、大学の薬学部を出て薬剤師になろうと思い、高校三年間勉強した。

一方、部活動では柔道部と弁論部に籍をおいた。卒業写真撮影の日に、ディーゼル機器の入社試験を受けた。写真に写らなくて今でも残念に思っている。

入社試験に合格したので、早速、担任の平先生に報告にいったら、「お目出度う。これから、自己の向上に努めなさい」と励ましてくださった。ディーゼル機器（現社名ゼクセル）では設計課に配属され、東北大卒の課長と東大卒の係長のもとで、機械設計など機械工学を学びながら仕事ができ、充実したものであったが、薬剤師への夢はすてきれず、大学入試の勉強も続けた。その頃、奥秩父縦走、八ヶ岳縦走など登山をしたり、柔道の稽古も続け名誉三段をもらった。

二十歳の終わりに私は結婚し、一男一女をもうけた。やがて、弟は独立し、タクシー会社と不動産業を営むようになり、妹も公務員に嫁いだ。私のほうはいつの間にか大学進学のことよりも趣味のほうにウェイトを置くようになっていた。ところが、私が丁度五十歳の時に、放送大学が開校するのを知り入学した。薬学部はなかったので、法学を選び茗荷谷の東京教育大学の跡地の校舎でスクーリングを受け、五年かけて卒業した。その後、停年後に備え、法律関係の国家資格に挑戦を重ねているが、まだ一つも合格していない。

地元の公民館の社交ダンスクラブでは、約三十人の会員が毎週練習しているが、その講師を満二十年つとめている。また、現在、妻と一緒に中仙道六十九次の旧道を江戸から京まで歩くのに挑戦している。ずっと苦労をかけてきた母親からは、還暦を迎える私は、依然として子供扱いを受けている。

長男は公務員で、数年すると三十歳になる。また、教員をしていた長女は、去年アメリカ人と結婚し、コロラドに

住んでいる。この夏休みに私達夫婦は、コロラドを訪問する予定である。

私の還暦迄の略歴

三 沢 義 和

94年Feb、私の父が九十五歳で天に召された。三年前、91年Juneに母が八十五歳で召大したばかりであった。皆様からは長命な両親と羨ましがられたが、父母はいくつになっても失うと悲しいものだ。

最近になり父の遺品の中から三沢家祖先の事が少しずつ分かってきた。或る縁者（内山文代さんといい、千葉大の講師）が調べた三沢家の家系は次の通りだった。

仙台より、五〇〇年位前に山形県南村山郡成沢町に移転居住し、二十代に亘り十三部落約九百戸の庄屋を勤め、父の祖父が庄屋の最後の勤務者だったとの事。縁者には斉藤茂吉もいた（私の祖父の兄嫁の妹が茂吉の母）。私の祖父は牧師であり近衛兵であった。また祖母は勿論クリスチャンであり、高田高女（お茶の水女子大の前身）の英語の教師をしていた。モダンな祖父母だったらしい。他人事のように言うのは、この祖父母は父の小さい時に召大しているので、私達孫は接点がなかったのだ。それやこれやで家系には医者や牧師が多い。

さて私は、東京新宿で昭和八年八月十八日生まれ、第二次世界大戦第一回東京空襲を家の屋上で本を読みながら体験し、激しくなる戦争を避け、母の生地長野県軽井沢の麓に家族疎開（小学四年の頃）、小学六年秋、敗戦と同時に、

父の縁者を頼り、埼玉県鶴ヶ島村に移住した。

私の青春はここから始まった。中学を出て、父の薦めで牧師養成学校（リビングストーン牧師創設）に入るつもりで志願書を出し、本人もその気になっていた。結果は若年の為、再度悩める歳を過ぎてから志願されたと入校出来ず、仕方なしに普通の高校に行く事となった。しかしながら、大半の高校入学テストは既に終わっており、二次募集中の教育大附属坂戸高校に入学させてもらい、一年中途で、中学の一級下の生徒と共に（内藤、横山、滝島、小谷野諸氏）、川高進学の勉強をさせてもらい、川高に入学、何とか卒業出来たのだ。日大工学部を経てセールスエンジニアとして商社に入る。当初、京橋のプリジストンビルの事務所に通っていたが、一年半後、名古屋に転勤、もうその頃には牧師になる事など全く忘れ、俗世にどっぷりつかり、おもしろい生活に浸り切っていた。急伸の三井系商社にも破綻が訪れ、大半三井物産に吸収され急場を凌いだが、その時、私は商社の関係会社名古屋事務所の所長として迎えられた。が、六年後には倒産、初めて人生の苦悩を知らされた。その後すぐに友人の紹介で、フランス総合化学会社ローヌプーランの名古屋事務所所長となった。入社して驚いたが、フランスでは相当なエリートしか入社出来ぬ会社らしい。フランスへの出張は勿論、台湾、マニラ、グアム、シンガポール、香港と公務外遊させてもらい、93年Decを以って六十歳の停年迄二十年間勤務させて頂いた。94年Janから縁あってイタリアの総合化学会社エニケムの名古屋以西を任せ今日に至っている。前述の祖母の英語の血を継いでか、今迄の過去大半、英語が必要な人生であった。にも拘らず、苦手であるとは言うものの、英語でフランス人とジョークを言い笑いこけている時もある。本格的な英語は不向だが、ブロークンならなんとかなるという事かな。フランス人も英語は外国語だし、なまりのある人も多くいる（例えば、デビジョンをデビジオンの如く）。そんな訳で、長たらくなくなって失敬、私の還暦は皆

様より一年前に済ませて居り、長男（二男児の親）・長女（二男児の親）、三人孫のオジイちゃん。女房と二人で今だに頑張っている次第。現在の趣味はゴルフで大半のコンペで、Hcp五〇六で優勝にからみ、皆に五十歳位だと思っ
たといやみを言われている。94年Augで六十一歳。公表、私は当年取って五十一歳（十年取って）。プロスキー
ヤーの三浦氏は五十歳からは年経る毎にマイナスするというが、これで数えると三十九歳になるが、いくらなんでも
これは無理か。でも頑張るぞ、これからも宜敷く。

回想

安井和夫

中学（入間川）、高校時代の記憶は残念ながら殆ど遙か遠くに行ってしまいました。学友の名前と顔も全く一致しないのに係わらず、社会に入ってから出来事は誠に生々しく蘇ります。我々の時代は国を挙げてのまさに「鼠競争」の時代だったのでしょう。

昭和三十二年社会人一年生、以後数年間、外資系情報機器会社にてシゴキにシゴカれました。当時、当該会社の日本法人が世界の第七区分（SEVENTH SECTION）に属したという、誠に地球規模の大会社も時代の潮流には逆らえず、つい最近米国電信電話会社に吸収され、おそらく一世紀近く世界的に鳴り響いた会社名もあったという間もなく、全てのロゴ・看板から消え去りました。今から振り返りますと、僅か五、六年間の在籍に過ぎなかったの

ですが、とにかく色々な事を教わり、様々な人脈も（私のベターハーフも）この時期に得る事が出来ました。しかしながらその後は苦勞の連続です。やりたい事は殆ど手がけました。結果は殆どが裏目でしたが、昭和五十四年に創立したコンピュータ・ソフト会社は、幸運にも時流に乗る事が出来ました。四年前に念願の米国生活を実現するため第一線を退き、ロスアンジュルス・ニューポートビーチに年半分住んでおります。この実験生活（？）では実に多くの事を教えられました。外から見た日本国（物理的な部分も含め）、日本人のアイデンティティ、メンタリティ、欧米人のそれら、勿論素晴らしい友人達も多数得る事が出来ました。特に我々の年代での共通の課題「リタイアメント」については、考え方も対処の仕方も衝撃的に異なります。さあ、どちらの方式をとるか、ついのすみかを何処にするかが現在の私に与えられた最重要課題なのです。

来し方行く末

山田英雄

高校時代、多くの友人を迎えた川越の家には、今、長兄夫婦とその末娘が住んでいる。

二十四歳まで私もそこに居たのだが、大阪への転勤、結婚により、以後、箕面―高槻―川越―草加―川崎市宮前区―横浜市緑区（六年十一月から青葉区）と居を移した。この間、ニューヨークにも通算三年滞在した。よく人間は生まれ故郷の方に近付いて行くと言われるが、私の場合、二度目に川越を離れてからは少しずつ、生まれ故郷から遠去か

っているようだ。

結婚が二十五歳と比較的早かったため、二人の息子はもう結婚、独立した。孫もすでに二人となり、親としての責任は一応果たしたのではないかと考えている。

丁度この原稿の締切り日となった平成六年五月、国際投信委託（株）の役員を退任することが決まった。退任後も参与という肩書きで会社籍（席ではなく）を置くが、出社の義務はないため、野村證券―野村総合研究所―国際投資顧問―国際投信委託という職歴も事実上終止符を打ったことになる。

さて、自由を取り戻したこれからの生活だが、今さら出来ないゴルフに挑戦する気もなく、「時間を持てる人間の悩み」におそわれそうである。

大学へ通っていたころ、日本の湖を全部見ることが目標に、アルバイト料や奨学金の多くを旅行につきこんだ。これからはJ Rを北の端から南の端まで全部乗ること、OECD加盟国の首都のすべてを訪れること、の二つを現実させたいが（「くだらない」との批判は覚悟のうえ）、カネが続くか身体が続くか、少なくとも時間だけは与えられた。未筆ながら、同窓同期の皆様のご健康を心からお祈りしています。

四、近 況

近況報告

上 田 宏

ここにきて、身辺が、急に慌ただしくなってきた。実は、新しく住まいを考えているからです。先週、工務店の専務が、設計事務所の人を連れてきた。建築場所は決まっている。今、古家が建っている。昭和四十六年に千葉県住宅供給公社が募集した団地に当たり、当初初めての我が家という事で、遠距離通勤にもめげず、ささやかな幸わせを味わったものです。千葉市のこてはし団地です。僅か三年半で、転勤のためまた社宅生活に逆戻りです。当時植えた木々は大きくなり、庭らしくなっている。これに比べ何と木造建物の見すばらしさよ。廻りを見渡せば、ほとんどの家が建て替え、立派な団地に変わっている。我が家みたいな当時の建物はもうほとんど消えていて、遅れた家で建て替えがある程度、やっと我が家も参加できる。当時そのうちにもっと都心に近い処に住めると思っていたが、今となっては夢である。

現在、社宅住まいです。都内の目黒区駒場という処の三階建のマンションの一戸です。転々としてきたが、もう十一年もここに住みついている。近くには東京大学、日本民芸館、近代文学博物館等、また東急百貨店の本店へも歩いて十五分とかからない。会社にも近く恵まれた環境にある。いまごろ何で家を建てるかと云えば、来年三月で永年勤

めている損害保険会社を定年になるからです。五十四歳前後で出向・転勤になる人が多い中、昨今の経済状況では中高年層は大変だ。ともかくも大学を卒業して三十七年間という歳月、長かったのか短かったのか。

家を建てる事で悩んでいる事がある。間取りをどうするか。現在我が家は、夫婦と社会人の男二人で一人同居、一人別居の状態です。二人ともまだ相手がいないらしい。二世帯住宅との考えもあるが、何せ状況がどう進展するか、かいかも見当もつかない。従って目下、中ぶらりんのまま、取りあえず作ります。来年の今頃はどんな生活になっているやら、楽しみでもあり不安でもあります。

外国の文化を理解しよう

内田 光 一

時の流れは速いもので、社会に出て三十七年間、石油関連会社（帝国石油・アラビア石油・日本輸出入石油）ばかり一筋に勤務し六十歳を迎えることになり四月末退社する予定です。その間、間断なく中東に赴任したり長短の出張をくりかえし二十七歳から五十四歳まで過ごしてまいりました。帰国して日本に落ち着いたのは高度成長が終局を迎える時期でありましたが東京の様子が一変しているのに驚かされました。自然条件の厳しい辺境の地での長期の生活で体力を消耗し現在不調が続いております。

勤務中種々の外国人、アラブ人・欧米との付き合いで彼等が日本に対する認識は徐々に高くなっているのを感じて

いますが、これも一部知識人、政府関係に限られているのが現実です。しかし我々日本人も彼等の文化、発想を理解しその存立、存在理由を学ぶべきだとつくづく感じております。

六十歳をむかえて

川口 泰

早いものでまもなく六十歳になろうとしています。今になって思えばあっという間に過ぎたことです。同級生の皆さんも同じ思いではないでしょうか。これからの人生、忙しさに紛れてやり残した事やまたやってみたいことなど沢山あります。

まず高校時代からの山登り、もっとも年ですからのんびりした山登りですが。それから今でも続けているアマチュア無線、またのんびりした旅もしたいですね。でもまだまだ働かねばなりませんね。時間との競争になりそうで少しむなしくなります。まあのんびりやりましょう。こんな塩梅ですが同好の氏がおられましたらお便りください。

近況・雑感

久保田 久

還暦、千支が一巡して同じ千支六〇年の歳月が過ぎた。そして小生にとっては定年と云う節目である。学業を終え社会に出てそれなりの存在感を持ち今日まで皆様の暖かいご支援により大過なくと、自分では一仕事を終えた正に光陰矢の如しの感であるが、さて今後の生活設計と考へると非常に心もとない。在職中にはそれなりの定年後の考えもあれやこれやと研修も受け何とか出来そうな気持ちでいたものの現実となった今その才たるや希薄で何にも手につかず意気消沈している次第。今後の生活は趣味趣向を持つことが大切と教えられまさしくそう思うのであるが、いざ実行に移すと三日坊主のはかなさその計画は頓挫する次第。その頓挫の理由を何んだかんだと理屈をつけて正当化しようとしている。下手な横好きのゴルフもプレーをするたびに人に笑われ一念発起して練習場へと三、四日も続くと頓挫となる次第でいささかあきれかえっている日々である。とにもかくにも先は長い牛歩の如くまた亀の如く一步一歩土についた生活をして行こうと思う。

話は変わりますが、先日の関西大震災を見て五〇年前の戦後の生活の体験等を重ね合わせて思う時、日々にげなく送ってきた日常生活が実は非常にもろく壊れやすいものだ、そしてあの生々しい映像は豊かさや繁栄を当り前に考えてきた時代に物質的なもののむなしさやはかなさに気付きにくく、そして見えない大切なこと、共に働く喜び、互いに助け合う喜び、そして感謝の心等忘れていたのではなからうか、小生にはそう思えてならない。災害で亡くなら

れた方々のご冥福と一日も早い復興を祈らずにはいられない。

アジア三昧の日々

窪田光純

気がついてみると還暦を迎えていた。

時は経つのは早いものである。

川高を昭和28年に卒業以来、いろいろ回り道の人生だった。それでも有り難いことに現在は《アジア三昧》の毎日を送っている。健康でさえ居れば、停年も無さそうだから、もうしばらくは今の仕事を気促にやっていられそうである。

私のアジアとの関りは一九七二年から始まった。だからざっと数えて、今年で23年になる。アジアとの関りは韓国からだった。当時の韓国は、馬山に輸出自由地域（フリーゾーン）を造成し、外国企業の誘致に奔走していた。そんな初期の国づくりの時代だった。一人当たりのGNPが二四〇ドル程度の国だった。

その後の韓国は、年8%台の成長を続け、あれよあれよという間に、先進国の仲間入りをする所まで到達してしまった。来年（96年）中には、先進国サロンといわれるOECDへの加盟も実現することになるだろう。

韓国からスタートした私のアジアとの関りは、その後、台湾・中国・タイ・北朝鮮・ベトナム・ミャンマー、そし

て中央アジアの国々（ウズベキスタンやカザフスタンなど）などであった。現在は、ベトナムブームもあって、ベトナムに関する調査などの仕事が多い。

ベトナムの魅力は、ドイモイという改革をやり終え、現在も果敢にこのドイモイを推進していることである。ドイモイ（Đổi Mới）というベトナム語は、刷新という意味である。この刷新政策は、農民が蜂起した国民運動がその発端だった。これがドイモイの強さの源泉である。

ドイモイは、体制の刷新・産業の刷新・経済の刷新・国際化の刷新という四つの刷新のことを指すのだが、このドイモイを支えているのは、農業改革をやり終えたベトナム国民である。農業改革は、国民に働く尊さを教え、働く意欲を喚起し、平等という名の意識改革まで行なった。

ベトナムには、石油をはじめ多くの天然資源がある。その上、働く尊さに目覚めた働きものの人的資源も豊富である。

アメリカのエンバーゴ（経済封鎖）が解除されたこともあって、今後ベトナムへの関心は一層高くなることだろう。いつまで《アジア三昧》の仕事が続けられるのか定かではないが、健康に留意して一日でも長くこの仕事をやっていたいと考えている。仕事上だから、アジアの国々へは出掛けなければならないのだが、最近は温度差を何よりも厳しい敵と感ずるようになってしまった。例えば、ホーチミン市から平壤へ真直ぐに行くと、冬期には40度も温度差がある。それ故、あまり出掛けられないようにしている。還暦を過ぎたので、出掛けることよりも《原稿三昧》の毎日したいと考えている。有難度いと感謝ひと入の昨今である。

夫婦仲良く旅三昧

島崎惣一

「還暦に夫婦そろって初大師」初めて一句つくった。子供は皆独立し、妻と二人仲良く暮しているこの頃である。2月正月には長瀨へ一泊した。丁度雪が降って「初雪に釣びとみたり岩畳」。妻と出歩いたのは、新婚旅行以来である。こんなに良いものなら、若い内からドンドン一緒に旅行すべきだったと後悔しています。

最近外出する時に、持ち物が段々増えてきた。タバコ・ライターは若い内から、メガネは40代より、50代になって、持葉が加わり、最近、食事の時に装着するもの迄。いそがしいことである。気持ちは若いんだけど、こうした文を書いていると、年齢を感じますね。

今、細田忠さんの家で書いているんですが、時々関係のない話をされるので全く進みません。先祖の話とか、日露戦争のこと、終戦当時の話等、勉強にはなるんだけど話が一方通行でね。忠さんにして老化は進んでいるようである。ゴルフは教えてくれるし、中おちはいただけるし、奥様はうまいお茶をふるまってくれるし、近くに住んでいて幸せだなー。

ゴルフと言えば池畑が良くガンバツて、同窓ゴルフ会も10数年つづいている。始めて間もなく、一人毎回五百円づつ抛出して、還暦に出場できた方が総取りしようという声があったが途中で止めました。誰もそれ迄にヘタバリそうもないからです。これでは喜寿から米寿迄みんな達者なんだろうね。仄聞する処、関口（齒科）迄女子が使うよう

な易しいクラブを使っているとか。かつてのシングルも寄る年波には勝てないのかなーと同情を禁じ得ない。

扱、私は6年前に、零細企業を甥に任せて、窓際族となった。幾つかの団体に属し、愉快に活動しています。一つ自慢すると創山会という団体で、建設省・川越市に桜堤構想を認められたことである。これは、入間川・荒川30km余を桜並木公園にする計画です。7年間に市・建設省に陳情を繰り返し平成4年正月に市の2大事業となった（もう一つは美術館）。ついに昨年度より着工され、同窓のみなさんが古稀を向かえる頃には、西部から北側、東方面にかけて一大桜堤が実現すると思われる。

この桜を見て老後はオーストラリアあたりで過ごせれば、というのが夢であります。

最後になりましたが、この文集の浅海を始め担当各位に厚くお礼申し上げ、尚、同窓会のとまりまとめをしていただいている石井にも深く感謝させていただきます。

近況報告

須田敏夫

私も既に安サラリーマン生活三十有余年を経て来年停年を向かえようとしているこの頃です。仕事に対する情熱も薄らぎ、専ら健康に不安を持ちながら、停年後の生活不安と暇潰しの方法について思案投首の状態であります。然しながら万人の常で生活不安の方はなるようになると簡単に片付け（嫌な事は考えない!!）、家事及家族活動（小旅行

等）以外の暇潰しには魚釣り（へら鮒）でもして過ごそうかと思っております。もし皆様の中に同好の士の方がおりましたらお声を掛けて下さい。

以上とりとめもなく近況を書きました。真に拙文で申し訳ありません。

不義理のお詫びと近況報告

中 野 良 一

川高第五回生の還暦記念会誌への投稿と案内を頂きまず頭に浮かんだことは、同期諸兄に卒業してから、如何にが無沙汰をしているかということでした。

卒業以来、多数の同期生とお会した記憶は、厄除けの御祓いを兼ねて開催された氷川神社での同窓会といぬい会のゴルフに二、三回出席して旧交を暖めさせていただいた程度で、色々な会合を企画される幹事諸兄にはいつも欠席ばかりで誠に申し訳なくお詫び申し上げる次第です。

そこでこの際、日頃の不義理のお詫びがてら、川高卒業後約四十年の足跡と、近況報告を拙文にとりまとめて、義理を果たしたいと思えます。

私は昭和三十二年、早稲田を卒業し日高市にも工場を持つ日本セメント(株)に就職しました。その動機は非常に単純で、日セメが一部上場のメーカーであり、就職できれば生家から通勤できて便利だろうとの安易な理由からでした。

当時も今と同様に就職難の時代でしたので、就職が早く決まった事に喜びました。しかし、就職先の選択時に目論んだ埼玉工場勤務は、三十数年日セメ勤務中一度もなく、加えて二人いる子供の小学校がそれぞれ四回も転校する程、転動回数が多く家族にはさまざまな試練を受けさせてしまい、いまだに家庭内での唯一の弱みとして残っており、幼稚な就職先選択のシッペ返し我が身に振りかかる結果となりました。日セメでの主な勤務地は前半二十年間が、北海道から九州まで全国各地を東京を軸に振子の如く転動し、後半十年間は海外との商売で日本を出たり入ったりし、最後の数年間は青森での单身生活と住まいを変えること二十数回におよび、平成五年八月、現職に就任し品川の自宅によりやく落ち着いた次第です。

現在の職場・セサミスボートクラブ大船は、日セメが大船駅前に昭和六十一年秋開業した総合スポーツクラブで、約二千五百人の会員を持つ健康関連産業の会社です。社員は五十名中四十名は商売柄若々しい女性インストラクターで、毎日明るく賑やかな環境の中で責任者として品川より通っております。

仕事は当然クラブ経営全般ですが、特に重要なのは鎌倉・大船の名士を多く会員の中にかかえていますので、常日頃のコミュニケーションをスムーズにできるよう、会員諸氏を覚えることに全力をつくしたり、やや古くなった施設の改装資金調達に飛び回る忙しい日を過ごしております。とは言っても私の性格に合った職業ですので、出来るだけエンジョイして仕事を全うしたいと考えております。鎌倉方面にお出掛けの節は是非共お立ち寄りのうえエクササイズを楽しんで下さい。歓迎いたします。

近況報告

繁田幸宏

ここ数年ほど前から、自転車の駅前放置対策としての、市街地レンタルサイクル・通勤通学用の自転車を貸す仕事をしています。ねらいは、駅前に溜る使えないエネルギーを伝えるエネルギーとして、流動化させる。具体的には、自転車を共同利用することにより、駅前に集まる自転車を拡散させることにあります。売るものは、自転車を媒介した「時間」です。日本では最初に事業化しましたが、その後鉄道、自治体の第三セクターも参入してきています。

今年の夏は暑い日が続きますが、これもエネルギーの溜まるためかと思っています。流動化させないと被害が出ます。溜まると云えば経済成長には有用だったフロンガスも現在の十倍ぐらいの量がどこかに溜まっているそうです。これから十数年影響が心配です。経済も「お金」の損得だけから、「エネルギーの損得」に価値のウェイトを少々変える必要があるのではないかと思います。「小さなエネルギーで豊かな楽しみ」がキーワードになれば環境破壊もいくらか好転するかもしれません。芸術・宗教・情報・自然探勝のような心の楽しみの時代がくるのかなと思いつながら、夕焼けの空を見えています。

一九九四・八月

近況

比留間 孝 夫

記念誌発刊の通知があつてから、何を書こうかと気掛かりになっていたのですが、早くも締切日が目前にせまり、とにかくペンを持った次第です。

思えば高校時代の試験日も毎回またたく間にせまり、結局一夜づけで済ませたこと。そして足早に過ぎ去った当時を重ね合わせて思い出します。

還暦の感慨は希薄ですが、時の流れは几帳面でしかも平等で「もう還暦か」いや「まだ還暦だよ」と、とりとめもない思いがします。

昭和三十年にカラーネガフィルムが国内で初めて発売になり、当初からその処理の仕事に従事し現在に至り、もうしばらく続けるつもりです。その後は生まれ育った現住所の日高市で、健康で心おだやかに過ごせればと思っています。

井の中の蛙

細田 忠司

今年も八月がやって来た。それにしても暑い夏だ。けれど八月と云う月には格別の自分の生まれ月が八月と云うだけでなく、小学生の時の敗戦の日の頃から、自分の人生が始まった様に思えるからだ。

その日、重大なラジオ放送が有ると云うので、日課の赤間川での水遊びから「ふんどし」のまま駆け帰った。当時泳ぎの得意な私は、「赤ふん」を締めて意気がっていた。そして家に帰ると、家族が固まる様にして、あの放送を聞いた事は、今でもはっきりと覚えている。そしてその日の暑かったこと、遊んでいた仲間、裸足の足の裏の熱かったこと、筆筒の上の古いラジオの形、どれもはっきりと記憶が有るのだから不思議なものだ。あれからおおよそ五十年、その頃自分が想像もしなかったであろう六十歳と云う年齢に至ってしまった。随分と色々な思い出が有り、長かった様でも有り、あっと云う間の様な気もする。これからの短い人生を思えば、くそ暑い夏も、そうそう粗末にする事も出来ない。

私は「魚屋」の一人息子として生まれた。商売が漸く軌道にのった父は後継ぎとしての私を待ちわびていた様だ。私の大学進学希望にもべなく拒否され、全く相手にされなかった。

父（明治三十一年生）の生前、私に云うには、私の祖父は川島村伊草の生まれである。庭に、大人二人で抱える程の大きな松がある百姓で「松の木」と呼ばれていたそうだ。祖父は若い頃、百姓の傍ら舟を持ち、伊草の越辺川河岸

から、東京へ品物を運び、持ち帰り、当時としては結構暮らし向きは良かったらしい。然し、小金を持っていた博打好きが高じて、終いには田畑を売り減らし、川越に移り住んだとの事だ。父の代になっても親類にも相手にされず、かなり苦労した様だ。けれど私を当時としては少ない幼稚園に、三年も通わせたのだから、この頃には生活も大分良くなっていたのであろう。

いま父母は没し、私の四人の子供達も既に三人は世帯を持った。かみさんとの二人暮らしももう三年になる。『還暦』をむかえる年齢になっても精神は『不惑』の域をとても越えられそうもなく、うろろう暮している毎日である。高校卒業以来、一人の上役にも仕えず、一人の部下も持てず全くのマイペース、『井の中の蛙』で通して来たものだ。従って商売の方も勝手気儘、一向にその気質は変わりそうにもない。仕事に飽きれば店を閉めてゴルフに行ってしまう。かみさんを連れて旅行に出掛けてしまう。そして時折立ち寄ってくれる畏兄の友、島崎惣一君、久保田久君等に、ゴルフの自慢話を聞いて貰う。迷惑だろうが聞くふりをしてくれるだけでも友達は有り難いものだ。

お陰様で何のストレスも無く、今まで一度の病気もせず、全く薬を服んだ覚えが無い。多分旬の旨い魚を食べて、この様な勝手暮しをしている所為なのだろう。せめてあと十年位このペースで行きたいものだと思う。同期生の諸兄も健康な老後を送りたいならば、いい魚をちよくちよく食べる事をお奨めします。但し、安手のスーパールの『パック』された魚ではダメだ。そう云う手抜きをする奥さんと一緒に健康は覚束無い。まあ、私の店とは云わないが、いい魚屋を見付けて努力する事だ。努力して金を惜しまなければ、きっと旨い魚が売って貰え、うまい酒も呑める事だろう。今、寿命が延びている世の中で『還暦』だ。お祝いだと云われてもたいした感慨もない。せめて後十年、『古稀』の時には丈夫で威勢のいい奴だけ集まって、ゴルフでもして、派手なパーティをやりたいものだと思う。そ

の日迄、私もせいぜい頑張って元気でいたいものだ。

平成六年八月

精神が無菌状態の吉崎秀一君に促されて。

安全な食糧生産に携わって

増田晴夫

昭和二十八年三月高校を卒業後、茨城県にきて、四十数年間、いろいろな事に出合い、思えば長くもあり、短くもあったように思う。

私は、高校三年生の時に、鼻を悪くして手術をしたのですが良くなりなくて、空気の悪い所が嫌いになり、空気のきれいな所で生活をしたかと考えるようになりました。こんな事から、大学は農学部を選び、農業関係の仕事に着きました。そのほとんどを茨城県・県内各地の農業改良普及所に勤務いたしました。

私達の育った時代は、食糧の不足時代でした。食糧が満たされれば、平和になると思い、農家の人達と共に増産に努め日本の農業を考え働いて参りました。

この間の日本農業の変化は大変なものでした。社会・経済の変化によって、価値観が大きく変わり、機械、施設の普及等改善目標や改善課題が変わってきました。技術革新、機械化等が進み、労働生産性も向上して参りました。しかし、それ以上に我が国の経済成長は大きく、農業はとり残されております。経済成長が進めば進む程、その差は大

きくなってきております。就農構造は、専業農家と退職者や休日農業者の二極化してきております。専業で農業を続けるためには、その条件づくりが大切で、生産条件整備のための支援体制と消費者の協力体制があって初めて、労働生産性が確保され、専業農家が育っていく条件となります。お金や財産があっても、健康を維持するための安全な食糧の確保・特に新鮮な野菜や果実の確保がだんだんに困難になってきております。

大都市や人口密集地等が、新鮮な野菜等の確保が難しくなってくるものと考えられます。埼玉県の人口は、卒業当時は二百万人位であったものが、現在では、六百五十万人と増加している。住み良い都市づくりには、きれいな川と安全で新鮮な野菜類の確保が重要な時代がくると思います。

平成七年三月には退職しますが、現在は茨城県農業総合センター山間地帯特産指導所に勤務しております。所在地は、県の最北西部の大利町頃藤にあり、茶、蒟蒻、林檎、葡萄、山菜等の試験研究と展示栽培をしております。景色も空気も非常にきれいな良い所で、毎日を楽しく過ごしております。チャチャと退職の灯がみえてきたこの頃、ただ、誰かに感謝せずにはいられない気持ちで一ぱいです。残された月日をさらに充実させていきたいと努めております。

川高第五回生還暦記念誌の原稿をといわれましても、実感として還暦の気分にはなれないでおります。住居は、水戸市堀町 茨城大学（本部）の近くに息子二人と家族四人で住んでおります。休日の日課は、庭いじりや家庭菜園づくりと、月二回位ゴルフを楽しんでいます。幹事さん御苦勞様です。長らく御無沙汰いたしておりましたが、皆様方のお顔が思い出され懐かしく筆をとりました。

近況報告等

森 田 昌 利

前略、筆不精の為、原稿はもとより日常のご連絡も差し上げずすみません。幹事の皆さんにはご苦労さまです。さて、還暦の原稿に代えて以下の近況と云うか現状についてメモります。

記

一、現住所 名簿記載の通り

一、生年月日 昭和九年十一月二十九日生

一、勤務先 東京労働金庫 専務理事

一、家族 森田 昌利 本人

八重子 妻

智之 長男…結婚し別居 陽介 二男 きよ 実母…九十一歳

一、趣味・趣向 碁・将棋・ゴルフ

酒…以前は日本酒だったが年と共に弱くなり、最近ビール・ウイスキー水割が中心。のんびいの類い食べ物…以前は肉類だったが今は魚が好き。それも焼魚が好き。

一、身体の調子 健康。六〇年間大病なし。頭は駄目だが身体は丈夫。

一、これからは暇が出来たら苦勞をかけている女房とゆっくり旅行をしたい。

一、同年（昭和九年いぬ年生まれ）のメンバー、十人で、「あ・うん・の会」と言う同期会を作り、年二、三回交流している。

（注）メンバーの職業はばらばら。「あ・うん・の会」の名称の由来は国民学校一年生の教科書の一ページが「コマイヌさん、あ・うん……」とあった事と昭和一桁生まれのイヌどしを記念してのもの。以上

とりとめのない文章にて失礼。あっと云う間の六十年、これから楽しく過ごしたいもの、お互いに仲良くいきたものです。今後とも宜敷く。

還暦を迎えたわが人生

森 田 守 重

皆様大変ご無沙汰しておりますが、お変わりございませんか。月日のたつのは早いもので、昭和二十八年三月初雁の校歌はためく学び舎を去り四十年の歳月が経過しました。

戦中戦後の激動の時代を少年で過ごし、高校卒業後は、進学、就職、自営業へと、それぞれの人生の進む道は違いました。が、いつになっても青春時代の思い出は熱く焼き付いており懐かしいものです。

私も高校卒業後、東京電力（株）に入社、夢中で会社生活および子育てに追われ、ふと気がついてみると定年を迎える

年齢になってしまいました。退職後は、川越の実家と飯能の自宅を往復する自適の生活を送る予定です。どうかお近くにお出掛けの節は、是非お寄りいただき近況等お聞かせ願えれば幸いです。

家族構成は母親、妻、子供二人です。趣味は盆栽（さつき、うちょうらん）です。

最後に同窓の皆様のご健康とご多幸を祈念申し上げ誌上でのご挨拶といたします。

還暦を迎える今

山 本 健 治

四十一年間勤めている会社（ホンダエンジニアリング㈱）も、あと七カ月で定年を向かえようとしています。定年後に備えて、今、遊びの基本となる身体作りをしています。水泳、ジョギング、ウォーキング等を実行していますが、中でも水泳については八年前から「スポーツクラブ」に入り行っています。週三日位、一回一km位泳いでいます。全身運動の為おかげで腰痛・関節痛など忘れていきます。四十二歳の時、心臓を悪くしましたが、現在は正常になっています。昨年は木曽の御嶽山（三、〇六三m）に登山。また、今年は五十九歳の体力測定のため、第九回秩父七峰縦走ハイキング（四〇・二km）に、チャレンジし十時間二十分で完歩し、完歩証明書を頂きました。判定基準から見ますと、健脚との事です。これから向える六十代の山に向かって、なんとか乗り越える自信が付いた様な気がします。

山登りを始めた人に、登りたい山をたずねると、圧倒的に多い答えが尾瀬だそうです。私も六月八日には、一泊二日の日程で、尾瀬一周ハイクを妻と計画し、水芭蕉、リュウキンカが咲き乱れる木道を三二km歩き、すばらしい景色に出合い感動しました。「健康って、いいですね」これからも体に十分気をつけて、無理せず、若さを保っていきたいと思います。

料理を楽しむ

横田 和助

アマチュアの料理は楽しみながら出来るから良い。出来不出来が生活に影響する訳でなく、程々に美味しく食べられて、お腹を満たしてくれば人は喜び自分も満足する。そんな思いで最近私は料理の楽しさを味わっている。きっかけは今年の五月頃から始めた家事の分担で、私ที่บ้านに居る時間が多くなったのと、家内が会社勤めから帰るのが夜八時頃になるので必然的に私が受け持つ事になった訳で、幸いにと云うべきなのか、私は修業時代に台所の賄いを経験した所もあって、全くのところ「嫌だな」とか「面倒臭いな」という思いもなくごくすんなりと受入れられた。一方家内にしてみたら不安な思いがあったのだろう、「本当にいいの。」とか「大丈夫なの? 何だか悪くって。」なんて暫くの間云ってたが、私の方も料理の腕があがるにつれて、いつしかそう云う言葉も聞かれなくなった。この頃ではレパートリーも多くなり作る面白が増してきて、次々と新しい料理に挑戦するのだが、上手に出来る時もある

ばそうでない時もある。不出来の時は再度、まずい所を考えて作ってみる。結果、美味しく出来ると喜びもまた一しおである。試行錯誤を繰り返しているうちに自分の得意な料理方法が見えてきて、これならいつでも美味しく作れるというレパートリーが何種類か出来た。その内多いのは中華料理で、特に炒め物は出来るし、味も比較的調えやすいので下拵えさえきっちりして置けば二品ぐらいはすぐ出来る。これを肴に一杯飲むのがまた楽しく、幸せで得意満面の時である。最初は家内に「美味しい。」を連発され、「上手に出来たわ。」など云われたら、内心ぞくぞくする程嬉しいのに「お前はのせるのが上手いからな。」と案に、煽てに乗らない口振りで云うと、「だって本当なんだから。」と思った通りの返事が返ってきて思わず鼻孔を膨らませて「どんなもんだい。」と反っくり返りたい程良い気分だった。今では感激はなく美味しく出来ても慣れっこになって普段そのものであるが作る楽しさは変わらない。

男の料理だからと大雑把という訳ではないが、いつも量を多く作り過ぎてしまうのでつい食べ過ぎてしまう。家内も食べ過ぎて太るのを心配していたが、やはり太ったようでお腹の左右を驚掴みにしながら、「此方一キロで此方一キロ合計二キロ太っちゃったわ。」とぼやきながらも、食べる時は「私幸せ。」とか云って太ることなんか忘れたかのように食べている。私も同様にお腹ばかり出てきても良くない体型になりつつある。以前健康診断で脂肪肝だからお酒は控える様に云われた。健康には充分気を付けなければならない年齢と承知しつつも、うまい料理と酒の魅力にはなかなか勝てそうにない。

来年私は還暦である。月日の経つのは今さらながら早さが身に沁みる思いがする。平均年齢八十として二十年は生きられる計算になるが、神のみぞ知るで、後何年生きられるか分らない。ならば分らないなりに先の生き方を考えねばならない。遣り残して悔いる事なく清々しく逝ければこれに過ぎる至福はないと思う。それには健康が第一で、ス

トレスを溜めず、好きな仕事をし、美味しいものを食べ過ぎない程に食べていれば健康を保てるに違いない。
人は誰でも美味しいものを食べたり話したりするのが楽しみで好きである。年代を越えて話が合うし、また飽きない。料理は人の心を平和にするコミュニケーションの潤滑油だと思う。料理は素晴らしい。そしてもっと料理の幅を広げられれば尚素晴らしい。それを目指し楽しく料理を続けたい。



五、随想

記念誌発行にあたり雑感

秋 山 寛

記念誌発行にあたり御案内を戴き、自分自身はまだまだそんな年ではないと、毎日を通じて居りました。昨今の米の騒動の放送を見聞し少年時代を思い出します。川高在学中には、昼休みにパン券をゆずりうけ、コッペパンにチャムをぬってもらい、それを食べた事を思い出します。校舎は楠の大木の下に生物教室があった事をなつかしく思い出します。

過日川越プリンスホテルの同窓会に出席して帰りに（ゲジゲジ先生）横田稲吉先生をお宅までお送りし、名栗川の岸辺のお宅での奥様と二人のお話を伺いながら、私も娘を嫁に出して、早く孫の話をききながら、毎日毎日の生活を想像しながら、帰ってまいりました事を思い出しました。また昭和四十五年度には川越地方裁判所の檢察審査員を任命され半年間審査員として川高の大楠木を見ながらかよいました。

私は現在自宅で、建築の仕事をしておりますが、妻と二人の生活になり自治会会長の職を奉職しながら、毎日を過ごしております。幸いにして私は現在体をつかって働いておりますが、同窓生一同の御健勝を祈りつつ、記念誌の発行を心待ちにしております。

ひよどりのことに寄せて

石井 一

六月の蒸し暑い土曜日の夕方、鳥の騒々しい鳴き声で診療の手を休めた。未だ赤肌の雛鳥が植え込みの中で蹲っていたので側に寄ると、屋根、アンテナ、梢を行き交い鳴きつづける「ひよどり」が二羽、騒々しい理由が察知した。「弱き者に組みする」私の性格か？ 物置から探してきた小鳥籠の中に雛鳥と水を入れたが、日曜日の朝、またまた騒々しい鳴き声で目を覚ました。一羽の親鳥が木の実を食べさせ、もう一羽の親鳥は屋根の上で注意深そうに目配りをしているではないか。一週間後の観察の結果は、雛鳥がピーピーと大きく鳴く時は親鳥を呼んでいる時、ピーッ、ピーッの鳴き声は満腹感のある時、けたたましく鳴く時は親鳥が餌を運んできた時、親鳥も交互に餌を運んで一生懸命与えている。水を換えようとすると親が、けたたましく鳴く。こんな鳥でも「親子の絆は深い」ものだと感動もした。「親孝行したい時には親はなし」同窓生の殆ど多数は両親を失くしているのではないかな、生きていれば皆んなの分親孝行してあげて下さい。また逆に、私は子供たちにこれ程の愛情を注いだか自信がない。我が国の経済成長とともに、いつのまにか成人し、子供の要求のまま不自由させない育み方をしてきたのではないかと過去を振り返させたのは「ひよどりの親子」であるのは間違いないことである。川越市の歯科医師会の会長も終わり、現在は10の自治会長さん・10人の民生委員さんの纏め役として、社会福祉事業に取り組んでいる。今は亡き両親の代わりに一人暮らしの老人たちのボランティアをまたロータリアンの一人として地域社会に奉仕をしています。私も変

わったもんだと思う。名譽も保身も必要としない現在の世の中がそして人がよく見えてきた。変わってはいけないこと、それは「親子の情。絆」である。

ひよどりは今も鳴いている……………。

平成六年七月吉日

故郷（ふるさと） 雑感

石 丸 孝

故郷が生まれ育った土地、ということだとすると、私には故郷がない。これまで「どちらのご出身で？」と聞かれることがあると、ちょっと言いよどむが「生まれは横浜だけど育ちは南関東一円」と答えてきた。

川越に移り住んだのは昭和一九年三月。今は川越市の一部だが、当時は人間郡高階村であった。住居は東上線新河岸駅に近い場所、これも近くにある村立高階小学校へ、四年生への進級を期に転入するためであった。

前住地は横浜市鶴見区佃野。市立豊岡小学校に三年生の一年間だけ通学した。ここは、私の出生地に近い場所で、そのころも母方の祖父母が生活していた。戦局が厳しくなり始めたため、祖父が長女である母と一緒に住もうと勧めたからの転居だと思うが、一年にして再度居を移すことになったのは、戦局がますます不利になり、いつ空襲を受け、戦災で焼き出されかも知らない時局となったからだったろう。案の定、一年後には空襲により、この一帯は灰燼に

帰した。横浜市鶴見区が私の誕生の地だが、二歳半で神田三崎町に移るまでを含めて、横浜に住んだのは前後合わせて三年半に過ぎない。神田の記憶はあまり無い。二階建てのしもた屋で、二階の二部屋か三部屋には、中国か朝鮮からの留学生が寄宿していて、時には銀紙に包んだチョコレートを貰ったりしたことや、父が当時凝っていた写真の現像を、玄関脇の狭い部屋でやっていて、急にドアを開けて怒られたり、赤い電灯と強い酸の臭いが鼻とのを刺激したことぐらいいしが残っていない。

物心がつくころには、千葉県船橋市に移っていた。理由は定かではないが、多分、家族の成長によるものだったろう。今度は庭もあったが、水道はなく、下水は道の向かい側の幅二メートル程のどぶ川に流れこんでいた。幼稚園と小学校入学は、この船橋でだった。幼稚園は隣接の市川市立中山小学校附属幼稚園に通った。片道二十分位を近所の友達と数人、母親たちに付き添われて二年間通園した。小学校は、方角が幼稚園とは全く逆の船橋市立葛飾小学校で、現在の西船橋駅の近くにあったはずだが、今は跡も残っていない。これも、下総中山駅近くの自宅から十五分から二十分近くの距離だった。近所の小学生が集団登校していたが、朝が遅く支度ののろい私は、しばしばそれに遅れて、途中まで母に送っていつももらった。

横浜に移ったのは、小学二年を終えて三年に進級する時で、その後が川越市だが、敗戦の前後にわたるこのころが、生活は最も厳しかった。食料難による竹の子生活に始まり、慣れない草刈り供出、遠くの井戸からの風呂水運びなどなど、家族共々数多の苦勞があった。なかでも忘れられないのは、雪の朝、ゴム長どころか運動靴もなく、雪焼けて赤く腫れた足を心配して学校まで背負って行ってくれた母の背中のみくもり。その母もこの六月にあの世に渡った。余談だが、狹山市に住んでいた母の最期の脈をとってくれたのは、図らずも川高同期の吉崎秀一君であった。その折

の数々の便宜に多謝。彼に母を委ねたことで、私は母に対する責任を全うした気がしたのである。

こうして、昭和三十二年の初夏、大学を卒業した年に東京板橋区に転出するまでの十三年間。生まれてから社会に巣立つまでのうち半分以上をこの川越で過ごしたのである。その後も数回の転居をし、現在の住所に最も長く住んでいることになったが、青春時代の大半を送った川越は、私にとって第二とも、あるいは第一ともいえる故郷なのである。

塞翁が馬

伊 藤 博 美

高校時代懐かしさのあまり、突然「成語集」の一部が蘇ってきたという訳でもなく、正にこの言葉が人生を言いて妙と思うこの頃である。

人並みに学校を出、サラリーマン生活を大過なく過ごし、幸い健康にも恵まれ、このままいけばやがてリタイヤ後の気ままな生活が待っているものと信じていた平成元年、そうは問屋が卸さず、どえらい陥穽が待ち受けていた。

妻の急死である。自分が死ぬまで面倒を見てくれるものと今まで信じていた人が突然消えてしまったのだから、これにはまいった。なぜ選りによって、善良な市民であるこの俺に、こんな鉄槌が下ろされるのか、しばらくは神様を恨んだものだが、ふだん信心もしていない奴に恨まれたのでは、神様もいい面の皮である。いつまでくよくよしてい

ても仕方がない。これしきの事で会社をやめるわけにもいくまい。今はやりのリストラだ。炊事、洗濯、掃除の3Sだけは家政婦に頼んで、その他の雑事は自分でやることにした。(ついでに言うが、このような一家の主人にとって、役所や銀行や郵便局が全土曜日休みになったことは極めて遺憾なのだ) そうこうしているうちに、今度は老母が約半年間の入院の末死去、引き続き葬式を出す。

思い出してもこの頃は大変だったが、自分だけが頼りで、病気になっても誰も看病してくれないとなると、いやでも健康には留意せざるを得ない。以前とは比較にならないほど、食事のバランスに気をつけるようになり、好き嫌いもなくなった。明日に備えて睡眠は十分とり、酒は毎日飲むが、二日酔いはほとんどなし。毎年の人間ドックも欠かさない。となると、前よりはるかに健康的になったことと、周りに気兼ねのいらぬ生活の良さに気がつく。

一方、同年配の諸兄を見ると、奥方のご機嫌取りに結構大変なようだ。リタイヤした途端に、かつての「ご主人様」は「濡れ落ち葉」から「ワシ男」に転落し逆に「三下り半」を突き付けられたうえ、財産の半分を巻き上げられたという話も今や珍しくないからだ。ふと、今まで「不幸」だと思っていたことが、長い目でみると、実は「幸い」だったのではないか、と思うようになった。

昔は六十歳といえは、正に人生の黄昏時であったが、今の平均寿命では、あと二十年以上は生きるのが当たり前で、まさに心身ともに男盛りの時期なのだ。過去の係累を引きずることなく、第二の人生をスタートできるとは、何と素晴らしいことであろうか。もはや「離婚」も「不倫」も、予の辞書にはない。小説「マディソン群の橋」は、日本でも評判になったようだが、不幸にして係累をお持ちの諸兄も、この際一念発起し、古い道徳律などを踏み越えて、もっと自分に忠実に生き始めては如何なものか。

奮え、友よ、ゴルフに読書にフルムーンにボランテニア活動も結構だが、今一つ物足りない。

人生そのものは二度ないのだ。しびれるような青春にもう一度、身も心も浸してみよう、などというのは、戯けた唆しであろうか。

ふるさと

大野 寛

「ふるさと」は、自分を優しく包んでくれる母親の懷に似ている。たとえば、どんな失敗をしても、その人の心を慰め癒してくれる。そういう包容力というか魔力も併せもっている。その実体は、人の繋がりだろうか、あるいは、自然とか風物とかいうものだろうか。

歳々年々人同じからずといい、花は相似たりというから、やはり、自然の中にわれわれは変わらぬ「ふるさと」を見出そうとしているのだろう。

東京生まれの私にとって、そういう意味の「ふるさと」は、喧騒の東京ではなく、疎開先の越生町であり、農業をやった高麗川村である。当時の生活を振り返ると、にわか百姓のため自分たち家族の食う物すら十分賄えず、たとえば馬鈴薯が採れても小粒ばかりで、まともなのは口に入らない有様だった。その苦労たるや思い起こせば限りがないが、そこには良かったもので、五十年という時間の経過は、これらの不快な思いもある程度淘汰してくれる。いまは墓参

などで時々訪れるだけだが、秩父山地に連なる青い山脈とその山間から湧き上がる白い雲は、その頃と変わっていない。しばし眺めていると私を少年時代に引き戻してくれる。やはり「ふるさと」はいいなあ。

おやじの一言

岡 野 道 夫

私の親戚でシェットランドシープドックの雌犬を飼っています。

私どもが俗に云う「さかり（発情期）」がきたので各種の雄犬を飼っている犬屋に「かけ（交尾）」と一緒にいきましました。あいにく店の主人が留守で代わりに若い男子店員が応対しました。交尾させるため同じ囲いに入れましたところがどうもじゃれているようであまりいきません。二十分ほど待った後店員に「まだ時期が早いのでまた出直して下さい」と云われました。囲いから犬を出そうとした時に店主が帰って来ました。いきなり雄犬に向かって「なにやってるんだ」と一喝入れました。するといままでじゃれていた雄犬が上に乗り首尾よく交尾ができました。

犬にもおやじの一言は効果があるもんだと感じました。私たちの年齢になると「おやじの一言」が必要な時があるのではないかと思う今日この頃です。

“幻のホールインワン”

岡村悦次

還暦までの人生の縮図には、幾多の筋書のないドラマがあった。なかでも“六十”にまつわる想い出は“ホールインワン”である。

S六〇年八月二四日（土）、ホームコースのN・C・C、11番パー(3)、一五五メートルの打ち下ろしを5番アイアンにてナイスショット、ボールは左エッジより右にキックしてそのままピンに吸い込まれ、見事“ホールインワン”。ゴルフならだれしも憧れの的であるが、あとの費用のことを考えると素直には喜べない。これだけではなんの変哲もない事であるが、これには伏線があった。同伴者の一名が年齢、顔立ち、スタイル、ともに申し分のない女性であった。B & Wの白の半袖にアシックスの紺のミニスカートでノーストッキング、腕もメンバー顔負けの超美人。

スタートの10番でカップインしたボールを大胆にも片足を高く上げて取り出した。その美人の直後にいた小生は、ミニスカートの中で精悍な感じの太腿の付け根の割れ目に白いショーツが食い込んでいる様子を幸運にも拝見した。その直後の出来事だけに“女性の下着を見るとツキが付く”とのジンクス？を思い出し、思わず生唾をのんでのショットであった。以後のプレーは気持ち爽やか、身体からやかで伸び伸びプレーしたが18番にてO・Bの大叩きをし、41でハーフを折り返した。

それから数年後、残念な事がおきた。小生が“ホールインワン”した11番ホールは、その後のコース改造にて昔日

の面影は今日に見ることは出来ない。小生にとっては幻の「ホールインワン」にしか思えないが10番ホールの光景はこれからも脳裏を離れる事はない。これからも、次なる通過点「人生七十古来稀なり」の杜甫の曲江詩に向かって、生涯盛年として再び「ホールインワン」を夢みるゴルフ人生でありたい。

うたかたの記

小 高 芳 男

過ぎ来つる五十二年をうたかたの浮びしごとく思ふことあり 茂吉

時の過ぎるのが余りに速かった気がする。この斎藤茂吉の短歌の「五十二」を「五十九」に置き換えてみれば、己の現在の感慨そのものだ。人生八十年の時代とは言うものの、この先何年生きることになるのか、人生「一炊の夢」とはよく言ったものである。

中学ではさほど意識しなかったものの、川高ではさすが駿馬ぞろいの中にあつて、理数系が決定的に弱いことを思い知らされ、かろうじて文系特に国文学に興味を持てた。あの「白文万葉」や「四鏡抄」などのテキストや、毎月の宿題に頭を悩ませた「獺祭雑詠」などが昨日のように思い出される。加えて徳さんこと佐藤徳四郎先生のおどし授業のおかげで、「この道より我を生かす道なし」と思いこみ、国語教師の道を選ぶことになったのが果たして幸いであつたのか。

青雲の志を抱いて（？）、埼玉を後に湘南の地に高校教師として赴任したのだが、三十歳の時に大病をして頭を垂れて郷里埼玉に戻った。

地域による教育的な土壌の違いを痛感しながらも、以後たつぷりと埼玉の風土に根をおろした。松山女子を皮切りに、三十代後半から四十代前半を母校の教壇に立てたのも幸運だったかも知れない。そして伊奈学園在職中の昭和六十三年秋には、一ヶ月ほどヨーロッパ・アメリカの教育事情視察の機会を得ることもできた。

この間高校は、進学率三十％台から九十五％へと上昇し、かつての英才教育は夢と消えて、国民的教育機関と化した。教科書もグリーンと易しくなった。当然学習指導から生徒指導中心の教育に変わったのである。要するに「源氏物語」を捨てて、バイク指導や喫煙の懲戒に奔走する日々となった。この道も外からは平凡に見えようものの、決して平坦ではなかったのである。

教師なりけり春曉己が咳にさめ 楸邨

それでも近年ようやく心のゆとりが出てきたためか、暇をみては文学散歩や史蹟巡りを楽しんでいる。一昨年までは主に東北・北陸を中心に芭蕉の「奥の細道」行脚の足跡を尋ね、最近では北陸・俱利伽羅峠や神戸・一の谷、更には四国・屋島や下関・壇ノ浦に源平ゆかりの古戦場を駆け巡っている。義仲・義経や弁慶の勇姿を俤にし、清盛栄華の夢を偲び、関門の渦潮に諸行無常、人の世のはかなさを懷古するのである。

またつい先だっては、源家の棟梁源義朝の霊を知多半島美浜の野間大坊に弔い、義経の兄今若、後の阿野全成の墓を沼津市井出の大泉寺に探訪ねた。楽しいことこの上ない。

こうして三十七年間の教職生活も、ともかく定年を迎えることとなった。三月末日が来たら、先ずはホッとすることに

違いない。ここまで何とかやってこられたことに感謝しよう。元来欲の少ない性格である。人生これでよしと心得ている。これからのことはまだわからない。再び教壇に立ちたい思いは十分ある。そして今度こそ徳さんよろしく、あの笹竹を振って生徒を困らせることにしよう。

そんな親父の姿を見て育ったわが愚息は、「こんな楽な商売はない」と本当に思ったそうである。奇しくも現在、某校で何と国語教師として懶惰な日々を食っているのである。

今、このごろ思う事

柿 沼 隆

九四年の六〇歳の年男と云う事で埼歯会誌と飯能ゴルフ誌に感想文を書いてしまったのもう書くタネが無くなった。

それでは何を書いたかと云うと、埼歯会誌にはこの年になっても釣り（レークトローリングとフライ）ゴルフ、コレクション、読書、ドイツなどで一人遊び出来ると云う事。（コレは余談であるがS先生の趣味の中にヒルネというのが有ったが、彼の車はよく目立つそれも昼下がりのラブホテルにパークしてあるうらやましいヒルネである。）そして我が飯能G誌では、あるキャディーさんに感化されて家事を学び老後のサバイバル術を身につけた事と、そして七〇歳代でハンディ二〇代のゴルフが出来るよう心得たいと。こんな事を書いてみた。ついでに寄稿者招待コンペに

出場してネット六五（四〇―四三H一八）で優勝してしまった。その席上二二年後のディフェンディングチャンピオンとしてお待ちしていますのでドーゾお身を大切に長生きして下さいよう、犬年生まれの同志等をアオっておいだが我々の年代はあまり長生きしないようだ。

さて今回の同窓会誌であるがラスト昭和ヒトケタの興味ある体験が綴られる事と思われ早く読みたいものです（皆と同じなら一安心、奴ができるならオレもとか（ヒルネも？）云うのが昭和ヒトケタらしい。）しかしそれも十年も立たぬ間にはチリチリに消滅してしまうのではないか、それは世の常として仕方ないがそれでも誰が残った者が大切に保管して一人になっても時々それを孤独に読み返しては勇気を出して生き延びていくのだろうか？ など先の事を考えてしまうのが今までの体験として私の悪いクセでもあったようだ。しかし六十歳になるともう先は知れているのだからそんなに心配しても仕方がないのだと悟れるように成りつつある。そう云えばボーヴォワールの「老」の著の中で六〇歳―八〇歳がもっとも幸福な年代であった事例がのっていたが（このケースは割合と多いとか）それによるとラストチャンスをつかむのは自分自身の心の中に有るとの事だった。では又の日に、サヨウナラ。

平常心是道

傘 松 祐 三

校章のあるクラスの写真を綴じ込んだアルバムがあった。

還暦ともなると物忘れも多くなるが、思い出は走馬灯のように浮かんてくるから不思議である。校門を入ると右に講堂、左に楠、事務室、管理棟、校庭を背にした古めかしい階段教室。勉強は努力もしないせいか、気にしながらも成績には結ばない。恩師、徳四郎先生には指名読みの際「産出」を「出産」と読んで、鼻をつままれ、鼻の中のおできが破裂して何とも痛かったこと……。徒然草、枕草子、数冊の副教材が今だに捨てられず書架にある。

何故か古典教材には傾注した。特に「奥の細道」は味わい深く、後に国語の免許状を取得するきっかけになったのも思い出の一つである。絵が好きになったのも高校時代、写生の時間に不透明水彩絵の具で書いた絵が取り上げられて、彩色の天才呼ばわりしてくれた大沢寛先生。先生が退官された年、筒に入れ大切に送っていただき三十数年ぶりに見ることができました。教育者として実に感慨無量、胸のあつくなる思いでした。

友人には、素行悪しとして退学者を出した事件。受験に悩んでいち早く他界した人。修学旅行で計画的に遊び耽った仲間……。そのくせ女子高校の前の道をひとりで歩けなかった自分。そんな時期を我が思春期、反抗期と呼んでいる。進路に迷い一大決心して『禅の修業』総持寺専門僧堂に安居。更に駒沢大学に進んで専門の学科を学び、かたわら国語科の教員資格を得る。世に時枝文法と呼ばれる先生の授業に恵まれたのも幸いでした。教職は小学校四年、中学校二十六年間、四つの地区でお世話になり、定年五年前に無事退職することができました。

現在、生家でもある自坊に晋山（開堂）式、結制会を正式に修業させて戴き、堂塔建立、環境整備に専念致しておりますので、是非共お立ち寄り下さい。

昨年（平成五年）十月十三日大本山である諸嶽山総持寺の禅師より、御開山、瑩山紹瑾禅師、二祖、峨山紹碩禅師の御征忌の焼香師を拝命、畳一千枚が敷かれる大本堂で大導師を努めてまいりました。

これはその時の「香語」です。

諸嶽平常両尊心（諸嶽平常両尊の心）

道念高風照古今（道念高く吹き古今を照らす）

虔献無量慈恩粥（虔んで無量の慈悲恩に粥を献じ）

願力随處振宗風（願力宗風を随處に振う）

維時平成五年十月吉日 謹詠 祐三九拜

本山は東西に連なる長廊下があり、ほぼ中央に北面して仏殿に向かいます。合掌した際、大きな涙がこぼれ、生きて仏に出会う感動を覚えました。

祖先崇拜は、仏教の中心ではありますが、「六親眷族七世の父母」と回向します。七代さかのぼると百二十八名の人々が数えられます。

六十年一周する還暦をむかえたら、七代の祖先の願いを考え、せめて供養心を起こし慈恩にむくいたいものです。裏返して言えば、若者に最も本来的な人間の生き方を示したいものです。

「人人尽有光明在、全体不藏露堂堂」 伝光録より

同窓生交歓 峠

鹿 島 泰次郎

もう大分前から伊藤博美、浜野博敏、小林富雄君の諸氏とは三年C組の縁でときどき一緒し、語り合い、酒をくみかわしている仲である。

ついこの間も、故、本多清久君の愛娘の桃子さんが立派に成人され、就職したとの報を受け、伊藤君のお骨折りで皆揃って御祝いに行かせて貰いました。

野球部の同期生も二年に一度ぐらいだが集まって、お互いに無事を確認し合い、楽しい団欒を持續している。その会場も川越、飯能、所沢、狭山など、その都度移動しながら森田守重君のお世話をいただいている。昨年も飯能で催し、久し振りに北野敦也君が横浜より出て来てくれて、皆はとても喜んだのだが、篠沢稔夫君が仕事上の事故で怪我をされ、目下、小川町の日赤に入院中との報を受け、一同心配したのでした。

野球部仲間も森田武昭、益子、泉名の諸氏は今は亡く寂寥たる想いを感じている。

ところで、最近私のところに斉藤弘君がときどき訪ねて来る。斉藤君といえは三年C組で一緒だったし、野球部で同じ飯を食った仲である。柔かいフォームを持った左腕投手で、その速球は早くから一級品と騒がれた逸材であった。加えてその打撃力は天才的で、リストの利いた強くて柔かい躯体からはじき返される打球の速さは、素晴らしいものだった。その彼も二年生の夏頃、突如肩をこわし、以後生彩を欠き、二度ともとは戻らなかった。

今年の二月頃、大雪の降ったあとしばらくして、二人で旧正丸峠に登った。斉藤君は白髪まじりながら今でも百八十糎はあろう長身瘦躯である。一方、私の方は百七十二糎ぐらいたが体重が七十八キロとやや肥満している。登った日は良く晴れた日で、麓はあちこちに日溜りがあつて、春を想わせるような穏やかさだった。だが、二人で登っているうちに山には残雪が厚く覆い、とても難儀した。二人は登山中、やけに熱っぽく話した。それは仕事のことであり（彼は現在、芝公園近くの会社勤務で、一方私は所沢で先代からの食肉販売業を継いでいる）、青春時代の頃の話、そして結婚、家庭、破綻、両親への想い、人生の不確かさや不透明さなど嘆じているうちにようやく峠に着いたようである。

峠は意外と小さく、暗く、しかも林の中である。小道であり、古道なのである。昼なお暗い静寂の地である。風が強い、そして冷たい。風はどうやら登ってきた林道を伝わって峠へと強く吹きつけているらしいのだ。雪と風と暗い林の中で、還暦を迎えた二人の男は、ただ黙って立ちすくんでいるより仕方なかった。もちろん、しんとした静寂な雪の森の中へ誰も登って来る気配はなかった。麓のあの陽光は何処へ行ったのだろうか。斉藤君が少し乾いた声で、「これが昔の正丸峠か」とつぶやいた。峠を見下せる小高い場所をみつめて用意して来た昼食をとり、ビールと焼酎を飲んだ。風を避けて座っているこの場所からふと左の方に目をやると、奥武蔵の低山帯の山々が陽光に映えてきらめいているではないか。山肌があたかそうに喜んでゐる。

暗い林の中の峠には、雪の古道を吹き上げてくる寒々とした風の音だけがしている。依然として誰も来ない。

飲んで少し陶然としたのか、私は還暦後にやって来る人生は陽光に満ちている山肌なのか、それとも古道を吹き上げてくる冷たい雪風なのだろうかと思つた。斉藤君の方を見やると、彼も同じように感じていたのだろうか、それと

も別の事を考えていたのだろうか、無言で下の暗い峠の方をいつまでものぞき込むようにして見つめていた。

私の今……

川村 哲也

「還暦記念誌発刊」という文字を見て「ウッ……」となった。毎日毎日息子が孫かという連中と一緒にワイワイ仕事をしていると、年齢に関係なく体を動かさざるを得ない。もちろん同年輩も一〇歳も年上がいて、それなりに年齢を感じさせられる事も多いが、あらためて自分の事となると妙なものである。

平成七年は、私にとって二度目の定年を迎える年になった。一度目は、ある期間の中での定年で、明確な意識があまりないまま、現在の仕事に入った。

川越高校を卒業して四〇年を越えたという感覚はしないが、思い出そうとしてもはるかかなたの出来事でしかない。特に就職後は川越を離れての数年毎の転勤は、年数回の帰省もままならない仕事であったため、何となく「遠くにおいて思うもの」的になってしまった。

戦後の混乱がまだ尾を引いていた時代に比べて、現在は安心して暮せるとはいうものの、中・高校生時代と違って、精神的な余裕のない感じが近年特に強くなっている。これも、社会人となって毎日が時計の秒針と向き合う仕事、そしてその延長線上に極めて近い現在の仕事、ということが災いしているようだ。

「男女共学」という言葉は死語に近くなってしまったが、私達の母校は未だに男子高を続けている（川越女子高も同様だが）。このことは川越地域の文化・社会に対する貢献度といった面からプラスなのかマイナスなのか。男・女別々の高校は他にもあるが、それ等と共学校との違いはどのような形で卒業後の生活に影響しているのだろうか。男子校卒業という立場を離れて（伝統うんぬんにとらわれずに）地域社会への貢献という点から第三者の立場で見直すことも卒業生としての責任かなと思う。

戌年の正月登山に思う

菅野 功 一

今年の登り初めは一月四日の大山登山。落語の「大山参り」でお馴染めのあの大山である。この地への登山は初めてなので、気持ちは小学生のようにわくわくしながら地形図を段彩に塗り分け、大山付近の地形や景観を楽しく想像してみた。

正月四日、早朝五時五十分、西武新宿線航空公園駅より電車に乗り、高田馬場、新宿乗換えて小田急伊勢原駅に降りたのは七時四十分。バスは出たばかりなので、次のバスの発車まで、今年初出勤と覚しき人の表情などをのんびりと眺めながら待った。ケーブル下までバスで行き、ケーブルには乗らずに、そのまま登り始める。阿夫利神社下社には九時を少し過ぎて着いた。さっそく家内安全無病息災を祈願し、お札をいただいた。山頂へは、神社左手の門をく

ぐり、百四十段ばかりの急な石段昇りから始まった。短い距離ながら道は急峻で、正月三が日をお屠蘇気分で過した体にとっては、手応えならぬ足応えのある登りであった。

標高千二百五十二米の山頂を踏んだのは十一時少し前。今年こそは、月一回平均、年間十二回の登山をしたいものだと思いつつ、穏やかに晴れた空の下、もやに霞む相模平野を俯瞰した。西に目を移すと、純白の富士が左斜面に雲を這わせ、視界一ぱいに迫ってくる。丹沢の山々は指呼のところにあり、二の塔、三の塔そして塔の岳へと続く尾根が、やわらかく正月の空を画していた。穏やかな成年の正月の山だ。これで正月登山は二十年近く続いているのではないだろうか。

想えば、川高郷土部に所属し、何泊か現地合宿しての名栗や大滝村山村調査がきっかけで、山地や山村に心惹かれて以来四十年。北は北海道利尻島の利尻岳から、南は九州の九重連峰まで、様々な山に登ったり、山村を訪れたり、山の湯に浸ったり、五万分の一の地形図を眺めたりと、私の余暇は山に関わることで大半を占めている。そして、登山が核となって、カメラに、山野草に、探鳥に、スキーに、そして山の文学書や作句にと、山に関わって広く浅く、いろいろなことに首を突っ込んで現在にきている。

ところで、教員という仕事柄か、こうした山に関わる様々な体験は、思いもかけず教育と関係づけることが多いのである。仕事と趣味とに共通項があるというわけである。即ち、山行きは、子どもは言うまでもなく、若い親達や教職員に対しても、立ち止まって物事を見つめさせ、考えさせる多くの視点を提供してくれるのである。こうした新たな体験や発見を期待しつつ、今年も山の中を歩くことになるだろう。

その意味からも、山歩きに耐え得る体力と健康は保持しておかなければならない。つまり、その為のトレーニング

は欠かせないのである。現在、一年三百五十日は、早朝トレーニングを欠かすことはなく、ストレッチ体操的な発想で、足腰に重点を置き、適当に体を苛めている。この早朝トレーニングが私の一日の始まりになって、かれこれ十七・八年になるだろう。「目標が具体的に明確になっていると、物事は続くものだ」と、今更ながら思うこの頃である。「継続は力なり」と言うが、私流に言えば「継続は宝なり」である。なぜならば、毎朝のトレーニングこそが、山の気を何時でも味わうことができる元になっているからである。

(平成六年一月七日 記)

俺はまだ還暦なんかなりたかない

倉片幹人

先月、七月の何日だったか、鹿島泰さんからハガキが来た。相も変わらず達筆な字である。

見ると、今年「平成六年」は、我々戌年生まれが「還暦」に当たるので何か書けとの事、普段からペンなど持たない商人になんかと思っていると、今度はまた、電話が掛かり、何でも良いから書くようにと念を押されてしまった。そういえば、昨年あたり、あちこちの銀行等から年金の説明会等という通知が届いていたし、ずうーっと前から、亭主の能力、かせぎと体力の衰えに、しっかりと見切りをつけてしまった女房の奴に、早く行ってその説明を聞いて来いと、何度もせつつかれてはいた。

年金なんか、ずうーっと先の事だと口先では言いながらも、よく考えてみると、ついこの間の様にも、又、遙

か昔にも思える、過ぎし昭和二十八年春、川高の卒業式を前にした三月九日の事、進学を諦めさせられ、いやいやながら連れて行かれ、日本橋の繊維卸問屋「稲村源助商店」に入れられてしまったのが運のつき、今から思えば、落語でもないとしても聞かれない様な、前時代的な小僧務めに相成ってしまった。

その昔、山岳部の歌にでもあったが、めしたき、ふろたき、小屋掃除、ならぬ便所そうじ、から始まる毎日に、うんざりしながらもいるうちに、同窓生である岩崎昭九郎、横田和助、島崎正夫君達との四人が、この街で同じ苦勞をしていることが判り、俺だけが逃げ出す訳にはいかない等と、へんな意地から、アツと言う間に満二十三年間が過ぎてしまっている。その間の、正に安給料から積んだ「厚生年金」の支給額が、果たしていかほどになるかは知らないが、抜け目なく女房の奴が狙っているらしい。

その後、昭和五十一年五月、それも厄年だというのに退社をし、正に馬鹿の一つ覚えである呉服の、しかも小売業を、所沢に戻って始めてしまい、以来十八年、相も変わらぬ商いの毎日が続いてきたわけで、なんと四十数年が過ぎており、気がつけば今年は戌年、実感があるわけではないが、六十歳となるわけだ。

八月、早くも盆の季節となり、あの終戦の年を思わせるような十三日、この猛暑の中、ご苦労さんにも毎年恒例の事ながら、お盆様を迎えると言って、わざわざと横浜から二歳の孫娘を連れて来ている長女夫婦一家三人と、入間市から三歳になる男の双子と共に食い稼ぎに来た次女夫婦四人組、それに加えて、大学がやっと終わり勤めが三年目となる長男（二十五歳）、まだまだお迎えは来そうにもない我が家のご先祖様である八十三歳の母親。そうでなくとも狭苦しい我が家に、盆棚と十一人がひしめき合う様は毎年見慣れた風景ではあるものの、特に今年は孫共の体が急に大きくなったせいか、今年の天候の為か、誠に風通しが悪く、暑苦しい事この上無い。

孫共に、「ジイ、ジイ」と呼ばれるのは、慣らされて諦めてはしまったが、まだまだ俺は「ジイ」にはなっていないと虚勢を張ってはみるものの、雨が降り始めればすぐに判る程になっている情けない頭と、ガラスに写る短足、胴長、前屈み、その上、腹だけが出っ張った、これが我が身、どう見てもその年相応だと諦めざるを得なくなってきたのが何とも悔しい。

商店街の若い人達と話していても、急に何か敬語などを使われたりすると、話し合っていたその中から突然突き放されたようで、がっかりもする。

六十歳の壁はまだまだ先だと頑張っではいても、昔から好きで集めてきたクラシックカメラも目標の六十台迄あと十台足らずが、なかなか集まりが悪くなってきたのも、誠にじれったく焦ってくる。

生来の不器用故、もともと下手なゴルフなどでも、あまり熱心に通うでもなく、特にこの所、若い数字のスコアが稀になってきているのが情け無い。

——俺はまだ『還暦』なんかなりたかー無い——

去年は冷夏で米が無く、
今年は酷暑で水が無い。

それじゃ来年はどうなんだ？
それが判れば苦労は無い。

たった一年先でも判るんならば
占い師にでもなって金も持て

こんな俺だって女房子供にずーっと大事にしてもらえらるだろう。

みんな元気で、取りあえず来年まで、その又来年までと頑張っ、出来ればこの次の『戊午』までお達者でー、その時こそ、みんな揃って「赤いチャンチャンコ」でも着ような。

平成六年八月二十九日（誕生日）前のたわ言

明日に向けて素敵に加齢（エイジング）しよう

栗原 誠 一

今世紀の初め、四十五歳を下回っていた日本人の平均寿命は、いまや八十歳と世界一になった。私の父母も他界した。母が昨年八月、父は昨年七回忌を迎えた。病院は老人が多い。父は脳梗塞で痰がからみ、三ヶ月入院、八十一歳で死亡した。母は進行性の胃ガンで入院、八十三歳で遠く旅立った。

幸福って何なんだろう。素敵に加齢（エイジング）する長寿社会を目指して考えたい。高齢社会に対する不安。寝たきりや痴呆といった、暗い惨めな近未来のイメージ。どうだろう……。人間は長生きになって、不幸なのだろうか。高砂の翁をみたまえ。

「お前百歳まで、わしゃ九十九歳まで。」

本来、人間は百歳まで生きる自助能力を持つ。人類の現実がある。

人間は加齢とともに、直線的に老化しない。死の直前になって直角型、あるいは終末低下型に老化する。訓練で体の各部分（パーツ）を使いきって、ある日、枯木がかれるように、ふと旅立つ。

「死はこわがらなくてもいいのだ。」と宮澤賢治が、その詩『雨にも負けず』で言っている。言語性知能は、年齢を重ねても低下しないばかりか、むしろ向上する。人格は生涯発達を続ける。つまり、人間は、長生きをすれば身心の衰えた期間は短くなり、健康な期間が長くなるのである。そして、人間の何たるかは、一に健康即ち幸福にある。健康とは、成人病の危険を克服し、長寿を手にした自助能力のある者にある。くり返す。

「お前百歳まで、わしゃ九十九歳まで」にあるのだ。

さて、健康について考察しよう。

長生きの秘訣、それは、我が人生について思えば、健康つまり幸福とは排泄を科学する者にある。食べたらず、これが原則だ。糞は肛門から出すだけではないのだ。目糞、鼻糞、耳糞、然りである。又、皮膚呼吸然り、毛穴から垢を出すのだ。皮膚を延ばし、皮膚を清潔にするのだ。

嗽をして垢を出すのだ。乾布摩擦をして、皮膚を延ばすのだ。

特に嗽。深い嗽が、重要だ。

病院で老人が呼吸が出来ない。

痰が、とれない。それで、呼吸が出来ない。機械で吸い出して、苦しむ様を見た。

嗽をしよう。深い嗽をしよう。

そのために、タバコをやめよう。

そして、酒も、ほどほどに。

仕事を減らすのだ。

それには、脂肪をとるのだ。

それには、汗をかく程度の運動だ。

速歩で二十分だ。

口の中の、胃の中の、ヘドロをとるのだ。

鼻汁が顔にまつわりついている感じ。それをなくすのだ。

人には、それぞれの健康法がある。

大事なことは、自分に合った薬をみつけるのだ。自分の場合、それは、フジビートル（湧永製薬株式会社）300カプセル（六千六百円）だ。キョーレオピン（湧永製薬株式会社・八千五百四十五円）だ。そして、ボンハイカルンT（湧永製薬株式会社・三千三百円）だ。その三つの薬を毎日飲むのだ。そうすれば、口の中のヘドロがとれる。胃の中のヘドロがとれる。即ち健康になるのだ。それには、期間がかかる。

もしかして、二年間か、三年間か、十年間か。

しかし、慢性のアレルギー性鼻炎は必ず治るのだ。俺の出合った生涯最良の薬、それは湧永製薬の薬だ。漢方薬は、何年もかかって悪くした体を、悪くした体その期間相当が治る期間なのだ。「だが心配するな。」必ず良くなる。俺自身が実行し、実感している。とっても気持ちが良いのだ。加えて、俺自身が発見した、手先・足先健康法を実践すれば健康（幸福）になるのだ。

諸氏よ、還暦を迎えて素敵に加齢（エイジング）しよう。

一、現在の日を、重ねて思う、我も又

含めて、健康、人皆幸福あれ 誠栄

一、嗽こそ、我が人生ぞ、皮膚延ばし、

塵を祓い、垢を除かん 誠栄

日々雑感

栗原 孝

一期一會

長いか短いか、人それぞれの人生ですが、一生の中で触れ合える人の数は知れています。まして一瞬の時間を、共に通り過ぎて行く人々は……。

わが町でも、銀行、証券会社、保険会社、百貨店等々、数年のうちに転勤をして行く人々が数多くいます。そのような人たちの中で、心のふれあえる人々との、役職・職業を問わない人間としての、交流の場をつくりたい——そんな想いから「一會」というサロンを女房とふたりだけでオープンしたのは、現在から八年程前のことです。駅前再開発で、所有のビルがたまたま角地になったのをきっかけに、永年続けてきた商売をリタイアする決心をしていた時でした。それからです。第二の人生が始まったのは。そして現在、サービスも無い、料理も無い、女の子もいない、ナイナイづくしの奇妙なサロンを、限られた数少ない人たちと楽しんで居ります。

時間よ止まれ

一生の間には、ストップ・ザ・タイムと叫びたい時があるだろう。数十年前の真夏の宮球場、暑さも感じなかったピッチャーマウンド。

明日も昨日も無く、ただその一瞬のみに生きていた時代。

そして、時は流れ、現在の生活。金持ちでは無いけれど、名誉も無いけれど、ただ自分の時間をタップリ持っている今こそ、“時間よ止まれ”と叫びたい。

随想

古寺 愼

私達が高校生当時、還暦というオジンを想像したものだった。自分も間もなく六十歳を迎えるが、今日、還暦という言葉は何となくそぐわない気がしてならない。私にも既に二人の孫がいるが、オジイちゃんとは呼ばさず、イーちゃん（オジを抜いて）と言うようにしている。これは意外に若い気分になれるものだ。しかし六十歳という年齢は、一つの節であるといえる。即ち、サラリーマンである私が、四十年余勤めた会社を定年退職すること、この感懐は非常に大きいからだ。

そんな折に、今回、川高五回生の記念誌発刊を企画されたことは、大変意義深いことと感じている。川高時代の想

い出は、私にも数々ある。その一つが校歌である。川高の校歌は、歌詞も曲もすばらしいと今でも思っている。甲子園の高校野球で勝者の校歌が流れるのを聞くと、必ず母校の校歌を想い浮かべるが、やはりどの校歌よりも川高のものが良いと思う。今でも時々口づさむことがある。

川高に入って痛感したことは、勉強、勉強で追いまくられたことだ。中学時代とは大きく変わった。一年生の時は、そこそこの位置付けにあったが、頭の悪い自分は高校だけの授業のみではついてゆけなくなった。しかし、家庭の事情その他で、家に帰ってまで勉強することはできず、又したくもなかった。成績は次第に下がっていった。川高は男子校だったため、中学時代と比べると殺風景で、遊ぶ余裕も少なく、高校生活はあまり楽しいものではなかったように思う。それでも今日の学生よりは勉強時間も少なく、今の教育の在り方には疑問を感じることが多い。

サラリーマンとなった私は、上司の良否が部下に大きな影響を及ぼすように、学校では教師の教え方によって、自分のような凡人は同じ学科でも成績が良くなったり悪くなったりで、影響力の大きさを感じさせられたものだ。今考えると、高校で学んだ事は、社会人となってからあまり役立ったようには思えない気がしている。

今回の原稿を書くにあたり、平成元年発行の同窓生の名簿を見てみた。頭の良かった人、スポーツの選手、ヤンチャな人等々だが、本当に懐かしい。是非会って語り合いたい人も沢山いる。

私は現在、三重県鈴鹿市にいますが、ここ数年は仕事で狭山に出張することが多かった。そんな時、なるべく東上線で川越まで行き、徒歩で本川越まで、昔を偲びながら本川越経由で狭山へ行くようにしていた。川越市駅、本川越周辺は、高校時代の面影を多分に残しているからだ。しかし、同じ会社の同窓生は別として、かつての級友に出会ったことは一度もなかった。

私の悩みは、約五年前から原因不明の頸部障害に侵され、好きな魚釣りや山歩きやスポーツなど無理が効かない状態にあることだ。会社に入ってから三十年余続けてきた麻雀も止めている。園芸も好きで盆栽も少しやり、定年後はいい物を持ちたいと楽しみにしていたが、現状では難しく、三年前から手軽に栽培できる野生蘭で、主としてウチヨウラン、長生蘭のほか、雪割草など山草類を集めて楽しんでゐる。会社の趣味者数人と園芸店まわりをしたり、雑誌を通じて各地の同好者と交流を図り、安く譲っていただいたりしている。栽培方法も分かつてきて、今一番楽しい時である。同窓生に愛培者がいれば、春蘭なども手掛けてみたいので、良いものを格安で分譲して欲しいと思っている。年はとっても気持ちは若く、人生は一生青春でありたいと願うものである。

校長室にて

小林 康三郎

本校の校長室に座ってから五年目になった。来年の三月で定年退職を迎える。思いつくままに、いくつか書いてみた。

校長になってから、どんどん体重が増えてきた。一日中ほとんど校長室から出ず、座りっぱなしであり、運動量が不足なのである。人間ドックでは、高血圧とか糖尿病などと診断され、食事療法と運動をすることを言い渡された。酒は駄目、甘い菓子も駄目で、何だか人生の楽しみが減ってしまった。

校長になると、入学式や卒業式などの学校行事には、モーニングを着用することが多い。だが、私は着用しなかった。何故ならば、式典の度ごとに、国旗の掲揚と国歌の斉唱で、職員と対立しているからである。この対立が解けて、式場に国旗を掲揚し、堂々と国歌斉唱が出来る時が来たら、晴れやかにモーニングを着用しようと思っていた。しかしながらとうとう、その時期は来なかったのである。

軟式野球部が、県大会で優勝した。自宅で購読しているA新聞の記事は、一段組みで幅五センチであった。うっかりしていると見過ごしてしまう。事実、優勝を知った外部の人から、「新聞に載っていましたか」と聞かれている。これは、硬式野球部を除く他の部活動でも同じような状況である。新聞社にとっては、硬式野球の他は、特にエピソードがなければ関心はないのだ。それに比べて、本校が優勝した同じ日の硬式野球については、県大会の準々決勝戦が二ページにわたって記事になった。プロスポーツでは、野球の人氣が減ってサッカー人氣が急上昇しているらしいが、高校の部活動では硬式野球しかマスコミ人氣はないようだ。いつもは、高校の部活動についてあまり記事にしないA紙が、甲子園大会の主催という権限から、大変な熱の入れようは理解できないことではない。新聞の拡販という商売がかかっているので仕方がないが、NHKまで同様に、甲子園大会のみ大騒ぎするのには、いつも憤慨している。

高校三年間で生徒にとって最も大きな行事は修学旅行である。これは職員にとっても大変な負担を強いられる行事なのである。しかし、教育的に見てあまり意義のあるものではない。今の生徒にとって、社会に出てから旅行に行けないという時代ではなからう。五日間という限られた日数で、九州・北海道まで、より遠くへ行っても、疲れるばかりで得るものは少ない。だが、それでは身も蓋もないので、いろいろ効用を挙げ、貴重な体験学習の機会などと賞賛している。

遠くへ行くから疲れるので、航空機の利用をしたいとの意見が出ている。勝手に遠くまで旅行を計画しておいて列車では時間がかかるので、航空機の利用をしたいというのは、主客転倒の感もあるが、航空機の利用はいずれ決まるであろう。そうなると、外国旅行も認めろ、ということになるだろう。幾つかの私立高校で海外への修学旅行をしていて、評判が良いという。しかし、公立高校では授業料も払えない家庭もあるのだ。費用負担の出来る家庭だけ参加させるのであろうか。

今年は、異常な猛暑が続いているが、校長室にはクーラーの設備などない。事務室には設置されているが、入り浸りでは仕事にならない。総じて、学校の労働環境はあまり良いとは言えない。職員の更衣ロッカーはないし、運動部の顧問が汗びっしょりかいて職員室に引き上げてきても、シャワーを浴びることも出来ない状況だ。もっと、先生方が働きやすい環境を整えて欲しいと思っている。

「くすの木」に想う

小林 唯 夫

私の現役としての最後の勤務先になるであろう、板橋区立徳丸小学校にも「くすの木」の大きな木があります。春になると黄白色の花をつけます。夏には、その木陰の下で、子ども達が将棋を差したり、オセロゲームをしています。秋には一段とその香りを漂わせ、高い所にある葉のかげから、登っていった子ども達の歓声も聞こえてきます。

冬になり雪にすっぽりと覆われた枝々も、日の出と共にそのマントをはねのけ、一年中変化をしながらも、その雄姿を私たちに見せてくれています。

そしていつも暖かい目で、子ども達の成長を見守ってくれています。

◇ ◇

もう十五年も前だったと思います。二日間も徹夜でとりくんだ息子達の「くすの木祭」を古女房と見に行ったことがあります。

汗を流し、柔道の指導を受けた雨天体操場もなければ、さまざまなエピソードを残した講堂の姿もなく、ましてや莊嚴の感じさえあった階段教室も取り壊されていました。校舎と校舎の間には、青ミドロの浮いたプールができ、御岳さんへ行く崖には金網の柵もできていました。でも、むかしから変わっていないもの、それは正門に入っすぐ、シンボルとして聳える「くすの木」でした。

残暑の厳しい九月だったと思います。「くすの木」のつくり出す木陰には、「金魚すくい」「ヨーヨーつり」の出店があり、女子学生の姿が群がっていました。女子学生と話すこと、出会うことも恥ずかしかった私たちの世代とは、全く違った様相を見出し、驚くとともに時代の流れを感じたものでした。

「くすの木」の葉を一枚とり、その香りを確かめ、ポケットに入れ、帰宅したことを想い出します。

◇ ◇

職業柄、児童作家の本をよく読みます。今でも懐かしく感動して読むものに、大先輩「打木村治氏」の力作、『天の園（六巻）』『大地の園（四巻）』があります。

——中学は町の東北のはずれ初雁城とよばれる川越城の城あとにあった。正門を入ったところに数本のクスの大木が清潔な森をなしていて、校舎はその奥からはじまり、それは県立中学校にふさわしい威風のある建物であった。——

（『天の園』 第一部より引用）

この作品の中には、私たちも体験したマラソン大会もあれば、語り継がれた武甲山遭難の事件もあります。さらに全巻を通じて、川越の街並み、風情、人情も記されています。当時の川中生の生活や「くすの木」にもふれていますので、是非一読を薦めたいと思っています。



「くすの木」は、旅行するたびに、日本の各地で見ることが出来ます。愛媛の松山城へ出かけた時も、ふと初雁城の跡に立つ「くすの木」を想い出しました。「くすの木」は、むかしから世の中の移り変わりを見つめていたのだと思います。雄大な城郭を取りこわされた時、B 29、P 51が日本の街々を襲ったこと、そして木の下で若い男女が語り合ったことなどを。

地球の繁栄をいつまでも願いながら、そこに生き続ける人類の平和を、いつまでもいつまでも「くすの木」よ、見守って欲しいと思うのです。

六十歳に想う

進藤 明

川越高校を出てから既に四十余年経った。早いものである。模試、模試で明け暮れていた頃が懐かしく思う。私は、一年生途中から信州松本のある高校から、家の都合で急に川高へ、縁あって転校させてもらったが、旧制中学そのままの質実剛健を地で行くバンカラで、上級生のお説教まである校風にびっくりした。しかし、今も昔も県政県運を担う一方の旗頭として立てる伝統ある川高卒業生の多くの諸氏達が、あらゆる分野で立派な活躍をされていることは心強くもあり、誇りでもあります。

振り返ってみれば、私達は時代の変化に押されて来たようなものであります。昭和十六年四月、小学校が国民学校と改称され、私達はその第一号として入学した。その年の十二月、太平洋戦争が始まり、国民は否応なしに戦争へと巻き込まれた。国民学校五年生の時終戦となり、小学校と名称が元に戻ったが、ご存知のように六年生の時、日本の教育制度が大きく変わった。いわゆる六・三・三制の導入である。私達は、その第一号として、出来たての新制中学校に入学を義務付けられた。

旧制中学が新制高校となり、六・三・三制正規のコース第一号としてこの新制高校へ進学した。そして進学校のテストケースとして五日制の授業に小踊りして喜んだものである。

口の悪い先生の中には、試験成績が悪いとアチーヴ育ちの六三型と評した。当時、国鉄電車の事故というと六三型

電車が多く、質の低い代名詞でもあったが、それと六・三・三制とをもじったのである。

確かに旧制公立中学は、その地方の地域社会を代表する伝統のある学校が多く、入学することはなかなか難しかった。年齢の差は少々あるが、旧制中学五年制と新制高校三年制では、全校生徒数が同数であれば、新制高校各学年の40%は旧制中学時代には入学出来ない事になる。言い換えれば、上位60%迄なら旧制中学時代の質は維持出来ると考えられる。しかし、人口は増加し、進学希望者も急増していることを考えれば、こうした計算は一概には言えないが、少なくとも私達はその時代の制度改定の第一号としてテスト的存在であったことには間違いないと思う。このテスト生達は、新制教育の元で地域代表選手として高校生活を楽しく有意義に過ごそうと、希望に胸を膨らませて入学したものの、学校では今までの質の維持と一流大学に一人でも多くの合格者を出して進学校としての名を高め、生徒達の希望にも適えるため詰め込み的授業が始まった。

それでも、私達は勉強や運動や部活に励み、学生らしい生活が出来た。そして卒業し、大学へ進学した者、就職した者等、いずれにしても社会人として社会の大きな変化の中を生きて来たのである。

こうして日本のテスト生たる私達は、今や還暦である。高校時代、六十歳の人を見れば随分年配者だと思った。今や私達が年配者であるが、不思議なことに年配者という気がしないのは私だけなのであろうか。そして六十歳を過ぎれば第二の人生と言われているが、これからもテスト生なのであろうか。そうだとすると、やはりこれからも自然を愛し、芸術に魅せられ、人間性を重んじ、自由で闊達な人物として若い心を持って、第二の人生テスト生として進みたいものである。

楠の下に

鈴木 松 寿

折角の機会なので、何か書いてみようかと思う日もあるが、また別の日には、いつもの消極的気持ちは頭をもたげ、放っておけという気分にもなる。しかし、書かないのは日頃の信条に反するので、書くことにした。したがって、締切間近になり筆を持った次第である。

考えてみると、何時もこんな心の葛藤を繰り返し、今日になってしまった。これが私の存在かも知れない。今年は還暦である。しかし、日常生活の中で『とし』を感じたことはない。現在のところ、従来の職場から離れることについて、特に感慨はない。いつも、何をやっても不満が残り、意欲―実行―反省のサイクルの繰り返しであるからだ。唯一『とし』を感じるのは、わが子が結婚適齢期になり、そのことで気をもむ時ぐらいだ。

現在、相当の時間をかけて、旅行したい場所、勉強したいこともない。現在の生活スタイルを堅持し、一週間のうち四―五日間は働き、残りの二―三日間は、自分のしたいことをして気尽に過ごしたいと思っている。できれば、生涯現役で働き、且つ前向きに、学習意欲を持ち、種々のことにチャレンジしたいと思っている。しかし、だからと言って、特に関心を持つものもない。今振り返り、私は夢中になって体力を燃やしたことがない。それが少し淋しい気がする。いや、いろいろとチャレンジしたが、成功したものがないということかも知れない。趣味も資格も中途半端に終了し、人に誇れるものがない。金儲けに関しては尚更である。

私の一日の中での楽しみは、通勤の往復に要する九十分程度の電車の中での読書である。読書の中味が、最近になり、高校時代に読みたいと思っていたものになった。高校時代、ある先生が「高校時代にやりたいと思っていることがあれば、将来それをやるものだ」と言ったのを聞いた記憶がある。松尾芭蕉縁りの地をしきりに訪れてみたいと思ったことがあった。

最近では、中国文学や中国の春秋・戦国時代に、ひどく興味をもつようになった。『紅樓夢』『金瓶梅』『三国志』『水滸伝』『史記』『十八史略』等である。これらの中で、文学ものは感銘はなかったが、歴史ものに心惹かれるものがあり、中国歴史の深さと永さに驚いている。これらの内容は、現代の企業社会・人間社会・家庭社会にも通じるものがあると思うのである。

現在、わが国の政治形態は、五五年体制が崩壊し新しい政治勢力の離合集散が行なわれているが、これの将来を見通した場合、中国春秋・戦国時代の歴史にヒントがあるような気がしてならない。

私は、毎年一回正月に、川高に顔を出すようにしている。これは、毎年一月二日に、サッカー部主催のOB戦があるからだ。しかし、正月三ヶ日はお屠蘇を飲むので、川高へ着くのはサッカー部関係者が帰宅後の夕方になるが、後輩のために僅かな寄附を届ける。

その時、いつも川高のシンボル楠の下を通る。川高の校舎もグラウンドも、私達が学んだ頃とはすっかり変わってしまったが、楠のみは昔の俤、昔の位置に、昔のように、いつも一杯の常緑の葉を貯え、聳え立っている。高校のシンボルが残されていることは、有り難いと思っている。

六十年考

関口俊輔

六十年は長くて短い

人生五十年では短か過ぎたろう

人の長寿化には人の力が見え隠れする

人は自然の中の一員に過ぎない

人は人の計り知れない自然の力をもらっている

人の力はこの自然の力から引き出される

へば医者をやらせてもらっている

医者のやることは人の力である

自然の力と何とか調和しようとするしかない

人の力に過信があるとする

人の力が自然の力と調和しないとすると

このような人の長寿化は恐ろしい

日日は新日

田 島 弘 美

平成五年（一九九三年）五月二十四日、午前八時、安定剤の注射、午前八時四十分、全身麻酔注射、九時、家族やまわりの人達の激励をうけながら手術室へ向ったところまでは、はっきり覚えている…。

コーン、コーン、と何やら信号音がきこえるが目があかない、やたらと喉が渴いて、口の中がカラカラで苦しい。口を動かすと「喉が渴いてる?」「水のみたい?」と聞える。かすかに口をあげると、こまかく砕いた水の塊り3、4粒を入れてくれた。そしてまた眠ったらしい…。

目をあげると四、五人の顔がのぞきこんでいるらしい。また水のこまかい塊りを口に含ませてくれた。気持が良い。また眠ったらしい……。

意識がはっきり戻り話ができるようになったのが手術後三日目だったそうで、CCUから病室に戻ったのは四日目らしい。この時の状態は胸の所に三本の管が入って、喉の下から腹の上部まで何枚ものガーゼで覆われている。両足のつけ根の内腿のところから膝の斜め上の部分にかけて同じ様にガーゼに覆われていた。

一体何の手術をしたのか、病気は？

急性心疾患つまり急性心筋梗塞である。担当医から早急に手術をしないと命がないと宣告され半ば強制的に冠動脈にバイパス三本をつける手術を受けたのである。胸を切開し、バイパス用に自分の大腿部の静脈を取り、冠動脈の詰まった部分を迂回して新しい血管をつなぐ手術であった。

私の社会人としての人生を振りかえると、日興証券へ入社、以来三十有余年一貫して営業一本であった。その間単身赴任を含め東京と大阪の転勤五度をはじめ競争の激しい地区の営業に終始した自分に我ながら実によくやったとほめてやりたい気持ちでいっぱいである。充実したと云うか激務な仕事の反面、長年続いた不規則な生活から、知らず知らず心身共に、つかれきっていたのであろう。その上この病気の最大の因子である遺伝体質も加わり高血圧、高脂血症、糖尿病とくれば、何か病気になっても不思議はない。たまたまガンでなく心臓疾患になったものと理解した。『なるべくしてなった』と自分に云いきかせているが、今でも時々何で自分だけこうなるのだ、他の人も自分と同じ様な生活をしている人はたくさんいるのにと残念に思うことがある。

半年後、会社で復職した現在は、若手社員の研修を主力に社員全般の資質向上と育成を教育している研修部に籍を置いている。将来の日興証券を背負う社員教育である。

退院即リハビリで熱川へ療養し会社へ復帰した頃から今まで思いもしなかった現象が自分の中にある。それは朝、床の中で目が覚めた時、『今日も生きてる』よかったなあ、声にはだせない感謝と云うか感激が、健康体の時には考えもしなかった命の尊さを毎朝味わっている。

還暦と云う節目で顧みると想い出す事は多々あるが、今迄の人生で一番大変な出来事はやはり手術の事であろう。

『死の淵からの生還』したその当時の事を思い出すと身震いする。

卒業後、何かと公私に縁のあった加藤博之氏からのしばらくぶりの連絡で、充分に表現出来なかったが、私の貴重な体験を記してみたいと思いついた次第である。

一九九五年一月

浦安在住

雑考

西ノ谷 菊雄

高校生の生き方に一考。今までと同じこと。高校時代に精魂して培った心身の修業は、生涯の生活に最大の資力になる。学問一辺倒、或いは、スポーツ一辺倒はどちらもダメ。今までと違うこと。社会の激しい変化のために、各人が自分の興味関心・能力適性を知り、如何に自分と調和させていくか、このことに早く、よりの確に取り組んで、知徳体修得の学校生活を送ることが特に必要になってきた。昔、少年時代に描いていた高度で優雅な文化（例えば、源氏物語、枕草子）のみを追求する学習の場合は、もはや昔の夢物語となった。

現在の激変の一考。世界規模の文化・経済・科学技術の超進展により国際的諸事情の考え方や行動が、急激に変化してきた。徳川時代末の開国を、当時の国際性の必要性の一事例と想い、現在の激変を第二の開国とも受け取れる。どの変化の事例を見ても、長年にわたり辛苦のなかで築き、これらを守り、またすがって生きていくという諸習慣

をむりやりもぎとられるように思われる。いくつか、事例を挙げ、激変を考えてみたい。

政治では、以前の革新政党の社会党と自民党の新政権が誕生し、国内・国外の諸政策にあたっている。どの政策も、国際をにらんでの対応から反れることは不可能なことを示している。

経済では、産業の空洞化が進んでいる。例として、物を造る会社が東南アジアの国々に急速に移転している。賃金が安いので、製造会社の経営に大きなプラスとなり、安心して会社が永続できる。倒産の危機を避けるためには、なりふり構わず合法的に、素早く判断して、対処している。

技術面では、情報化が極度に進歩し、実施に移されつつある。大勢の未理解のうちに、極めて高度・精密な情報処理の技術が市中に侵入してきている。分からないままに付いていくことは、非常に恐ろしいことである。

以上、自分の生き方の参考にもしたい。

日なかば、道なかば

馬場 璋造

この題名が、現在の私の偽らざる心境である。まだまだやることが沢山ある。日暮れて道遠し、などといっているわけではない。

十五年前、四十四歳のとき、死にかけた。飼っていた胆石の発作がアメリカで止まらなくなり、帰国して一週間後、

胆嚢が化膿して敗血症で脈が無くなってから手術し、奇蹟的に命を取り留めた。そこで心機一転、となればよかったのだろうが、喉元通れば熱さ忘れて元の木阿弥、あとは余命と居直って、相変わず同じようなことを続けている。

材木屋の家を継がなくてはいけないのかな、と思いながら建築の道へ入ってそのまま脱線、川越藩を脱藩したが、川越や埼玉でのシンポジウムのお手伝いを毎年したり、「さいたま景観賞」の選考委員長をさせられるなど、県や市へ呼び出されることが多くなっている。Ｕターンではないが、これもせめてもの罪滅ぼしと観念している。

建築専門雑誌「新建築」の編集長を二十年ほど務めたがまだ卒業できず、お礼奉公が続いており、また建築関係五団体が集まったの「アーキテクチュア・オブ・ザ・イヤー展」の実行委員長をさせられるなど、建築界への奉仕の日々である。

趣味といえば、囲碁だけである。現在四段。最近では月に一度やる暇もないが、口だけは達者で、碁の新聞「週間碁」に、「デザイン碁」や「ソ連での碁会」などという随筆を書いた。日本建設学会囲碁倶楽部、森ビルの森稔さんなどとの大竹会、ヤマギワ社長の小長谷さんや建設省前営繕部長などのフォーラム碁会、いずれも幹事である。実は実力に関係なく、大竹英雄先生のタイトル入りの免状をコレクションしていて、タイトルを取った時に戴くことにしている。あと残っているのは本因坊か棋聖で、五段になるかどうかは大竹先生にかかっている。

一番困るのは、ご職業は何ですか、と聞かれたときである。建築評論家などといって誤魔化してはいるが、新建築を卒業するときに「生き残る建築家像」という本を一冊書いただけで、現在、建築評論などやっていない。何をしているかといえば、日本建築界の大手設計事務所、大手施工会社設計部のほとんどがメンバーの会を主催していて、会員への定時的なビデオによる情報サービスや、建築関係のコンサルタント、講演、委員会出席、テレビ出演、原稿書

きなどで、最近ではコンペのプロデュースが多くなってきた。埼玉新都心中核施設「さいたまアリーナ」のプロフェッショナル・アドバイザーなどもそのひとつである。また今年は十月終わりに、各方面の文化人百二十名、参加者約三千人という「日本文化デザイン会議94福岡」の議長を務めることになって、福岡通いが続いている。

しかし、これからやらないといけないと考えているのが、建築界の大同団結である。建築界は設計と施工の仲が悪かったり、設計者同士も幾つもの団体に分かれていたり、五十二万社、六百七十万人という建築界の地位向上がなかなか難しい。それに最近、例のゼネコン汚職などで、それでもなくてもイメージダウンしている。建築は利権の場ではなく、文化であり、社会環境の向上に大きな役割を果たすものであることをもっと自分たちも認識し、社会にも分かってもらわなければならないのである。

大層なことをいっていると思われるかも知れないが、決してそうではない。やるべきと信ずるまま、できるだけのことをやってみたいと思っているだけである。しかし、日なかば、道なかば、さて天寿が後どれだけ残っているだろうか。

喫煙について（還暦なんて！）

丸山茂和

私の道楽の友達是非常に仲が良く、しげるさん、正夫さんと名前を呼び合います。約二十名位ですが、毎月例会で

公民館に集まります。メンバーの年齢構成をみますと、明治生まれ三人、大正生まれ八人、昭和生まれ九人（全員ひと桁）で、平均七十三歳です。因みに、私が昭和九年生まれで一番の若造です。ある日の会合で、八十七歳の愛煙家が隣の席でスパスパ吸っております。私は禁煙してから四年ですが、噓せてたまりません。いっそまた吸い始めようかと言いましたら、命が惜しければ吸ってはダメと言われました。この仲間の中で吸わないのは三人だけです。彼等が言うのには、思い残すことが無いから『酒もタバコ』も思う存分やっているそうです。年齢も七十歳位になると、人生を達観して、余裕をもって生きられるそうです。私が今年『還暦』ですと言ったら、笑われました。まだまだお若い、これからだと……。

もしかして（近況報告）

公衆便所や会社の便所で、もし、貴方が鍵をかけた状態で倒れたら、誰が助けてくれるでしょうか。

私は、自宅の便所で下血で失神し、救急車で入院し一命をとりとめました。

もしかしてと思うと、まったく運が良かったのひと言です。検査の結果、結腸癌で大手術を行ないました。その後の経過は良好で、『酒・タバコ』が厳禁の二年間の養生期間も無事に過ぎました。五年間の追跡検査がありますが、四年目をクリアーしまして、現在、最終の五年目に入りました。今、健康上気をつけていることは、運動量が少ないので出来るだけ歩くことを心掛けています。

仕事の方は、第二の職場も平成六年の今年が定年ですが、健康に自信が出てきましたので、嘱託で少し頑張りたいと思います。ゴルフの方も、『いぬい会』に出来るだけ参加して、ミニ同窓会のつもりで楽しんでおりま

す。

『癌』（随想・趣味等）

死に神の手を振り切って救急車

チキトク俺のことかと倒れた日

呻吟へ激励だけが跳ね返り

改めて実はと主治医癌のこと

その時は誰の癌かとふと思い

今癌と知らされ不治の死を思う

手術室ベッドゆっくり生還す

癌切除とにかく大事に日を生きる

酒・タバコ殺生だかと釘さされ

それからは晩酌メニューから外れ

バックスに破門をされて生き延びる

人様の訃報は自分と同じ癌

何処までも生きてやるぞと言ひ聞かせ

もしかしてもしやと思う日を過ごし

癌と言う悪魔に齒向かうとは健気

回復の兆し確かに万歩計

昭和四十年頃の作品（回想しながら）

見事なる仮面だ羊になりきって
毒舌に耐えて鼻腔をふくらませ
おのれをも偽りおのれ見失い
現実にただうちのめされた白昼夢
猿の道化に人間茶化される
乾杯の音頭も旧き餓鬼大将
篤志家の一面に見たエゴイズム
精悍な顔も歪んだ歯の痛さ
葬列の長さに徳が偲ばれる
正論をかざし万座の孤に置かれ
自戒した酒癖酒にまた捨てる
酒吞めて俺が生きてる生きている
嘲笑と蔑視仕事の鬼でよし
真相も知らず責任もない噂

打開策所詮は他人の智恵である

わだかまり近寄りがたい距離をおき

死ぬということ

吉 崎 秀 一

職業柄、人の死に立ち会うことが多い。死を迎える人にとっては一生に一度のことであり、これ以上、非日常的なことは無いのであるが、多くの医師にとってはかなり日常的なことである。

そこで誤解を恐れず言わせてもらえば、死ぬことそれ自体は恐ろしいことではなく、殆どの人は（事故死を除いて）安らかに、ずっと死の世界に入っていくように見える。それなのに私たちは死を恐ろしいものとして避けようとするのは何故なのだろう。

癌や心筋梗塞でどれほど苦しんだとしても、臨終を迎える頃には皆安らかな顔になり、死の瞬間はまことに静穏である。

もしかして、私たちは死を忌むべきものとして、必要以上に敵視し過ぎてはいないだろうか。人が死を拒否しようとするのは、一つには死ぬことによってその人が自分と関わりのあった人々と、それまでのようなコミュニケーションを持てなくなってしまうということ、一つには死後の世界がどのようなものか見当がつかないという不安が強いこ

と、この二つが主なポイントではないだろうか。

私自身は死後の世界というものは無いだろうと思ってるが、仮にあったとして、私たちは生身の人間として存在し得ないのだから、人間として何かを認識するということもないということになる。

それならば前述の二つの懸念も杞憂にすぎないわけだから、死をあまり敵視するのは如何なものか……、最近の私はそう思うようになった。（これも還暦が近づいた証拠だろうか？）

私が以前、長野の山村の診療所にいた頃、あるお爺さんの検屍に呼ばれたことがある。彼は生涯健康で、一度も医師にかかったことがなく、その日、近くに住む将棋のライバルの家に行き、三番続けて勝って大喜びした途端に意識がなくなり死んだらしい。私が立ち会った死者の中で、最もすばらしい死に方をした人として印象的であった。

医師として何百人もの死を看取りながら自らの死に方を選べないとは、神様も皮肉な方だと思っている。

人生これから

横 内 洋

志木に生まれて志木で育った私は、小学校四、五年生の頃から、進学は川越高校、当時のことだから川越中学ですが、父親から「お前は川越中学へ行け」と言われてきました。六年生になるとみっちり補習授業を受け、進路対策も整い、入学試験を待つだけとなりました。ところが学制の変更で全員、それも無試験で新制中学に入学できて、これ

迄の補習の苦勞も無駄に終わりました。そして三年経ってアチーブメントテストと形は変わりましたが、入学試験を受け、運よく合格したような訳で、まあラッキーといったところです。今になって考えるといい時代でした。

卒業してから四十年、在学中から今日までお付き合いいただいている友達も沢山います。また卒業の時以来全寮会っていない人もいます。高校時代あまり良い生徒ではなかったのですが、いろんな方に迷惑をかけてしまいました。でも同級生とはありがたいもので、昨年私の二男の結婚式に副知事の関口一郎さんが主賓としてご出席くださり、この時は本当に川越高校に行ってよかったと思いました。本人が県庁勤務ということで、仲人は勿論、来賓の各位も県職員が殆どなので、皆さん驚いたり緊張したりでたいへんでした。同級生でもなければとても口などきけない、雲の上のような存在の副知事さんを友達扱いにしてしまつて、申し訳なく思っています。

第五回卒業生の末席を汚している私ですが、高校時代にお世話になった先生方には感謝しています。特に佐藤徳四郎先生には、社会常識・礼儀等について色々教えていただきました。先生の亡くなった今でもありがたく、これが本当の教育というものではないかと、校庭の巨大な楠木のように、偉大な師の恩を感じています。

昨年、川越高校OB会七番目の初雁会として志木初雁会が誕生、先輩後輩多くの知り合いができました。事業としては、総会、歩け歩け大会、ゴルフ大会など消化し、十二月には会報「紫紀報」を創刊、歩け歩け大会では、志木市役所から母校川越高校まで十六キロメートルを歩きとおしました。校門に入る時は校歌を合唱しながら、折から開かれていた同窓会総会の会場にゴールイン。因みに本年度の同窓会長は、渋谷健先生。志木初雁会は、坂戸初雁会をお手本にして創立したので、坂戸との交流も頻繁に行なわれ、町田さんや篠沢さんともお会いする機会ができ、このOB会を通してまだまだ川越高校との縁は切れそうありません。

色々取り留めのないことを書きましたが、定年迄にはもう一年あります。来年の春には新採用の気持ちで、新しい職場で頑張るつもりです。昔は「人生五十年」と言い、童謡にも「村の渡しの船頭さんは、今年六十のお爺さん」と歌われていました。しかし、いまだき還暦を迎えた自分のことを「孫のある人は別ですが」お爺さんと思っている人はいません。

青島幸男の作詞でクレイジーキャッツの歌っている歌に「実年行進曲」というのがあります。最後にその歌詞の一部を掲げて私の現在の心境といたします。

俺たちや実年 文句があるか

背は低い 血圧高い

機械には弱い 女には強い

ガンガン行こうぜ まだこれからさ

毎晩いっても大丈夫 大丈夫

六、還 歴

長い浮世に短い命

浅 海 守

還暦!! 今から思えば、俺は農高でなく川高に行って良かった。人柄の良い学友をたくさん得たことにほかならない。当時は家の農作業と、「徳さん」と「掛造」「幹ちゃん」等におこられるだけの毎日。後は勉強の事など覚えていない。サッカーで高校生活は終わったようだ。特に印象に残ったのは、入学式に「徳さん」が気を付け!!、そこで俺の目の前で藁谷がひっぱたかれたことだ。たまげた。これがショックで俺は勉強が出来なくなったなどとは言わない。オール2で、体育だけ4で、本当に困った。いつも、俺はクラスで二番だとお袋を誤魔化していたが、卒業式に、お前はよくビリで卒業出来たなあーと言われ、ガックリ。それはそうだ。兄弟が少し難しい大学に行ったもので、家では解っていたのだとつくづく自戒した。

卒業してから一時、みんなと疎遠になったが、また再びいろいろな形で会えるようになり、みんな昔と個性が違わないのが見えてきた。取ったのは年だけかなあーと思えた。肩書きだけは少し違っていたが、早晚同じになることとして末永く元気で付き合いたいものだ。

今、百姓をしているが、作物の成育は人に似たり寄ったりで、うりぬき等は十個の種を撒いて五本生ええるとする。

その内一番大きなのは抜き捨てる。次に一番小さいのも捨てる。要するに真ん中の普通の菜を残すのが野菜を良く穫るコツなのである。そこで普通の人間が一番幸せを掴むことが多いということが解ってきた。まあ、そんな事は別として、暇が出来たらみんな寄って下さい。昔からの家で昔ながらの生活をしております。そしてこれからは、誰にも好かれる人間になれるよう努力することにした。

今迄の人生訓

- 一、散る日もあれば、咲く春もあるよ。
- 二、昔、肩で風を切る。ああ、歩くに息切ることの姿。
- 三、人の世は望めど望まれず、遁るれど遁れず。尽ならねえなあー。

還 暦

尼 崎 壯 治（旧姓・永島）

橋梁会社に入社して、早いもので三十五年は過ぎました。これだけサラリーマン生活を続けておられますと、会社とともに歩むといえますか、世間で言う会社人間にすっかりなりきってしまいました。仕事は営業一筋で、幸か不幸か転勤はなく、従って单身生活はありませんでした。現在は、本州四国の夢の架け橋と言われています明石―淡路島ルート、明石海峡大橋の架橋等にも関係し、全国各地を歩いております。

六十歳になるといふ実感はなく、まだまだ若い人達には負けられないという意気込みは持っております。ただ周囲を振り返って見ますと、社内では私よりも年輩者は極めて少なくなり、また髪の白さでは右に出る者は居なくなり、還暦を迎える条件は完全に整ってまいりました。

家族は昨年の秋、長男に孫が生まれ、次男はサラリーマン二年生になり、息子達は親のもとから完全に離れました。これから夫婦二人の生活が始まるわけですが、多湖輝教授によれば、「夫婦の力関係は年とともに少しずつ変わり、二十代で八対二であったとしても、三十代で七対三、四十代で六対四、五十代で五分五分。問題は六十代の我々で、四対六、七十代で三対七、八十代でなんと二対八と逆転する。こうした変化に世の男どもは気づこうとしない」と書いておられます。還暦ともなると体力の変化だけではなく、夫婦の力関係にも及ぶという事ようです。

私にとって還暦とは、新しい人生のスタートだと思っております。

仕事以外では、週のうち二回を目標に、近くのプールで泳いでいます。十五年近く続いておりますので、仲間うちでは上手な方になりました。ゴルフはオフィシャル十一までになりましたが、かつての冴えはなく、愛されるゴルフにすっかり変身してしまいました。私の唯一の自慢は、ホール・イン・ワンを三回達成したという事です。友人達は本当に運が良かったと祝ってはくれましたが、私の期待する「腕が上がった」とは、誰も言ってくれないところをみますと、実力はまだまだなのだ、自ら認めております。これから先、ハンディキャップを上げることには大変に難しい事だと思いますが、一説によれば、「腕』ではなく、『道具』だ」そうです。ひたすらこれを信じて、道具にこだわりの望みは大きく持って進みたいと意気込んでおります。

還暦を迎えて “唯々感謝”

新井 富美男

「人生において一番素晴らしいことは感謝の念を忘れないことである」と福沢諭吉が言っている。いま、健康で満六十歳を迎えることが出来るのは、両親をはじめ、入学・就職・結婚と、人生の節目節目でそれぞれの出会いの中でめぐり合った方々のお蔭であると思うと、唯々感謝の念で一杯である。

思えば、高校時代はいわゆるノンポリ、無為に過ごした。体操部で半年位練習したが、中学時代に痛めた野球肘のため続かず退部し、部活というものも殆どしなかった。しかし思い出の多い時代ではあった。

大学三年生の時、誘われるままに同期の四人と、準硬式野球部に入部した。アルバイトと通学のための往復だけでは何も残らないような気がしたからである。幸い四年の時に、全日本大学準硬式野球大会に出場することが出来た。後でわかったことであるが、同大会に出場していた同志社大学の深川喜佐雄君とは就職先で一緒になった。昭和三十三年に住友海上火災保険（株）に入社した。金融機関の一つで転勤が多く、住居も七回変わり、お蔭で神戸、横浜という日本を代表する港町にも触れ合うことが出来、神戸では前述の深川君とは社宅が隣どうしであった。

平成元年に同社を定年、会社の命により今までは全く扱う商品の異なる「佐藤秀工務店」という高級建築を得意とする建設会社に入社、現在勤務中である。娘が早稲田大学理工学部建築学科を卒業し、「竹中工務店」設計部に勤務するようになり、同業の建設会社で仕事をするのも何かの縁を感じる。長男は「あさひ銀行」に就職し、現在孫が

二人となった。定年とともに、住友海上の同期で燦々会と名付け、毎月一回酒を飲み、年二回ゴルフコンペを。また大学同期では三々会と称し年二回ゴルフ会を行なっている。同社の野球部のOB会では年初に還暦のお祝いをして貰った。県内居住者で埼玉会というゴルフ会を運営し、更に酒での懇親会としてプラチナ会。常盤会、練馬大根会、二火会等々、なかなか多忙(?)である。

現住所に住むようになって五年になるが、女房と違って友人知人も少ないので、町内のゴルフ同好会に二人で加入したが、毎日が日曜日になったら、年四回のゴルフコンペを楽しみたいと思っている。

「人生において一番淋しいことは、することがないことである」と諭吉が言っているが、ゴルフがいつもできるように、また酒も飲めるように健康であることを願っている。

サラリーマン生活で思いつく言葉に、十年前転勤を命じられた時の歓送迎会で、先輩からこう言われたことがある。「転勤は人生の曲がり角である。出た結果が自分だ。有頂天になることもなく、物事に動ぜず、誰を羨むこともなく、誰に媚びることもなく、爽やかに生きることが一番いい」と。また或る先輩は、「定年は人生の一通過点である。常に抜け出す努力をすることだ」と。

人それぞれ、色々なことがあったと思う。また、色々な人とのめぐり合いがあったと思うと、感慨深いものがある。人生の「曲がり角」であり、また「一通過点」である還暦を迎え、これまで係り合った大勢の方々に感謝しながら、次の通過点へ向かって爽やかに生きたいと思う今日この頃である。

還暦を迎えて

今 林 隆 朗（旧姓・三上）

卒業して間もなく、同級生の吉野さんの紹介で、本田技研に入社した。その時既に夜間の大学に通っていたので、四年後に卒業した。また、中学生の時に野球部に入っていた関係で、会社の野球部にすすめられ、軟式野球ではあったが、八年間程汗を流した。その後四十数年間勤務し、平成七年一月に満六十歳で定年退職を迎える。

退職後、厚生年金を受けとることになるので、社会保険事務所に行き自分の経歴を調べてもらったところ、B5版の用紙四枚に打ち出され、担当者から「大変異動の多い会社ですね」と言われた。会社の同僚の中では私は異動の少ない方に属しているが、会社の発展と共に、いろいろな仕事をいろいろな場所経験して来た。埼玉県和光市を皮切りに、狭山、長野、本社、三重、愛知、本社、狭山、栃木、そして現在は本社に所属し、ここで定年を迎える。仕事本位なので観光などは出来なかったが、日本の主要都市にはほとんど出掛け、また、アメリカの工場にも二回、出張の機会に恵まれた。

あまりお世辞も言えず、誠実に人に接し、ある程度の自主性を保ちながら、ただひたむきに仕事に取り組むことが出来たことは、青春時代に名門高の同級生から良き感化を受けたお蔭であったと、最近になってしみじみとなつかしく思い出している。

自分の両親、妻の両親の葬儀を経験したせい、五十歳を過ぎてから古いお寺に興味を持ちはじめ、秩父札所三十

四ヶ所を歩いてまわり、現在は坂東札所三十三ヶ所を。これは関東一円に点在しているので、歩いてまわる訳にはいかず、暇をみつけては車でまわっており、平成六年中にはまわり終える。更に四国三十三ヶ所を七十歳迄に歩いてまわりたいと考えている。同級生で住職さんを見かけるので、機会があったらお説教を聞かせてもらいたいと願っている。

若い時に運動をしていたお蔭で、足腰は至って丈夫なので、五年程前から地元で軟式庭球を始め、現在は生きがいの一つとして、真剣に取り組んでいる。今は休日にしか出来ないが、退職後は回数を増やし、実力をつけ、対外試合が出来るとなりたいと思っている。同趣味人がいたらご指導をお願いしたい。

退職後の生活設計は特にないが、七十歳迄は体力も充分ありそうなので、身体を動かすことに多くの時間をかけ、健康を第一に張りのある生活が送れたら幸せと思っている。また、脳の劣化予防に習いたての囲碁を向上させたいし、生活にうるおいが保てるよう、よい本をみつけて読むことや妻との旅行なども時折したいと考えている。悔いのない生活が送れないものか、いろいろと思索しているところであるが、ある程度の目標を決めれば、あとは自然に決まってくるものだと思っている。

同級生諸兄の健康と幸せを心から願っている。

グード・ランディング

奥 富 洋 吉

還暦、当社の社員から「御目出度う御座います、とうとう来ましたね。つきましては赤チャンチャンコを用意しようと思います」との話しがあり、私は「誰の話だ俺の事か断固受け取らないぞ」と突っ発ねる。次の日ピンクのゴルフ用シャツと真赤なベストが届く、何か複雑な思いである。これも年代の節目であろうか!! しかし実感がない。考えてみると六十年も生きてきたのかと改めて思う。学生時代、実社会と夢中で走って来た。ここらで少しゆっくりと考えるのも良い事だと思う。何か飛行機に乗って知らないうちに目的地に着いた様な思いでいる。

先年と云っても二十年も前の話であるが、ヨーロッパを旅行した時である。風雨の中を飛行機が着陸しようとしていた。私の隣の座席に居た初老の紳士がこの悪天候に大丈夫かなと心配そうにモジモジしていたが、飛行機は無事着陸した。すると紳士は私の手を握り、「グード・ランディング」と言ってニコニコ笑っていた。人の良さそうな紳士であった。今でもその光景が目には浮ぶ。

人生六十年走って来てつくづく思う。人それぞれに目的地は違っても時が来れば着陸しなければならない。その時天候が良くとも悪くとも「グード・ランディング」でありたい。何か人間はグッドランディングの為に必死で生きて来た様な気がする。

まだまだ私は現役で空を飛び続けているが、何年か後には着陸する時が来ると思う。その時はグッドランディング

でありたいと願っている。

どうぞ皆様も *グッド・ランディング* であります様心より願って居ります。

還暦を迎えて

柿沼地作

平成七年二月で私は六十歳になった。

想えば、私は第二次世界大戦下に小学生時代を過ごし、終戦の混乱期を経て、日本の復興の槌音を聞き、それから高度経済成長の波に乗り、現在では世界に冠たる大国となった日本の変遷下に生きてきた。その風雪は、何時の時代でも大して変わらないものであろうが、少なくともそれらが、私の今日までの生活をいろいろな意味で彩っています。その間、私も人並みに結婚もし、三人の子供にも恵まれ、育て上げ、一方、いわゆる会社人間として働かされ、また働いてきました。融通のきかない初老の男になりましたが、同窓生でも私と大して変わらない方々もおられることと思います。——あなたはこれまでの人生に悔いがありますか？——

六十歳という人生の節目を迎え、これからの第二の人生を如何にして生きて行くかを考える時、先ず、人生とは何か、幸福とは何かを考えることが自然のことと思う。それは、何かさえ明確に掴めないが、出来るだけ夢のあるものにした。青い鳥は追いかけても追いつくことが出来ない鳥であると聞く。幸いにも健康に恵まれていて、また、三

十余年を苦楽を共にしてきた妻と一緒に二人三脚で、わが子のこれからの生活を見守り、また旅行好きな妻との国内外への旅行、一方、社会との係り方を考え、実行していきたいと思う今日此の頃であります。

同窓の皆様のご健勝を心から祈念申し上げます。

還暦をむかえるにあたって

加藤 公男

還暦をむかえるといっても、最近までは何か意識の上で実感があまりわいてこなかった。

今回の還暦記念誌に何か書かなければということで、あらためて来し方を振り返っているうちに、「ここまできたのだなァ」と感慨深いものがあります。

さて、私の生まれた昭和九年という年は、いったいどんな年であったかと思って、早速文献を紐解いてみました。それによると、前の年に日本は国際連盟を脱退しており、国際的にも孤立への道を進めていた時であった。満州国に帝政がしかれ、溥儀が皇帝に即位している。政治では七月に斎藤内閣が帝人事件のあおりで総辞職、岡田内閣が成立している。スポーツでは十一月にペーブルスをはじめ全米大リーグが来日。社会面では、東海林太郎の「赤城の子守唄」が大ヒット。九月には四国・関西へ室戸台風（最大風速六〇米）が上陸、死者六九四人。東北地方では大凶作で、身売り、行き倒れ、自殺等が相次いだと記されています。かなり大変な年であったということが分かります。

以後、第二次世界大戦、敗戦という大変革期を通過し、戦後の復興、高度成長、最近ではバブル崩壊に至るまで、かなり破乱に富んだ六十年間だったといえそうです。

こうした中で、川越高校時代は年頃も多感な時であったためか、在学三年間は今でも鮮明に記憶がよみがえる部分が多くあります。当時の川高には非常にユニークな、また教育熱心な先生方が多かったと思います。私にとっては特に、体育の松本利雄先生、国語の故佐藤徳四郎先生について、強い思い出があります。

私は三年間、陸上競技部に籍をおいていました。暑い夏も寒い冬も毎日のように練習にあけくれ、何で馬鹿みたいにただ走ってばかりいなければならないだと自問した事も度々ありました。

お蔭で県大会等でも一応の成果をあげられるまでになったし、自分自身の体力アップにもなったことは、今でも感謝している次第です。また、二十数年後には私の長男が川高に入学し、親子二代にわたって先生に教えることができましたのも奇縁でありました。

国語の故佐藤徳四郎先生には、不勉強の私はかなり苦しめられました。文部省検定の国語の教科書は早々に終わらせて、源氏物語や万葉集や……、等々を教材にされきびしく教えられたが、陸上競技の練習の疲れ、なまけぐせもあったて予習もあまりしなかったために、当てられて答えられず、大声で叱られた事もあった。特に竹ヒゴでできた“おみくじ”を使って当てられる方法は、私などは常に身が縮む思いだった。しかし、後日社会に出てからは何かと古文の話等に出合った時には、かえってこの時の事をなつかしく思い出したものであります。

私は現在、証券業というかなり変化（浮き沈み？）の激しい業界に身をおいています。昭和三十二年に入社してから昭和四十年の証券不況、その後の活況、最近ではバブル崩壊等、一生忘れ得ぬ貴重な経験をしてきました。前半は

ガムシヤラに企業戦士を自負して働き続けましたが、後半は本社勤務が長かったこともあって、広い視野にたつてその間の出来事を冷静に見ることができたのは幸いだったと思っています。

こうした中でもかく三十数年間、何とか無事に勤めあげたものだと今は実感しています。

近い将来、仕事を離れてからは、より充実した日々を送るべく、どうすべきかを考えているところです。正直言って、確たるものはまだありませんが、少なくとも悔いの残らぬ人生を送れるよう努めていきたいと思っています。

還暦を迎えた国際人

加藤 博之

終戦五十年を迎えた日本、いや第二次世界大戦で敗戦国となった日本は、いまや見事に立ち直り、世界屈指の経済大国にまで成長した。貿易収支は相変わらず黒字を続け、日本の国際貢献が世界中から要請されている。

でも本当に日本は国際的にファースト・クラスに座れるようになったのだろうか、己れ自身を振り返ってみた。

この記念誌原稿の最終締切り日（一九九四年八月三十一日）には、オーストラリアのシドニーにいた。第三十九回アジア太平洋映画祭日本代表団の団長として、女優や関係者十五人を引き連れての一週間の出張だった。

還暦を迎えるまで何度海外へ出かけただろうか。思えば初めて異国の地を踏んだのは三十四歳（昭和四十四年）の時、週刊誌の副編集長をしていた時だった。海外出版販売研修団の若き一員としてアメリカへ向かう途中、ハワイに

立ち寄ったのが初めて。そしてこの初海外旅行がいきなりアメリカ全土一ヶ月、続いてヨーロッパ諸国二週間、計四十五日間に及ぶ研修ツアーだった。一ドル三六〇円時代、持ち出し外貨は五百ドル十五万円の制限付きだった。

好奇心と野次馬根性は人一倍旺盛、若さにまかせて歩き回り、見るもの聞くものなんでも吸収しようとしていた。

サンフランシスコ、ロスアンゼルス、サンディゴ、ワシントンDC、ニューヨーク、ボストン、ミネアポリス、デモイン、バッファロー、シカゴと、旅は続いた。一都市で二、三社の出版社、新聞社、テレビ局を訪問した。プレイボーイ誌を創刊したヒュー・ヘフナー氏とも会談した。ニューヨークは十日間の滞在だった。強い刺激だった。マンハッタン、自由の女神、ウォール街、すべてが巨大で力強かった。「これでは日本は戦争に負けるわけだ」と妙に納得したことを覚えている。

シカゴからロンドンに飛び、パリ、ローマ、ジュネーブ、フランクフルト、デュッセルドルフ、コペンハーゲンと、一都市二日間ずつの駆け足旅行だった。しかし、ヨーロッパ諸国の持っている歴史と伝統、そしてその国々ごとの民衆の自信と誇り、プライドには感心させられたものだ。

あれから二十五年、渡航は延べ一〇〇回を超えた。井上靖先生原作の大作映画『敦煌』（日中合作）では中国北西部まで、北京―蘭州―敦煌と、ゴビの砂漠をラクダの背に揺られ、片道四〇〇〇キロの旅だった。

同じ井上先生原作の『おろしや国酔夢譚』（日ロ合作）では、モスクワ、レニングラード（現サンクトペテルブルク）に三度行った。この間、七十五年続いたソビエト連邦が崩壊し、ロシアとなった。初めてモスクワに足を踏み入れたのは三十六歳の時、昭和四十六年だった。当時はルーブル四百円、それがソ連の崩壊とともにルーブル十円となり、いまでは十銭にもならない。国際経済のなかでロシアは完全に消滅した。立ち直るまであと半世紀はかかる

だろう。しかし、国土は広くて豊か、人間は利口である。必ずあの国は立ち直ってくるであろう。

東西ドイツの統一、即ちベルリンの壁がくずれた時もベルリンに居た。ヒットラーの造った大撮影所「デファア」への投資や国営レコード会社「シャルプラッテン」の買収問題を抱えて、あの前後五回ほどベルリンを訪れた。昨日まであった検問所が翌日にはきれいさっぱり無くなっていた。三日後には東ドイツ軍の軍服、軍帽が街頭で売られ、壁の破片も土産物として並べられていた。政治やイデオロギーを越えて庶民の生きるたくましさを感じ、嫌というほど感じさせられたものだ。

世紀末の激動と激変をこの目で見、この耳で聞いてきた。その一方で日本は平和そのものだったが、このあとバブルがはじけ、世界的大不況が訪れてくる。閑話休題。

私が海外担当になってから、アメリカ西海岸シアトルに徳間書店の支社を設けた。NINTENDO OF USAとのジョイントで、英語版月刊ゲーム誌を発行している。ロスアンゼルスには映画映像のための駐在員事務所を設置した。ドイツのフランクフルトに現地法人を開き、香港にも現地法人が活動している。

ビジネスのなかでも出版、映像という限られた分野であり、出張する国も都市も自ずと決まってしまうが、すでに海外七〇都市はオーバーしている。延べ日数も五〇〇日は超えた。一九九一年には海外出張が年一〇回、八〇日にも及んだ。

では、お前は国際人になれたのか？

と問えば、答えはノーである。

回数がいくら多くても資格にはならない。英語はいまだ片言、中学時代が一番得意だった気がする。大学時代四年

間、第一外国語として習得した筈のドイツ語はさらにダメ。国際マナーも島国根性まる出しで欧米諸国の人々には恥ずかしい限りだ。

しかし、考え方は少しずつ変化してきている。国のため、会社のために働く欧米人はゼロだ。すべて自分のため、家族の幸せのために働く。いままで会社人間だった私も、還暦を迎えてやっとこの欧米人の生き方が理解できるようになってきた。トシなのかも知れない。でも日本の会社は周囲がそれを許してくれない。偉くなればなるほど、職位が上がれば上がるほど忙しくなり、自分の時間がなくなる。哀しいことだ。

もしかしたら日本は、まだまだ貧しいのではないだろうか？ 企業も見せかけの繁栄なのかも知れない。その証拠に、一ドル百円時代にもかかわらず物価が高すぎる。世界中で東京は住みにくい都市の筆頭にいつもあげられている。英語圏ならば夫婦で移住してもいいなと思うようになってきた。そのためには英語をさらに勉強しなければいけない。もっともっと国際感覚を身につけなければならない。

人生八〇年時代、これからが本当の自分をとり戻す時かも知れない。

還暦雑感

金子正雄

我々『川高五回生』も遂に還暦を迎えることになった。若い頃に抱えていた還暦のイメージは『社会人としてやる

べきことはそれなりにやり、これから隠居する人、あるいは悠々自適の余生を送る人』程度であったように思う。当時の社会一般も五五歳定年制を採用していたように記憶している。さすれば赤い絆てんを着て子供や孫たちに囲まれて祝って貰うという構図もそれなりに時代にマッチしていたのかも知れない。

人生五十年と言われた時代を遙かに遡る昔、先人は四十にして『不惑』、五十にして『知天命』、六十にして『順耳』、七十にして『從心所欲』と表現している。

間もなく還暦を迎えることになる小生は未だに迷うことばかり多い日々であるが、そう遠くない将来に、いやでも天命を知らされ、己の意に反しても順耳であらねば身辺に風波が立つという事態に立ち至ることが懸念される。いわんや從心所欲にはほど遠い存在であることは間違いない。皆様の心境や如何に／＼

翻れば当世の人の命は長らえて、日本人の平均寿命は八十歳を超え余命計算では二十数年生き長らえることになるようである。さすれば三十にして『立』を六十にして、第二の人生を考え『立』であらねばならないことになる。『立』のためのマーケティングなど、いろいろ考え巡らすことも多くなったが、今だ『立』の中身が見えてこない為体である。

一つの会社四十一年近くも身を置き何時の間にか社会人になり、その企業文化の中で生きて来るとそのイナーシャの大きさをひしひしと感じる。定年を迎えた途端に全ての点で会社と縁がきれ、一個人として再スタートを切り、生き甲斐を文化サークル活動やボランティアに求め、趣味を広く深く極めて生活を充実させることの難しさを未だ思考の世界ではあるがつくづくと感じる昨今である。

思えば川高を卒業した昭和二十八年には、テレビ放送が始まり繁華街の街頭テレビのプロレスに黒山の人が集まり、

日米M S A協定反対の学生運動が盛んであった。就職した昭和三十三年にはソ連が人工衛星の打ち上げに成功した。その技術力に驚いた記憶が蘇る。

そして間もなく岩戸景気が訪れて日本経済は大きく発展し今日の経済大国日本の礎が出来た。以来、ニクソンショック、オイルショック、狂乱物価などを経験しながら発展を続け今日の物余り社会、飽食の時代に至った。遂にバブルはハジけはしたが戦後間もない中学、高校時代を振り返るとその落差の大きさにただただ驚くばかりであり誠によき時代を迎えたものだと思う。

工業立国、技術立国を御旗に発展した結果は国際収支の恒常的黒字を招き円高は益々進み、遂に百円を突破し、国内は価格破壊現象が増幅され、諸外国からは収支バランスを迫られ、次第に国際社会で孤立化が懸念されるに至った。そして諸外国との人の交流も盛んになり、海外旅行も花盛りで国際空港は人人人。発展途上国からは出稼ぎ、不法就労、などなど、益々拡大し『宗教心の薄い単一民族の日本』も次第に侵食され、その良さも次第に崩壊が進んでいる。これも時代の流れと受け止めねばならないが、一方では現在、地球上で頻発している争いごととは、ことごとく民族・宗教の違いに起因していることを考え併せれば、ただただ飽食の時代を満喫するだけに終わらせず子孫に犠牲を強いることのないような政治的決断が必要ではないかと思う。

『下種^{ゲソウ}の勘繰り』に終わることを祈念したい。

終わりに当り皆様のご健勝を祈るとともに四十余年ぶりに再会を果たし、人との輪を広げて行きたいと願っています。お便りをお待ちしております。

還暦を迎えて

小泉 義治

早いもので私たち川越高校第五回卒業生も、還暦を迎える年になってしまいました。当時を思い返しますと、つい最近のことの様な気が致します。思い出される事は、一言では語り尽くせませんが、私が三年B組の時の担任の先生であつた今は亡き軍服姿の徳さんこと佐藤徳四郎です。あのおみくじのカラカラいう音は、今でも夢見る事があります。また怖かつた数学の掛原先生、人の良い人文地理の野村先生、物理の大川先生、漢文の近藤先生、面白い字を書く生物の横田先生など、個性的な先生が多かつた様です。

私達は新制中学校の第一期生であつたため、中学時代は上級生がいなかつたので、態度が悪いと言って上級生に大分しづられました。特に私は、兄が先生をしておりましたので目を付けられました。その後なんとなくバレー部の練習を見ていて、バレー部に入部しましたが、三年の時に退部してしまいました。今でも最後迄バレー部にいれば良かったと後悔しております。不思議なもので今でもたまに上級生に合うと自然と先輩と後輩の言葉になってしまうものです。また、同窓生はどこか昔の面影があるので、年を感じさせないものです。

私は高校時代、あまり成績が良くなかつたのですが、なんとか中央大学に入る事が出来ました。大学でも友達は今先輩や同窓生が多かつた様です。

大学時代もあまり勉強せず、よく麻雀をやつたものです。また、色々とアルバイトをしましたが、アルバイトも

当時はなかなか無かった様に憶えております。それでもなんとか卒業は出来ましたが、ちょうど今日の様に就職が無く、自然と父の商売であるミシン店を手伝う様になりました。

初めのうちは商売がいやでいやでたまらず、サラリーマンに憧れておりましたが、両親が相次いで亡くなり、頼りにしていた従業員も店を出て独立してしまい、得意先を取られたくない一心から、兄と協力して商売に打ち込む様になりました。私はもともと機械いじりが好きだったので、短期間でミシンの修理を覚えしました。この頃から品物を売る面白さ、ミシンを修理して直った時の喜びを知る様になりました。そして昭和四十八年に、一級技能士の資格を取りましたが、今のミシンに比べればやさしかった様です。

私の所では工業用ミシン、特殊ミシン等の業務用のミシンが多いので、技術を覚えるのには大分苦労しております。特に最近ではコンピューター関係が多くなり、それに加えて縫製附帯設備であるボイラー、アイロン、プレス、裁断機等、ミシン以外の事も勉強しなくてはなりません。一年に一度位は機械が直らず、食事も喉に通らず、夜も眠れないことがあります。これは技術屋の宿命ではないかと思っております。私も凝りだすと時間を忘れて夜中迄仕事をすることがありますが、最近は何のせいか翌日はかなりこたえます。

昭和六十二年に兄と別れ、遅まきながら現在の所に小さな自分の店を持つことが出来ました。従業員は女房と、昔からいる私より三つ年上の二人だけです。土曜日もなかなか休めません。

私は酒が飲めませんし、ゴルフもしませんので、人付き合いは良い方ではありませんが、気分転換のため日曜日にはソフトボールを楽しんでおりました。しかし、プレイするのが苦になり、最初は公認審判員の資格を取り審判員をやっておりましたが、段々体が動かなくなり、埼玉県で最初に公式記録員第一種の資格を取り、県大会などに派遣さ

れ県内をとり回っております。また、県西の副部長、県の常任委員として後輩の指導に当たっております。記録という仕事は、単に試合の経過を記入するだけでなく、投手の防御率、打撃率、守備率、試合の講評などをスコアシートに記入しますので、試合が終わってからが大変で、結構頭を使いますのでボケ防止には良いと思っております。

先日、入間市で全日本シニアソフトボール大会がありました。我々もまだまだふけ込む年ではないと思われました。大正生まれの選手も元気はつらつプレーをしていました。我々もまだまだふけ込む年ではないと思われました。御多聞に漏れず私のところも今不況で、二人いる息子も商売を手伝う気はない様ですが、何とか体の続く限り気だけは若く持って、女房と二人で頑張っていきたいと思っております。

最後に、このような企画をされた編集委員の皆様、発起人の皆様に深く御礼申し上げます。

大したことなかったなあ

肥 沼 正之助

アルバムを整理している時とか、ビジネスのある場面で前年比どうこう言っている時とか以外には、あまり過去を振り返るということはないようである。還暦といっても特別の感慨はないが、強いて言えば「大したことなかったなあ」という想いがある。ビジネスの面でも、社会的活動の面でも、いま振り返ってみて、たいした実績もなく五十九年経ってしまったなあという想いがある。たいしたことがあったか、なかったかの基準は何かと言われると困るが、

上場できるぐらいの企業の一つぐらいはできるかなあと思ってはいた。

上場どころか、この三年ぐらいは不況対策に大わらわの毎日である。会社の寿命は三十年とはよく言ったもので、当方がつくった会社・事業のほとんどは創業三十年といったところである。まだまだ元気でこれからというものもあるが、イノベーションを怠った店舗等はすでに青息吐息、おまけにこの長期不況、いつ撤退するか時期だけが問題なんというのもある。こんなリストラの日々が長く続くと、リストラそのものを楽しむような心境にもなってくる。将棋で言えば、元氣よく戦線に出て行った『銀』をやむなく自陣に戻し、「いい手だなあ、なかなか引けるものじゃない」なんて言って自らを慰めているようなものではあるが……。

先日、都内の同業者との宴席で、七十五歳になるある社長がつくづく、今迄の人生で最も楽しく充実していたのは六十代であった、という話をした。ビジネスは勿論のこと、すべてにおいて楽しかったというのである。その人は現在でも元氣そのものの、個人差がはげしい部分もあるので、すべてというのはどうかと思うが、全体の話は解るような気がした。その人が言うには、六十年の経験というのは自分だけが使える貴重な財産だという。この財産は使い方によっては実に楽しいものになるというのである。なんだかバラ色の六十代が待っているような気がしたものである。バラ色かどうか分からないが、健康でさえあれば、かなり期待できる六十代かも知れない。この拙文を書きながらそんな気がしてきた。

還暦を迎えての雑感

国府田 卓

定年一ヶ月前になって何となく気持ちが落ち付かない。

本日財形預金の解約及び健康保健の任意継続申請の手続きを行い、残すは厚生年金の手続きを完了することである。思い起こせば昭和三十九年九月にこの藤倉ゴムに入社し早や三十年の歳月が過ぎ去って行くのであるが、何か世の中の為になったかと思うと特にあげるものはない。ただ強いて云えば標準的な健康な家庭を築いて来たことかと思っている。

今は自分の出来なかった事を子供達に将来の夢を託していることである。

これからの第二の人生の考え方としては、健康第一とし、人に迷惑を掛けない様に心掛け、気ままな人生を送り度いと思っている。また縁があれば世の中のためになる仕事を心掛けており、ボランティア活動等参加したいと考えている。

還暦峠の茶話

小林 富雄

△病葉再生▽

こんな四字熟語は無い。私の造語である。子供の頃から病弱で医者通いの連続だった。高校時代などスポーツは禁じられていたから、各運動部の人達が遅しく練習したり競技する姿は、羨望的だった。

社会に出てからも結核で二年近くも療養したり、腕や足の関節リウマチという業病で十数年も苦しんだ。その他いろいろな病氣と道連れだった。にもかかわらず愚かな殺那主義か厭世観か、酒やタバコの暴飲、夜更かしなどの不摂生、今考えるとゾッとするような生活が続いた。そして五十歳までは生きられまいと思っていた。藤圭子の演歌ふうによれば「二十、三十、四十と 私の人生暗かった ……夢はいつひらく?」。——ところが不思議な事に、長い間の暗雲垂れこめる状態の片隅から、薄日が差してきたのは四十代の後半からだった。

△なぜ山へ▽

数年間地方に単身赴任して、車ばかりの生活をしたことがある。東京に戻ったとき、駅やホームの長い階段は途中で一回休まなければ上り切れないほど、足腰が弱くなっているのに愕然とした。

五十歳を過ぎてから、ひょんなことから山登りをするようになった。英国の有名な登山家、マロリーのように「そこに山があるから……」なんて名セリフは出ないが、病み付きになり毎年五十回の山行を目標にしている。重さ七、

八キロのリュックを背負って近県の山々を五、六時間歩くハイキング程度だが、夏期は信州アルプスや東北地方にも足を伸ばす。

こうして足腰が強くなったのは当然だが、心身に実感できるメリットは沢山ある。中高年の会員が三千人以上もいる山愛好会のボランティアとして、活動のお手伝いが出るのも幸せである。

△職業は賭？▽

「就職なんて賭さ」。むかし先輩から聞いた言葉を今でも覚えている。会社とサラリーマンの将来を、出世論の面だけで見るのはいかがと思うが、約四十年後、つまり定年退職頃のことなど誰にも分かりはしない。社会に出る時、いいスタートを切れなかった私には、それは慰めのフィーリングであった。

六十五歳までは勤める積もりでいたから、還暦を目前にして会社が行き詰まるというあっけない幕切れは、いささかショックだった。約三十六年に亘る私の職業という「三幕物の芝居」は、一円の退職金もない哀れなエピソードで終わったのである。長い間には当然、山坂風雨もあったが、花も見た。自分なりに仕事は一生懸命やった積もりだが、最後は報われなかった。その意味では負けだ。

でも人生の賭は、まだ残っている。

△一年単位で▽

十数年前から、年に一度、人間ドックに入っている。多くの病歴と若い頃のいい加減な生活のツケが回ってきやしないかと、多少の怖さを抱きながら十二月頃行くのである。毎回検査のデータで二、三注意は指摘されるが、ひとまずホッとする。そして、この調子では来年も一年位大丈夫だろうと、自分で自分を激励する。「一年位」というのは

悲観的な意味ではなく、これからは密度濃く生きたいので一年単位で区切ってみるのだ。

前述の通り、還暦直前に失業し、折からの不況と年齢的にも再就職は難しいので、やむなく年金生活に入った。経済的には楽ではないが、子供身障者のため少々のお手伝いをしながら、年間五十回目標の山登りや週一日の囲碁など、精神的には豊かで結構充実した日々を送っている。――感謝、合掌。

社会に貢献しよう

佐野和義

皆々様には、ご健勝にて還暦をお迎えのことと心よりお喜び申し上げます。

平成六年は戌年、私たちにとっては、暦の改まる歳です。

ここ数年は、バブルの崩壊で、景気は大変な混迷を極めておりますが、今年は何としても景気回復の年であってほしいものと切望して止みません。各企業とも、総じて業績が落ち込み、リストラ等により一層スリム化の方向に努力しております。また、私個人としては、平成五年監査役に就任、大転換の年になりました。

平成五年の商法改正により、監査役制度が充実されて監査役の責任が更に重くなりました。これは企業の業務執行の適正さを確保するためのチェック機関である監査役制度の一層の改善充実を図ったものです。今後は、この法の趣旨に則つとり会社繁栄のため監査業務に邁進する所存です。

経済界も大変ですが、政界も細川連立政権は発足しましたが、一年もたずに羽田総理の少数与党政権に変わり、その前途には多難なものであるようです。このような時に、だれか強力な指導者が現われることを切望して止みません。

この度、寄稿の依頼を手にしながら……還暦を迎えたことにつき、改めて歳月の流れの早さに驚くばかりです。「徳さん」を始め、「ゲジゲジ」「ヤンチ」「赤ジャガ」等々、名物諸先生方のお顔が大変懐かしく、そして何といっても強烈に思い出されるのは、「徳さんのおみくじ」です。

授業の度に、ガチャガチャと「おみくじ」の箱を振る「徳さん」……その時へ自分の番号が出ませんようにV祈ったあの時の気持ち、今はとても懐かしく思い出されます。また一年生の一学期、昼休みの時間に受けた上級生の「お説教」……それから部活の柔道で、古びた道場で汗を流したこと。校舎の建て替えて、冬の火の気の無い寒い講堂で授業を受けたこと。修学旅行で京都に泊まった時、祇園に行き明け方まで帰って来なかった者、そしてその翌日、京都の名所旧跡見学にバスの中で一步も外に出ずに眠っていた者。通学の電車の中で同じ方面の同級生との歓談等々……。高校生活の楽しかったこと苦しかったことが同期の方々の笑顔と共に、走馬燈のように頭の中を走り回りました。

それから四〇年、同窓の皆様には、各方面でそれぞれ努力され、現在は要職に就かれ、人生の頂上に到達されている方、または到達間近な方、あるいは既に後輩に譲られたという方々が多いと思います。そして、現在は皆様も社会人としての一区切りがつき、またはつきつつある方が多いのではないかと思料いたします。そして、徐々に時間的な余裕も出来つつあると思います。今では、恐らく突然会っても、経年のため解らないのではないかと思います。就いては、今までよりも多くの機会をもうけて、旧交を暖めてはと思う今日この頃です。

それでは、これからお互い体に気をつけ、社会に何らかの貢献をいたしましょう。

還暦を迎えて想う

塩 野 賀 一

此の世に、生を戴いて還暦の齢となりました。辛かったこと、楽しかったことが交錯し、あっと言う間の感じですが、まず、若くして逝った友、志半ばで不帰の客となった友に衷心から御冥福をお祈りいたします。

私は、塩野悟三郎・廣の子女六人の長男として、大井村（現大井町）大井二二の一に生まれました。父は、昭和二年に運送業を創業し、私の生まれた頃はハイヤー部も兼営し、事業の発展期でした。しかし、第二次大戦（大東亜戦争？ 太平洋戦争？）の戦局が後退局面に入る頃から物資の欠乏が始まり、終戦の前年にはガソリンの代用として槽薪の生ガスを使って自動車走らせるに至り、昭和二十年に入りますと商売どころではなく、本土決戦に備えるとのお達しで、父は地下足袋にゲートルを着け竹槍を担いで、所沢の飛行場へ集合し訓練をさせられるようになり、早朝に家を出る父の姿が今も臉にあります。百八十度変化する時代となり、両親は戸惑いながら真剣に立ち向かい、私達子供には「貧しくも心は豊かに」とよく申しました。素晴らしい両親と家族に恵まれたことに感謝しております。バブルがはじけ、資産デフレが購売心理を冷やして、かつて無い不況の時代といわれる今日でも、昔を想えばはるかに幸せな時代です。有難い世に生きていると思っております。

時にふれ、野尻抱影氏の星の話を思い出します。夜空の星のきらめき、牽牛織女の天の川、太陽系・銀河系大宇宙のビッグバン或はブラックホール等、造物主の偉大な世界です。宇宙飛行をされた向井千秋さんは、「地球は限りなくブルー（＝藍）で、品格があり荘厳でした」と語っています。大宇宙には地球と同じような条件にある星が百個ぐらいいろそうだと話に、夫々の星に夫々の私が存在して、私は百人の内の一人なのかしらなどと夢想した子供でした。

私は、中学一年の二学期、地元大井中学校から板橋区上板橋の私立城北学園中等部へ転校しました。中学卒業時に、同級生がサイン帳を交互に廻し、将来への希望と励まし、戒めを記し合い、今も大切にしています。川高へは、入学願書を自分で提出に行き、受付番号が一番でした。一番はこの時だけです。先生は個性ある方が多くおられ、今も忘れ得ぬ方ばかりです。とりわけ、国語の佐藤徳四郎先生は、江戸・明治・大正の国文学の授業、「獺祭」^{だっさい}誌と俳句会などは新しい目を開いてくれ、園芸部担当の岡田幹雄先生は、ラジオオラスを切り花にして学校の周りを行商しては、コッペパン（アンコとピーナッツバター入り）を買い食いする私達をやさしく見守ってくれました。運動部は、テニス部に三ヶ月、石井道場で柔道三ヶ月でした。自転車で二里の砂利道を通学していたためか、どちらも入門で終わりました。平成と改まった年の四月、誕生日を期して「満雄（みつを）」を「賀一（よしかず）」と改名しました。中三の頃、両親に連れられて法華経を教える会で姓名の鑑定をうけ、「賀一」の選名を教示され、爾来、通称として用いてきました。年月の経過により本名と通称が別々に歩み出し、不都合が生じてきました。このため父親の賛成を得て家裁へ改名の申し立てを致しました。審理した裁判官は「改名は一生に一回だけです。この許可の有効は無期限です。行政当局へ手続きする前に、よくお考え下さい」と付言してくれました。このようなことで法律手続きを済ま

せました。

父・母を語ると、きりがありません。仏教では四恩を教えています。「天地三宝の恩・国の恩・父母の恩・一切衆生の恩」です。本当に、お蔭さまで商売と世間様のお役を務めてこられました。

今日までの「お蔭さま」に感謝し、報恩のため今後も精一杯務めます。「吾思う。故に吾有り」。

今後とも、御厚誼、御教導を賜りますようお願い申し上げますとともに、お互い様健康で楽しい人生を!!

拙文叩首再拝

還暦の感慨

清 水 清

「五十にして天命を知り、六十にして耳順う」と言えども、その心境には程遠い。

甲戌の一巡が、かくも速いものであったとは、改めて反省せざるを得ない。経てきた途の長さに比べ、過ぎ行く時の短かさを想いながら、誇れることの何一つないことを猛省している。

顧みれば、国民学校へは防空頭巾を被って集団登校し、校門を入ると奉安殿に向かい最敬礼を行なうのが日常だった。航空基地の近くには住居があったため、米軍艦載機による突然の恐怖の機銃掃射に逃げ惑った記憶も生々しい。暗黒の夜に投下された照明弾は小動物を狙う怪鳥の落下物に見えた。爆音の中の真昼のような明かりの下を恐ろしさ

に身を縮めて防空壕に駆け込んだ。時には、重爆撃機B29が、一万米の高度上空を緑色の電光を放ちながら、悠々と南へ向かって飛行してゆくのを眺めていた。

警戒警報中は電灯に黒い布を被せたが、或る日明かりが屋外に漏れたらしく、見回り中の憲兵に兄が連れて行かれた。馬に乗った憲兵の後を裸足のまま走らされたという。やがて、東京絨緞爆撃を経て、人類史上初めての残酷な原爆が広島・長崎に投下され、無惨な多くの犠牲者を出して終戦を迎えた。天皇陛下による玉音放送も、その内容が直に理解されず、周囲の雰囲気から事の重大さを察した。

世の中は一新し、新制中学では墨を塗った教科書で学び、やがて分厚い「民主主義」と題する上下二冊の本が配られ、思想の大転換が行なわれた。あれから半世紀が過ぎた。

先日のこと、取引銀行から年金相談の案内状が来た。この時、還暦と定年退職の実感が改めて差し迫り、軽い身震いを覚えた。幸い今の会社に継続雇用となったものの、定年という響きは複雑な感慨を持つ。コップ半分の水を見て、「もう半分しかない」と思うのと、「まだ半分もある」と見るのでは大きな違いだ。残った半分の水も確実に減っていくが、深く味わいのある水にしたい。高度経済成長時代に我が身を顧みずに働いてきた同時代の一人として、今はこれからの生き方を問われていると受け止めたい。「人生わずか五十年」から驚くべき高平均寿命へと変わった今、まさに思考の切り替えが求められているのだと思う。思えば、昭和一桁に生まれ、昭和に育った我々が最も悲しんだ近年の出来事は、昭和天皇の崩御であった。歴代天皇の中で最長の在位であった昭和天皇は、御苦悩の程も最大であったであろうと思わずにはいられない。あの民を思う心と強い責任感を持たれ、自らを質素に生きる姿こそ世界に誇れる日本の象徴として永遠に日本人の心に刻まれることと思う。

司馬遼太郎という作家がいる。日本の歴史を平易に解説し、歴史上の転換期の鍵となった種々な人物を通じて、日本人の魂を活々と描写している。戦後の歴史教育はゆがんでいたという見方が定説だ。日本人の本当の姿は、いま司馬遼太郎の世界で学ぶことができる。「歴史は虹のようなものである」と、或る歴史学者が話していた。虹に近寄ってその正体を見れば、唯の雨滴にすぎない。しかし、遠く離れて眺めると七色の美しい橋になる。その大きな帯の流れを見極めねばならない。

「故きを温ねて新しきを知る」の信条を抱き、伝統と歴史を秘める日本を再発見し、日本人の真の姿を探し求めて、これから歩み始めようと思う。

還暦を迎えて

須 長 晃（旧姓・加藤）

「光陰矢の如し」の諺どおり、誠に月日の経つのは早いもので、いよいよ還暦をむかえる年となりました。昭和三十三年四月、現在の会社（第一火災海上保険相互会社）に就職し、恙なく過ごして参りました。金融機関であるため、転勤もまことに多く、本社（東京）を皮切りに、上野・横浜・八王子・大阪・仙台・福岡・徳山・千葉・札幌と、ほぼ三年きざみで全国を巨り歩いてきました。今ではやっと肩の荷も降り、「本社保険相談室」（平成七年三月末退職予定）に在職中です。

先般、三十五年ぶりに川越市駅を下車し、市内を散策する機会を得ました。完全に昔の面影もなくなって、立派な近代的ビル街に変えられているのにびっくりしました。母校や喜多院・鐘つき堂等々目の前にし、少しばかり当時の面影を残しており、若き日の想い出に耽る時をもちました。

今はやや体調をくずしたため、好きだったゴルフやドライブを止め、専ら音楽鑑賞、食べ歩きなど……、神の助けと恵みの中にあつて平凡な日々を送っています。六十歳といえどもやと鼻垂れ小僧から脱却した程度のもので、これからの人生を生き抜いていくために、更に老骨にむち打って進む事が大事だと、思いを新たにしているところです。太平洋戦争の勃発、また終戦、二十世紀後半の激動の時代を生き抜いてきた私達、二十一世紀にむけて、世界は益々混乱し、国内外の政治経済など更に困難な時代に差し加かつてきていると思います。長期間に亘り培った体験を活かし、周囲の環境や情報等に振り回される事なく、力強く生き抜いて参りたいと思っています。

還暦を迎えて

染 谷 潔

皆様も御承知の通り、我々昭和九年生まれの干支が甲戌、昭和十年生まれの干支が乙亥であり、丁度六十一年目に同じ干支がめぐって来る事を還暦といつて居ります。その年号に特別の意味を持たせて、大海人皇子が友友の皇子を近江で攻め滅した年を壬申の乱と言ひ、壬申の年には革命的な事柄が起きるとか、丙午生まれの女性は強すぎる等の

言い伝えもありますが、確かな事とも思われません。然しながら、我々が同時代を六十年間共に生き続けて来て居り、同時代人としての感性を身に付けていることはまぎれもない事実であり、特に多感な青年時代を三年間同じ校舎の下で過ごし、我々しか知らない共通の経験を共有している者として、感慨深い六十年目であると思います。

例えば、佐藤徳さんに毎月十句の俳句を作らせられたとか、「曾根崎心中」の道行きの場面を暗唱させられた等は、他の学校を出た者には全く解らない事柄になるわけです。我々の過ごした年間は食糧事情もまだ余り良くない時であり、また校舎の改築期に当たっていた為に、講堂を二つに分けた教室であったり、朽ちかけた北側校舎で地震の度に及び腰になったりした不便な思い出の方が多いわけですが、苦勞をしたり不便な時を過ごした時の方がむしろ印象強く、また懐かしく思い起こせるのも不思議なものです。また、戦後の混乱期の故に通常では考えられない様な名物的な先生がいらっしゃった事も事実です。疎開で、本来ならば都内の一流校に居られる筈の先生方にも教わる事が出来たのです。英語の木島平四郎先生は、当時の東京商船学校の教授であり、話も雄大で、「君達、陸上のスポーツで一番はやっぱりスキーだぜ。ニセコアンヌプリで滑ってみろ。あそこはどてっ腹、でっかいぜ。水上ではヨットだな。夕日を浴びながら東京湾を港へ戻って来る時なんぞ、いい気分のもんだぜ」などと言う江戸弁を聞いては、田金者の我々は度肝を抜かされたものです。

さて、暦が還って運勢学上から言えば、一からの出発となる様です。実生活においても、六十歳というのは、停年を迎える年であったり、仕事でも家庭でも変化の多い時と思います。孔子は、六十歳を「耳順」と言いました。人の話を聞いて成程と納得出来る年齢になったと言う意味ですが、人格的にも経験から言っても、これからが本当に、世の為・人の為にも役立ち、自分自身の人生を勝利に導ける最良の時を迎えようとしている訳ですから、六十歳を踏み

台にして、より発展をしていく様に頑張ろうではありませんか。

還暦追想

田 口 晨 一

ひところ大変人気のあったテレビの某クイズ番組にでも登場してきそうな、「小学校へ一日も通ったことのない」世代。私達戊亥の人間を象徴的に説明している言葉のように思う。人生、育ち盛りの大切な少年期を大東亜戦争の真っ只中に過ごしたものだから、ろくなものは食べさせてもらえず、戦争末期には、きのうも空襲今日も空襲と、落ちていて学校の授業を受けていられない日が続いた。私が生まれ育った人間川の町は、陸軍の飛行場があっただけに、余計ひどかったであろう。

終戦後、中学（旧制）の受験はあるんだろうということで、受験準備のような課外授業が始められた矢先に、降って湧いたような学制改革「六・三制」。独立した自前の校舎を持っていれば良い方で、教科書は揃わない、机や椅子も充分でない、という環境のもとでの新しい中学校生活ではあった。

考えてみれば、今の子供達とは随分と違う学校生活を送ったものだ、つくづく感じざるを得ない。そんな状態から入った川越高校での生活は、私にとって実に新鮮で刺激に富み、実りの多い三年間であった。入った当初は、毎日が驚きの連続であったし、個性豊かな先生達の指導は、その後の人格形成に大きな影響を与えてくれたと思っている。

特に私の場合、高校受験を目前にして父を失い、あわや「高校受験も諦めか」という状態に追い込まれ、まだまだ世相も混沌としていた中で、先行きの方向性を失いかけた後での高校入学であっただけに、高校入学は大きな節目となり救いとなった、と思っている。

川高時代は実に懐かしく、今でも新鮮に蘇える。当時の写真は、その頃の生活を髣髴とさせる。お世話になった先生方が、何と若々しく写っていることか。当時から四十年以上も経過してしまったとあれば、その頃の先生方と私達は年齢的に、今逆転してしまっているわけだから、懐かしさもひとしおである。今は死語になってしまっていると思うが、かつて「新制」という言葉が私達世代を指して使われたことがあった。当時、世間の目から見れば、体力的にはひ弱で教育程度も低い、先行き心配な世代として私達は写っていたのであろう。何か質の悪いものの代名詞のように使われる響きがあつて、私はこの言葉が嫌であつた。今の子供達と比べれば、雲泥の差があるような、恵まれない生活を送った私達であるが、それでも振り返ってみじめな感じがしないのは、いささか時間がたち過ぎたためだろうか。少年期特有の旺盛な好奇心をもって子供ながらに世の中を見、得るところがあつた、ということなのだろう。激変する世の中に、体を張って立ち向かっていった大人達世代の影にかくれ、戦争前後の世の荒波をわずかに避けて通れた私達は、運が良かったと思う。そうでなければ、こんなに多くの同輩が元気にうち揃って、還暦祝いをしようなどという事にはなっていないのではないか、と思うのである。

人生五十年と言われた時代とは違って、還暦も人生一つの通過点にすぎなくなり、皆元気でいられるわけであるが、大方のサラリーマン族には定年があり、人生大きな節目であることにはかわりない。「新制」の申し子とはいえ、日本経済の高度成長の一端を担ってきたという自負もあり、いささか仕事人間であつた私達。これからは立場を変え、

健康に留意して、いつまでも元気で、世の中の動きを見守っていききたいものである。

還暦を迎えて

當 麻 孝 義

数年前、勤務先の先輩が還暦を迎えることになり、今時、赤いチャンチャンコでもあるまいと、赤い帽子に赤いポロシャツ、そしてズボンは、まさか赤にするわけにもいかないので、こちらは赤のタイツにして、今風還暦セットを贈ったことがあったが、今度は自分の番になってしまった。

還暦の意味については、川高時代、国語の時間に佐藤徳四郎先生から、十干と十二支の組み合わせなども含んで、くわしく説明されたことを覚えている。その時は、ただ漠然と、六十歳になるとあと少しで二十一世紀だが、それまで生きていられるだろうかなどとボンヤリ考えていたことを想い出す。

六十年の来し方を振り返ってみると、実にさまざまな出来事があったわけであるが、今考えてみると、ほんの束の間のような気がする。その中には、長い長い一日もあった筈なのであるが、六十年という年月を過ごしたことを思い合わせると、改めて時の流れの速さに驚くばかりである。

過ぎてしまったことを顧みても仕方がないので、あまり考えないことにしている。ただでさえ、若かった頃のこと、は、失敗と挫折の記憶ばかりがよみがえってきて、恥ずかしさと悔恨にさいなまれるので、出来るだけ見て見ぬふり

をするほかない。そんなことよりも、今後のことに思いを巡らし、前向きに過ごしていきたいと思っている。ただ、肉体の老化という鬱陶しい問題は避けることのできない厳しい現実なので、せめて気持ちだけは若くありたいと考えている。これからも、好奇心をより旺盛にして、未知の扉の前では胸を躍らせるような感性を持ち続けたいと思う。ランボオの詩の一節ではないが、「まだまだ前夜だ」というような気持ちでこれからの人生を送っていききたいと思っている。

還暦を迎えて

中 根 甚 一 郎

本年四月に、子供達や教え子から還暦を祝われ、はじめて「俺も六十歳になったんだなあ」と実感させられた次第である。しかし、本音を言うと、とても還暦などという感じではなく、自己認識ではせいぜい四十歳代、T・P・Oによつてはまるで青年、時には川高時代とそんなに変わっていない、などと思うことさえあるのである。

昔と比べて、日本人の平均寿命も大幅にのびたし、生活環境も大きく変わった。したがって、肉体的にも精神的にも今の六十歳は昔の四十〜五十歳位ではなからうか、と推測しているのである。

そこでこの機会に、少年期の川高時代と現在とでどう違うかを、小生の場合で比較を試みてみた。即ち、

△若かりし川高時代▽

気 力 自然に生成

体 力 限界知らず

根 気 猪突猛進

記憶力 並

運動神経 並もしくは並以上

精 力 鼻血ブー

勉 学 嫌い

喧 嘩 後輩の仕返しに頻繁に他校生へ殴り込み

山 気 その片鱗あり

年齢に対する意識 考慮外、考えたこともなし

△還暦を迎えた現在▽

必死に振り絞るが、後が続かない

気力でカバーすれども、すぐへばる

常に言い訳、撤退を準備

ガタ落ち

衰退の一途

使い果たし、枯渇

相変わらず好きになれない

恵比須様風の諦め

未だ消え去らず

せいぜい四十歳前後の感じ

右のような試みをした結果は、小生にとって少々の驚きであった。俺は還暦になっても、いまだ若々しい青年あるいは壮年であると自信(?)を持っていたつもりであったが、どうやら、この認識は自信過剰であり、「ごまめの歯ぎしり」であったかも知れないと思いはじめたものである。ドンと落ち込んでしまった。しかし、これは小生の人生に、一つの転機を与えてくれそうにも思えるのである。

これまで我武者羅に走ってきた道を振り返り、次の新しい道、人間にとっての天真爛漫な生き方を模索するきっかけ

けになりそうである。そう考えると「還暦もまた楽しや」ということになってくるのである。あせらず、じっくり歩きたいものである。

第二の人生も有意義に

二 井 恒 夫

長い様でも短い様でもあった私の人生も、還暦という一応のけじめを迎える時期に至りました。が、幸か不幸か数年間は現職を継続せざるを得ない状況で多忙な毎日を送っております。何分にも肉体的精神的にも無理のきかない年代に入っている訳で、調整に苦労をしている現況です。ここに我が人生の過去を顧みますと、名古屋で生まれ仙台、新潟、中国の青島、旧満州、北朝鮮、そして終戦後は秩父、川越と青少年期は目まぐるしく転校を余儀なくされ、望んでも出来ない様な貴重な体験を味わう事の出来た事は、この世に生を得てこの上ない幸せであったと痛感しております。また、社会人になってからも、折しも日本経済の成長期にて我武者羅な日々を突っ走ってききましたが、半面、ヨーロッパ、アメリカ、東南アジアの諸国を何度か訪れるチャンスに恵まれ、見聞を広める事等、変化に富んだ人生を過ごせた事は幸甚の極みであったと思っております。そんな中で多感な青春時代、即ち高校時代が何といっても一番印象深い無垢な一時期であり、未だ昨日の様な錯覚を感じており、佐藤徳四郎先生を筆頭にそれぞれ特色のある諸先生方の教えを乞う事が出来たことが、走馬灯の様に思い起こされます。もうすでに他界された先生もおられると思

いますが、ここに心より感謝申し上げると共に心よりご冥福をお祈り申し上げます次第です。

今日、産業の空洞化がさげばれ、生産の拠点が海外に移行し、バブル崩壊に始まり価格破壊、雇用破壊、賃金破壊と、あらゆる面で戦後最も厳しい時代に入っており、回復は非常に遅くなるといわれておりますが、与えられた第二の人生を有意義に悔いのない様努力したいと念じております。「年々歳々花相似たり歳々年々人同じからず」としみじみ感じており、今年還暦を迎えた私の場合、本当の意味の還暦はもう少し先になるかと思いますが、川越高校第五回卒業生の一人として今後共御交友の程よろしくお願いする次第であります。最後に、同窓会関係のお世話役の方々のご努力に心からの御礼を申し上げます。

還暦を迎えて思うこと

野 本 智 行

平成七年は亥年であり、昭和十年生まれは正に、還暦を迎えることになる。今迄は自分の年齢について余り意識をしたことがないが、そろそろ脳細胞の老化現象が始まっているな、と感じることはしばしばである。自分では若いつもりでも、種々なことが面倒くさくなってきたのは事実であり、記憶力とはみに悪くなった。人の名前がなかなか思い出せない、物忘れも結構する。定年とは、この様な事象を確実に自覚する年齢を意味するのもかも知れない。日本も世界一の長寿国となり、職業柄、毎日多くの高齢の患者に接するが、六十歳を過ぎててもまだまだ元気で働けそうな定

年退職者も多い。厚生省は六十五歳以上を老人としており、二十一世紀になれば四人で一人の老人の面倒を見なければならぬという。

働く気力のある人は、高齢者であってもまだまだ老人ではない。老人は大体、気力が弱り、背中を丸めて下を向いて歩いている人が多い。老人になりたくないなら、上を向いて歩くことである。

我身を振り返ってみると、最近は一週一（サンデー・ゴルフ）のゴルフを楽しんでいるが、コースに出れば最低十キロ以上は歩く計算になり、アップ・ダウンのきついコースでは心臓に負担を感じることもあるが、脚力・体力では極端な衰えを感じることもそれ程ない。飛距離などでも、最近のゴルフ道具は飛ぶヘッド、飛ぶシャフト、飛ぶボールと、科学的・合理的に出来ているので、年下の仲間とやっても、それ程ハンデを感じることもない。また、十数年前から仲間に誘われ、時々、絵筆（油絵）をとるが、気分が乗ると二、三時間があつと言う間に過ぎてしまう。集中力はまだまだある様に思う。

還暦を迎えて改めて思うことは、まだ六十歳だ、健康管理さえうまくやればまだまだ老いを意識することなく、仕事に趣味に頑張っていけそうな気がする。また、そうあるべく、前向きに生きて行きたいと思う。さる先達の言葉に「心を若く持てば青春は永遠にその人のものである」と。

還暦を迎えて

橋 本 充 夫

今日、勤め先で退職準備説明会の参加申し込みをした。子どもも皆成人し、娘の挙式も決まって安堵しているとこそである。思えば夢を追った若者の頃、仕事に打ち込むことができた実年期、やや老いを感じる最近まで、太過なく生活できたことに感謝している。信長の昔は、人生五十年夢まぼろしの如くであつたであらうが、今の日本は長寿国・長寿社会、還暦を迎えたこれからが生涯学習の大切な時期である。

今、六十の手習いをはじめたばかりである。まだ、これかもしれない・あれもしたいという思いで一杯であり、その道に打ち込めるほど気が乗っているわけではないが、趣味もなく苦もなく仕事に追われていることが努力家と心得て、子どもたちとの生活を唯一の天職と想って、家と学校を実直に往復したような者にとっては、このあたりでやっと憩いの泉を発見できたという喜びを強くかみしめている次第である。その師とする人が竹馬の友であり、同窓生であることも偶然のことながら因縁浅からぬものがあるように思えて、有難いことであると思っている。幼少より書を習い始め、小学生の頃の図画の時間には、飛行機を描くことがうまくてとても人気者であつた。中学時代は六三制野球ばかりがで、巨人や阪神などの文字をケシゴムに彫ることがはやつたが、これも上手であつた。でも高校時代は書道の時間以外、あまりパツとしなかったと思う。が、今輝いて見える。

私は高校時代、総じてよい思い出がない。それは入学直後の母の死のショックに長く立ち直れないでいたからであ

る。浪人覚悟で途中から進駐軍で働いていたが、卒業の四月には父も亡くしたからである。しかし、この場合は逆に自覚が高まり、意欲的な生活態度になれたのである。この大きな違いはやはり高校三年間の教育成果ではないかと考えられて、感謝せずにはいられないのである。

徳しろ!!・かけぞう・ゲジゲジなどと、よい先生も多かった。先輩の厳しさも胸のときめきも今は懐かしい。つわものどもが夢の跡。先日、妻と日曜日の母校を訪れた。正門の楠ノ木の成長に驚き、ひっそりした校庭と落ち着いた校舎のたたずまいに、しばし呼吸をやすめた次第である。

去年は、同窓より副知事誕生の明るいニュースもあった。今後とも益々、諸兄のご発展ご多幸と、輝かしい伝統ある母校の充実を祈念する次第である。

還暦を迎える男のひとりうた

日 高 和 美

三十六年間、教職という人を育てる仕事に従事してきた。相手は、子供という存在ではあったが、人を育てるということは如何に難しい事かを身をもって体験した三十六年間だった。

人を育てることを、家庭では育児といっているが、「育児は、育自に通ずる」の言葉の通り、この間は自分を育てる為の自分との闘いの期間だった様に感じる。しかし、育児が育自に通ずるという言葉並べる割には、他人様から

褒められる様な姿にならないまま、還暦を迎えることになってしまった。いささか残りの気持ちとうしろめたさの気持ちで渦巻く今日この頃である。

私が教職の現役（附属大泉小）の頃、ある子供からこんな質問を受けたことがある。

「先生、『人』と『人間』と、どう違うの……？」

という問いである。私は、はたと困ってしまった。そしたら、他の子供から救いの言葉が入ってきた。

「『人』は『人間』より、『間』抜けだよ。だから『人間』の方が……。」

と言うのである。「うむ……。二本取られた感じであった。」

『間』が抜けた存在。それが『人』なのかも知れない。一人では『間』を置く必要がない。一人では『間』を感じない。『間』が抜けた存在は、如何に空虚であじけないか。『間抜け』という言葉は、それらを揶揄しているのかも知れない。

教職に籍を置くと、常に子供達から教えられる。まさに育児が育自につながる例である。

人間、人と人とのつき合いが疎い間は、間が作れない。間を意識できない。このような姿の中で、段々と間抜けに近づいていくのかもしれない。幸い私は、人生の後半において、教師以外のよき友に恵まれた。ゴルフに誘われ、飲み会で鍛えられ、間の大切さを教えられた。「かつ」ときた時に間を置く術、間髪を入れるべき時の瞬時の判断、身の処し方。よき友が、遠慮を忘れて教えてくれる。本当に有難い事と思っている。

「忙中閑あり」という言葉があるが、これからは「閑中忙あり」への転身を考えなければならない。還暦を迎え、『閑』の中にどう『忙』を求めるかが急務になってきている。これからの人生を閑の中に忙を求め、多くの友人に接

し、多くの友から学び、多くの友と苦楽を分かち合える事を樂しみたいものと思っている。

人と人間との狭間から学ぶ人生。残る生涯学習をどのように位置づけるか、今からうずうずしている。恋人に逢う心境である。

最後にこんな詩を口づさんでみる心境になった。

「ボケずに長生きしなはれや」

一、年をとったら 出しゃばらず

憎まれ口に 泣きごとに

人のかげ口 愚痴いわず

他人のことは ほめなはれ

聞かれりゃ 教えてあげても

知ってることも 知らんふり

いつでも阿呆で いるこっちゃ

二、勝ったらあかん 負けなはれ

いずれお世話に なる身なら

若いもんには 花もたせ

一歩さがって ゆずるのが

円満にいく

コツですわ

いつでも感謝

忘れずに

どんなときでも

「へえおおきに」

三、お金の欲を

すてなはれ

なんぼゼニカネ

あつても

死んだら

持っていきまへん

「あの人は

えゝ人やった」

そないに人から

言われるよう

生きてるうちに

バラまいて

山ほど徳を

積みなはれ

四、というのは

それは表向き

ほんまはゼニを

離さずに

死ぬまでしっかり

持ってなはれ

人にはけちと

言われても

お金があるから

大事にし

みんなベンチャラ

いうてくれる

内緒やけど

ほんまだっせ

五、昔のことは

みな忘れ

自慢ばなしは

しなはんな

わしらの時代は

もう過ぎた

なんぼ頑張り

力んでも

体がいうこと

ききまへん

あんたはえらい

わしゃあかん

そんな気持ちで

おりなはれ

六、わが子に孫に

世間さま

どなたからも

慕われる

えゝ年寄りに

なりなはれ

ボケたらあかん

そのために

頭の洗濯

生きがいに

何か一つの

趣味をもって

せいぜい長生きしなはれや

(編集部註・作詞／天牛将富、作曲／斉藤 強)

還暦と遺言

深 田 繁

還暦などまだまだ先の事だと考えていたが、時の流れは早いもので、目の前に来てしまったようである。あれから四十年経ってしまったのであるから当然でもある。

還暦となって、なんといってもインパクトがあるのは定年である。これはサラリーマンである以上、避けて通れない道でもある。自分も国家公務員として勤務していたが、昭和四十六年に退職し、所沢市内において司法書士事務所を開業し現在に至っている。この二十数年間の仕事を通じ、また裁判所の調停委員として担当した色々な事件に遭遇し、また経験したことを、参考になればと思い書いてみた。その前に、私共司法書士の職種を説明しますと、ご承知の方も多いと思いますが、不動産に関する登記手続きの代理、会社の設立及び新株発行による変更等、登記手続きの代理、供託手続きの代理、そして裁判所・検察庁に申請する書類の作成、審査請求の代理を法律上の職務内容としている。

最近、私共のところには相続に関する手続きの依頼が非常に多くなってきた。我々が高校時代には食うか食われるかが問題であり、その当時の親としても不動産の所有については全く手が届かなかったことから不動産の所有率は少なく、当然借家が多かったことから相続問題は深刻ではなかったのである。現在では衣食足りて住に対する関心が強く70%の世帯が持ち家となっているようである。よって、不動産を所有している人が死亡した場合、必ず相続問

題が発生し、親子及び兄弟間がスムーズに行っておれば問題ないが、私共のところに相続登記の相談にくる60〜70%ぐらいは問題があり、そこで兄弟間にて壮烈な争いが起こる。従って裁判所の調停に持ち込まれる事件の多くを相続問題が占めているようである。これを何とか予防するにはどうしたらよいか、について還暦になった皆さんは考える必要があるのではないかと思う。では、どうしたらよいかについては、ケースバイケースで若干異なると思うが、私の経験からすれば遺言の活用がよいと思う。遺言は難しいと考えている人が多い。公証人の作成した公正証書遺言の場合は問題ないが、証人二名が必要であり面倒であると言う人もいる。それでは最も簡単であり一定の要件を具備すれば有効である自筆証書による遺言はどうだろうか。この場合は、遺言者がその全文、作成した日付及び住所氏名を記載し印を押せばよいのである。よって遺言の内容についても、例えば「長男何某にはA市B町一丁目一番四宅地一五五五・次男BにはA市B町一丁目五番五宅地一二二五を相続させる」と記載し、他の者は相続しないとの遺言内容を記載すれば遺産分割の指定となり、この遺言書のみを司法書士事務所に持参すれば、長男または次男がそれぞれ単独で相続登記をすることが可能となる。また、遺言書を作成後、その内容を変更したければ、同様に遺言を作成すれば一番新しい日付の遺言が効力を有する。最もこの遺言は、遺言者の死亡後速やかにその遺言書を家庭裁判所に提出し、検認してもらう必要があるので注意を要する。そして相続人でありながら遺言書で相続分を受けられなかった相続人は、自分が本来受けることのできる相続分の二分の一または三分の一を遺留分として、相続分を超えて相続した相続人に対して遺留分減殺請求をすることができる。ただし相続の開始を知ってから一年以内に限りできるのである。

少なくとも、まだまだ先の話だと思う人が多いと思うが、還暦を迎えた皆様方も遺言についての考えを頭の隅にお

くことも良いかも知れないと思い、ここに雑文を書いてみた。

おじいちゃんになった

松 木 栄 二（旧姓・細田）

今年の四月三日に、女子の初孫が誕生した。

山頭火甲戌の年、還暦を迎えた今日、私も赤いチャンチャンコを着て、赤ん坊に返るといわれているこの年回りだけに、何ともいえない喜びで一杯である。

私の日頃親しくしている同業の仲間二人も還暦を迎えたが、偶然にも男子の初孫を互いに誕生した。今三人は、おじいちゃんと呼ばれながら、近い内に初孫を抱いて還暦祝いをしようと計画中である。

編集後記

加藤 博之

還暦を記念して文集を出そうと誰かが言い出した。誰でもいい。グッドアイデアだ。どんな形にせよ自分の思いや、人生の足跡が活字になって残る。小篇ながらそれぞれの自分史である。素晴らしいことだ。

早速に刊行委員会が結成された。編集を引きうける羽目になった。

スタートしたのは一昨年十一月（一九九三年）。一年半以上もの「難事業」になってしまった。

川越高校第五回生は卒業時三一八名。すでに鬼籍に入った人が三十二名もいる。せめて半数の諸兄の寄稿をと思い、〆切りを二次、三次と延ばし刊行委員会メンバーによる電話作戦も行ない、ようやく百十三名分が集まった。

いずれも力作。それなりに読ませる文だ。「ダテに六十年は生きていないな」と率直に思った。と同時に川高卒業生の知的水準の高さを感じた。これは誇ってもいい。社会に出て歩んだ道はそれぞれ違って、そのなかで自分を見失わず、人生をしっかりと生きてきたことを感じさせる。まさに「人に歴史あり」だ。

恩師の方々にもお声をかけた。結局は小泉功先生おひとりのみの玉稿となった。いまもお元気で史跡研究分野で活躍されている。喜ばしいかぎりだ。

卒業生のなかには連絡先不明者も若干いたが、応募が半数にも満たなかったのは編集長の力足らず、不徳の至すところ、ご勘弁いただきたい。

原稿はタイトルを含め出来うるかぎり原文に忠実にした。〆切り日と刊行日が一年ちかくずれた人もおり、タイム

川越高等学校第五回生還暦記念誌

「それぞれの旅」

平成七年六月発行 限定出版・非売品

発行

埼玉県立川越高等学校 第五回生
還暦記念誌刊行委員会

編集人 加藤 博之

発行人 染谷 潔

印刷
製本

(有) キタダ印刷

〒359 埼玉県所沢市上新井一〇五
電話 〇四二九―二二一―五二一

